進ドイツ讀本

512.34
Ku.72

黑田禮二著

新潮社出版

本讀ツイド進

312.34
Ku.72

黑田禮二著

新潮社出版

57

312.34
Ku72

黑田禮二著

躍進ドイツ讀本

新潮社出版

80

著者の言葉

本書は單に今日のドイツを忠實に紹介する積りで書いたものではない。私の觀たドイツを私一流の頭(あたま)で解釋し、私達と大體考へを同じくするわが日本の若い青年男女諸君に、彼等がこれから新しい日本を、背負つて立つて行く道しるべの一つとして、何かしら示唆ともなり指針のよすがともなるものを、提供したいが爲めに筆を執つたものである。

だから『躍進ドイツ讀本』との題目を御覽になつて、何かドイツに就いて人の知らぬ新しい知識を拾ひ出さう、といふ讀者があるとするなら、本書はその人々に、大變な失望を與へはしないかと心配する。ドイツ事情の客觀的な紹介

なら、今更私など飛び出す必要はないのだ。今日は『ドイツ』が流行する世の中だから——尤もドイツは日本だけで流行するのぢやない、要するに世界的流行なのだが——從つて四五年前からドイツに關する書物なんか、古い言葉で言ふなら、汗牛充棟も啻ならぬ程ある。現に私のやうにあんまり讀書しない人間の机の上にだつて、ドイツに關して最近いつの間にか出版された新刊の書が、三四十冊も載つかつてゐる次第である。それに新聞の外電は毎日の如く、ヒットラア總統の動靜や、英獨戰の華々しい展開の結果など、手にとるやうに報道してくれるので、苟も毎日の新聞を忠實に讀んでゐる限り、ドイツに關する新しい知識など、別にこれ以上蛇足を添へる必要もないだらう。

だが私には私としての野心がある。私はドイツといふ一つのトピックスを捉へて、私の日本人として抱く世界觀を、田舍の津々浦々に居られる若い諸

君へ、何か魂の訓練に一助となる教科書の一片が書いてみたかつたのだ。要するに私の世界觀だから、これはどんな題目の中に盛り入れても結構である。所が私にとつては、他の容物を使ふよりも、私自身多少ドイツに長くゐて、ドイツに關する見聞も割合廣いといふ取り得だけを私の資格と考ふる限り、矢張り題材を、ドイツに採つた方が一番便利なのだから、從つて斯ういふ書物の體裁としたといふに過ぎない。

繰返して申上げる。この拙なき書物は、決してドイツ研究の完全な資料でも、學問的參考書でもない。私の如是我觀によるドイツの魂を、純眞な青年諸君へ、一片のフキルムをお見せするやうな積りで展開させ、それによつて彼等が自己の判斷によりて、この新しい盟邦のドイツから、他山の石としてどれ丈けのものを學ぶべきか、又どれだけのものを盟邦の青年に教へてやつ

てもいゝかの、素材を提供するのが目的なのである。

ドイツのやることが、何から何までみんな正しい譯ではない。又ドイツに正しくとも、日本にはその本質的な差異からして、眞似をしようにも出來ないことが極めて多いだらう。だが今日の狀態では、わが國の政治經濟文化の體制も、新しく變りつゝある過渡期であつて、ドイツのやつてゐることを、形式だけ鵜呑みにして、之を實施してゐるやうな場合も尠いとは言へぬ。さういふ場合に若い諸君は、その精神がどこから來てゐるか、その魂は何によつて起つたかの前後の事情を賢明に判斷する必要があるだらう。ドイツのやうな他所のことなど、どうでも宜いとの態度もいかん。又ドイツのやることは、何でもかでも之を模倣するやうな心構へでも、決していゝ筈はない。何よりも先づ日本自身の姿を把握し、日本の將來のために、ドイツの在りし今迄の體驗が、

どういふ參考になるかといふ點を、深く理解するのが何よりも大切である。

それにしても、ドイツが過去二十年間に起ち上つて來た姿は、慥かに世界聳動の驚異である。國家構築と民族精神高揚の、見事な完成藝術品である。ヒットラアといふ偉大な詩人が書き上げた臺本によつて、ドイツ民族が血と汗を流しつつ、舞臺で演出してゐる立派な戲曲なのである。私達はそれに醉ふことができる。それと同時に私達は、あの博士ファウストが、その第一卷の始めに、

『おゝ何たる驚くべき芝居ぞや！

だがやつぱり……芝居は芝居ぢや！』

と叫んだ文句をも、念頭から離してはいけない。ナチス・ドイツの復興の歴史は、なるほどドイツ人にとりては、血みどろになつた生への爭鬪に違ひない。然し私達にとりては、それは『やつぱり芝居は芝居』なのである。

さういふ氣持を須臾も離してはならぬと思ふ。私達日本人には日本人として、爲すべき本當の仕事がいくらでもある。それを私達は芝居でなく、本當にやらなければならない。たゞこの私達に與へられた光榮ある日本精神高揚の大事業に對し、ドイツの立派な芝居を見ることは、何よりも生きた教訓になる！

といふ所へ重點を置いて、私はこの小著を氣安く脱稿した。

皇紀二千六百年十月二十日

建依別の故郷にて

黑田禮二

目次

第一編　混沌より秩序へ（戰敗直後のドイツ）……三
一、戰ひは負けてゐない……四
二、何よりも先づ署名から……七
三、平和の寸斷……一三
四、戰爭の目的……一七
五、プロシア主義の行動……二三
六、ボッシュが拂ふさ！……二六
七、イギリスとフランスの立場……三一
八、第三の觀點……三六
九、カップ博士とリュットヴィッツ將軍……四一

一〇、官僚と秩序の維持……四六
一一、四百の祕密結社から……五一
一二、政治の『渾沌』と政治の『對立』……五六
一三、一揆に不手際なドイツ人……六〇
一四、生活改善の手段としての選擧……六四
一五、大インフレーションの眞因と實情……六八
一六、均衡外交とマルク貨の安定……七九
一七、自由主義による復興……八四
一八、ドーズ氏のパイプの煙……八八
一九、ロカルノと聯盟加入……九三
二〇、繁榮と合理化……九九
二一、外には統一、內には分裂……一〇四

第二編　秩序より復興へ（ワイマア憲法下のドイツ）……一一

一、ナチスの生誕……一一
二、民族主義者としてのアドルフ・ヒットラア……一二三
三、政綱の政黨……一二六
四、ミュンヘン一揆……一二四
五、ナチスを支持する人々……一二八
六、全體主義的國家の新構築……一三三
七、國憲の長期睡眠化……一四一
八、舊政黨解消の意義……一四七
九、指導者原理とは何ぞや……一五二
一〇、第三國家への邁進……一五九
一一、藉すに四年の歳月を以てせよ！……一六五

一二、ナチス的選擧＝衆議統裁……一七五
一三、總統への信賴……一八一
一四、血腥い清黨事件……一八七
一五、雨降つて地固まる……一九二
一六、ドイツの底力は地方にあり……一九八
一七、全國食糧團……二〇三
一八、大都市人口膨脹の制限……二一一
一九、血と土と……二一四
二〇、商工業への施設……二一九
二一、信任者會議と勞働者問題……二二四
二二、勞働戰線と「歡喜による力」……二二九
二三、勞働奉仕制の國民教育目的……二三二
二四、新計畫による輸出入制度……二三七

二五、金貨準備なき貿易と生産擴充……二四二
二六、ナチスの文化統制……二四六

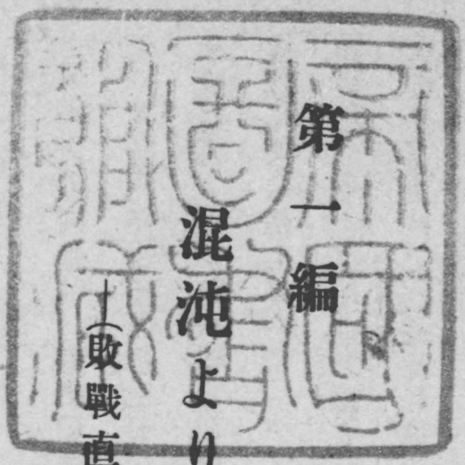
第三編　復興より躍進へ（ナチス治下のドイツ）……二五三

一、まづ聯盟と軍縮會議の脱退から……二五四
二、獨波不可侵條約……二五八
三、ザール地方の歸屬戰……二六三
四、再軍備の爆彈宣言……二六七
五、ラインの進駐とロカルノの破棄……二七三
六、日獨伊防共協定へ……二七七
七、ベルリン＝ローマ樞軸……二八二
八、チェコスロヴァキアの死……二八五
九、獨蘇不可侵條約……二九一

一〇、ポーランド殲滅戰……二九七
一一、宣戰された平和……三〇二
一二、北歐の電擊戰……三〇九
一三、コンピエーニュからコンピエーニュへ……三一二
一四、アルビオン島の運命……三一八
一五、日獨伊三國同盟の完成……三二三

躍進ドイツ讀本

黑田禮二著



第一編

混沌より秩序へ

—（敗戰直後のドイツ）—

一、戰ひは負けてゐない

ドイツの復興は、歴史のコンピエーニュ森に始まる。

一九一八年十一月の七日であつた。愈々ドイツは聯合國の頑強な長期戰的反擊を受けて、弓折れ矢盡きた瞬間なのだ。足掛け五年に亙る猛鬪も奮戰も、何等の權威にすら値しないで、ドイツ第二帝國は大河の決したやうに、內部から崩壞し始めた。カイゼルは倉皇としてオランダのアメロンゲンに蒙塵し、國內は革命の火の手をあげて、眞赤な旗がベルリンを……ハンブルグを……ドレスデンを……ミュンヘンを捲席した。

十一月七日、いままで櫛風沐雨の間、國內には外夷の一兵だも入れないと傲語して、ベルギーのスパー溫泉場に、常駐させてあつたドイツ大本營の總司令部にも、

今迄に嘗てない息詰まるやうな嚴肅の――と言ふよりも、泣くに泣けない悲劇の――一瞬時が支配した。

正面には全軍總司令のヒンデンブルグ老元帥が、いつもの通りプロシア式に眞直ぐな體格の、姿勢一つ崩さず起上り、その前に首うな垂れて、一列にならんでゐる四名の休戰提議委員の顏を、順繰りに覗き込んでいつた。四名と言ふのは、國務祕書のマチアス・エルツベルガアと、伯爵オーベルンドルフといふ二文官と、フォン・ウィンタァフェルド將軍及びワンゼロー大佐と稱する二武官とである。四人とも長い間着なかつたモーニングコートの皺を伸ばし、艶の褪せた絹帽にブラシをかけて、いかにもギゴチなく、窮屈さうに身を堅めてゐる。これからコンピエーニュの森で、聯合軍の司令官たちを訪問し、休戰の提議を持ちかけようと言ふのに、見るからに貧乏臭さうで、飢ゑ渴ゑてゐるかの如き印象を相手に與へては負け目だとの心遣ひか、エルツベルガアなどは今迄の特色あるカイゼル鬚を短か

く刈込んで、瀟洒たるメカシ方をした積りではゐるが、眉根の間には在々と、苦惱の色が現はれて、血の氣のない唇は、心持ち打顫へてゐる。

やがてヒンデンブルグ元帥は、四名の休戰委員の手を握つて、靜かに言つた。

『ではこれから諸君は、神樣に護られて、一路平安な旅行をなさい。諸君の双肩には、祖國興亡の重荷がかゝつてゐる。御苦勞なことぢやが、一つ話をきめてきて下さい。そんな陰氣な態度ではいかん……ドイツはまだ負けてはゐないのだから……』

『だが元帥閣下、この休戰提議には、相當の犧牲を覺悟しなければなりません』

とエルツベルガアは聲を落した。

『覺悟の前ぢや。お互ひにどんな犧牲でも屈辱でも、一旦は堪へ忍ばう。然し戰爭には負けてゐない、との確信を失つては駄目ぢや。その確信を失はぬ限り、一切は諸君にお委せする。どうか諸君の最善をつくして來て下さい』

老元帥の瞳には涙の露が光つてゐた。後に國務祕書マイスナアの話によると、ヒンデンブルグ元帥が涙を流したのは、後にも先にも休戰委員長マチアス・エルツベルガアの手を握つて、これを送り出した瞬間の一度だけであつて、その後聯合國によつて、苛酷なヴェルサイユ條約の通告を受けた時などは、寧ろ莞爾として、靜かに頷いてゐた……とのことである。

二、何よりも先づ署名から

四名の休戰委員は、エキス・ラ・シャペル驛から特別仕立の軍用列車に乘つて、フランスの國境内に入り、停車場の一つ〳〵で、白旗と休戰太鼓の音を示すことによつて、その各々の驛長の許可を得ながら、もどかしく進んだ。列車の前面に地雷火の不意に爆發する音も聞える。窓の兩側は永い間、砲彈に擊ち潰された物

凄い燒野ヶ原が、際限もなくつらなつてゐる。時々レールの破損箇所を、修繕しなければならぬので、列車の進行は牛の歩みのやうに緩い。

『思ふやうに進まないものだなア。こんなにグヅ〳〵してゐる間、毎日軍隊は三千五百名平均に死んでゐるんだが……』

と、ウィンタアフェルド將軍は、頭を抱へて、乘車席の隅で、吐息をついてゐた。

やがてフランス側からの、出迎へのブルボン・ビュジイ少佐なる者と落合つて、同少佐の自動車で、コンピエーニュにあるフランスの移動司令部に向つた。そこには、聯合軍總司令のフォッシュ元帥が、參謀總長ウェイガン將軍と、英國海軍提督サー・ロスリン・ウェミスの二幕僚を從へて、森の中の列車の中——食堂兼用の一等展望車の中——に陣取つてゐるのだ。

白旗を先頭として四名のドイツ休戰委員は、その展望車の隅の方に招じ入れられた。

フォッシュ元帥は右手でその大きな鬚を悠揚と扱いて咳一咳した。

『そこに居られる紳士方は、一體何のために此處へ來られたか？　一度訊ねて見なさい！』

通譯がその由を傳へると、エルツベルガアはドイツ語で、一々文句を切るやうに答へた——

『私共は今回、海陸空に於ける、目下の戰鬪狀態を、停止する目的で、休戰の提議に參りました。』

通譯がそれをフランス語で、フォッシュ元帥に傳へると、元帥は鳥渡鼻でセ、ラ笑つた。それから破鐘のやうな大きな聲を出した。

『提案とは何ぢや！　負けた側に「提案」の資格はない。そんなものはお斷りだと返事しなさい！』

元帥が示威的に椅子を立上つて、サーベルをガチャつかせながらそこを去らう

とするので、ドイツ側のオーベルンドルフ伯は、遽てゝ流暢なフランス語で、斯う遮ぎつた——

『元帥閣下。私達は戰爭に負けたから「提案」するといふのではないのです。事態は、このまゝに一刻も猶豫を許さなくなつたものだから、聯合國側の希望通りの要求を認めて、平和を恢復したいための提案を持つて、我々は選ばれて來てゐるのです。提案の言葉爭ひなら、どうでも修正が出來ると思ふのですから、その主意を酌んで、相談に應じて頂きたい。』

『ではその相談とは何です？』

そこでオーベルンドルフ伯は、ウィルソンの十四ケ條を持出して、その非賠償不併合の主旨に基く休戰平和の『相談』をしたのであるが、フォッシュ元帥も最後にその言葉爭ひをやめ、平和の問題は孰れ之れが兩國政府當事者の間に、締結せられる平和條約によりて、決定を見ることだらうから、兎も角も休戰だけなら、

一應聯合軍側の條件を提示してみようといふことゝなり、それからこの記念すべき展望車の會場を中心として、五日の間擦つた揉んだの協議を續けた結果、遂に最後の斷案に達した。

休戰委員が蒼い顏をして、顫へる手にペンを執りながら、署名しなければならぬ聯合國の要求條件なるものは、次の如きものであつた——

まづこの署名が終つて十四日以內に、ドイツ軍はその占領地域たるベルギー、フランス、エルサス・ロートリンゲンから全部撤兵しなければならぬ。

大砲五千、機關銃二萬五千、投擲彈三千、飛行機一萬七千、機關車五千、客車一萬、自動車五千、潛水艇百、輕巡洋艦八、ドレッドノート級艦六……をドイツは聯合國に引渡すべきである。

其他の艦船は悉く武裝を解除し、中立國及び聯合國の港灣に於て、聯合國側の監視の下に置かれる。

ライン左岸の地には軍隊を駐屯させてはならぬ。

マインツ、コブレンツ、ケルンの三市は、聯合國軍の占領に委ねる。その占領地帶の範圍は、右三市を各中心とする十キロ半徑の圓周地域に及ぶ。

海上封鎖の狀態はなほ解除されない。但しその間必要な食糧救濟に就いては、多少の便宜を與へるだらう。

この峻烈な『降伏條件』に對し、エルツベルガアは絶えず横合から、『それは酷い……それは少し程度を越えてゐる……』『七千萬の人口を有する大きな民族が、塗炭の苦しみに惱んでも、いゝものだらうか？　だがこの民族は亡びないのです……負けてゐないのだから、又起上ります……苛酷な取扱ひをすればするだけその起上りも早いでせう。聯合國側もその點だけは少し考へて頂かなくちゃ……』

十一月十一日、フォッシュ元帥とウェイガン將軍は、もうそれ以上脫落の箇所はないかといふ風に、忙がしさうに草稿と休戰條約文とを照し合はせながら、エル

ッペルガアの横合の小言などには耳をさへ藉さず、たゞ冷靜に斯う言つた——

「もう分つたく。そんな愛國演說は、あとでお國へ歸つて、議會で悠くりやられるがいゝ。で、兎に角こゝへ署名をなさい、署名を！」

三、平和の寸斷

それからドイツは、暫らく一路轉落の途を、まつ直ぐに進んだものである。コンピエーニュの休戰條約が苛酷だなどとの、泣きごとを言つてゐられるどころぢやなかつた。この四ケ年三ケ月の歲月を閱して、ドイツの獲た所は黃泉へ送つた人命二百萬人、費消した國帑が千四百億マルク、それに右に述べた休戰條約の締結による軍備の撤退、軍艦武器交通具の沒收等を加へた上に、更に翌年六月二十八日、ヴェルサイユに於て正式に平和條約が成立した時には、ドイツ國家は手足

を寸斷せられ、然もその上に經濟上の尨大な重荷を、義務として負擔させられたのである。

それまでドイツが、ウィルソン大統領の提案にかゝる、非賠償不併合原則の平和十四ケ條などを楯にとり、聯合國に向つてその實現を提唱し續けてきたことは、このヴェルサイユ條約によつて寸斷に踏み躙られた。不併合どころの騒ぎではない。先づ第一に、ドイツは今までビスマルク時代から、虎の子のやうに、やつと掻き集めて、さてこれから愈々その經營に取掛らうと樂しみにしてゐたアフリカ及び太洋洲に於ける全海外植民地を、元も子もなく取上げられてしまつた。

植民地ばかりではない。本國の國土に於てもエルサス・ロートリンゲンは、その名前がフランス流に變つて、佛領アルサス・ローレヌとなつた。そのためドイツは歐洲第一の鐵鑛產出地を失つたので、いま迄のやうにアメリカに次ぐ世界第二の製鐵國たるの地位を、永遠に望むことが出來なくなつた。

それからポーゼンと西プロイセンの、ドイツにとつては所謂穀物庫と呼ばれる地方が、そのまゝそつくり新興のポーランドへ割讓させられ、その殘りの胴體と、東の方に飛地として孤立した東プロイセンとの間には、所謂『ポーランドの廻廊』と稱する地域が突入することゝなつたので、それ以來ドイツ人は外國の廊下を歩いて、自分の離れ座敷に連絡し得るといふ不便を忍ばなければならぬ。然もその外國の廊下に當る部分は、實は歴史的に見ても、外國のものではないのだ。なる程そこにはポーランド人も、澤山住んでゐるには違ひないが、素を訊せば中世以來ドイツ精神を發祥させたプロイセンの前身たるブランデンブルグ公國の故地なのである。そればかりではない。ドイツ東南部の上シレジアも、極く不公平な人民投票の結果で、これ又ポーランド領として簡單に併合させられて了つた。上シレジアは今迄のドイツにとつて、良質の石炭を産出する地方だつたのである。

それへもつて往つて、北の方のシュレスキヒ地方はデンマークに、モレネー、

オイペン、マルメディの三地方はベルギーに、メーメル地方は新興のリトアニアに、それからダンチヒ市は（自由市として獨立の形を執つたが結局はこれ亦）ポーランドの勢力範圍に、從屬せしめらるゝことゝなつた。最も滑稽なのは炭田の中心地たるザール地方で、これはフランスとしてもアルサス・ローレヌ地方の鐵鑛石を產出する地方を併合した以上は、それに配する石炭の產出地が必要だとの理由からして、右のザールを十五ケ年間國際聯盟の管理の下に置き、その後人民投票によつて、その歸屬を決定することにきめられたのである。

更に――土地の割讓ではないが――一方ドイツの同盟國で、ドイツと一緒に戰敗の憂目を見たオーストリアは、その墺匈帝國の分裂後獨立の資格を失つたので、同國人は同じドイツ民族の住む地域である關係から、ドイツ國と合併しようとした場合、聯合國は條約によつて嚴重に之れを禁止したのである。

右の如く領土の割讓も苛酷だつたが、それよりも更に手痛い打擊をドイツに與

へたのは賠償金の問題であつた。先づ最初にドイツは『一切の侵略地に於ける人民の損害賠償をなす責任』があるといふ譯で、取敢へず一九二一年五月までに、正金、物品、有價證券等二百億金マルクの支拂ひを命ぜられ、其他莫大な石炭や、船舶や木材等の交附を强要された上、更に將來の聯合國を繁榮ならしむるための尨大な賠償金が賦課された。その總額は始めは一千二百億見當であつたらしいが、算數上の計算が出來ないものだから、いづれ賠償委員會で之れを決定することゝなつた。皮肉にもこの天文學的な賠償金の本金額は、遂に本式に決定を見るに至らず、その假想金額に對する利子拂ひの問題で、歐洲全土はその後十數年間——この賠償金額が棒引になるまで——不況と恐慌の惡夢に襲はれ通したのである。

四、戰爭の目的

之れを要するに前の歐洲大戰は、一體何のための戰爭であつたか？

ドイツは戰爭を始めて以來、四ヶ年三ヶ月の間、所謂『戰爭目的論』なるものの議論の仕通しであつた。從つて擧國一致的な本來の目的といふものはなかつた筈である。或は英獨の海權爭奪戰であるとか、バルト海沿岸又はベルリン＝ベルグラード＝バグダットの三B線進出を企圖する帝國主義的目的の戰爭であつたとか、聯合國や中立國の批評家たちは、みんな勝手に、ドイツが戰爭を惹起した原因とその意圖とを決定しようとしたけれど、別にドイツ自身がさういふ戰爭のスローガンを、始めから掲げて戰つた譯ではない。偶然に戰爭を始めたから、仕方なしに、擧國一致して敢然立つた迄である。その有樣は、恰も一八七〇年の普佛戰爭の場合に於ける、プロシア及びフランスの、双方の主張した戰爭目的にも等しい。フランスにとりての戰爭目的は、ナポレオン三世と、陸軍大臣ルブーフと、熱狂したパリ市民との間には、悉く違つたものであつた。ナポレオン三世は、ス

ペイン王位繼承問題に關し、プロシアがその王室の支族レオポルト大公を、スペイン王たらしめたことに腹を立て、その問題を解決するために戰ひを開かうと考へ、ルブーフ將軍はたゞビスマルクが、ドイツに於ける政治の中心を退くことを目的とし、パリ市民はライン河を佛國々境とすることを念願とした。又プロシア側はたゞ軍備擴張と、南北ドイツの統一を計畫して、國民の注意を對外問題に向けさせる目的であつた。然るに戰端が愈々開かれると、茲に始めて兩國は各々その相手の滅亡に目標を置いた。

だから戰爭といふものは、始めから一定の計畫と目的とを以て、施行せらるゝものではなくて、意外な瞬間に勃發する性質のものである。この前の歐洲大戰に於けるドイツの如きも、カイゼルの帝國主義的野心だとか、或は前にも一寸述べたやうに英國との海權爭覇(かいけんさうは)などが、その目的であつたと說くものがあるやうだけれど、それはその戰爭の客觀的理由を、あとから說明する一種の手がかりに過ぎ

ないのであつて、ドイツ帝國自身は、別にそんな目的で戰爭を始めた譯ではない。その證據には、これも前に一寸述べたやうに、もう戰爭が始まつて三年の月日を經過した頃、卽ち一九一七年から一八年にかけて、一體今度の戰爭の目的は何ぞやといふ問題に就いて、國內で頻りに爭つてゐた事情に徵しても、その邊の消息はよく分る。

それだからヘルフェリヒ博士や、ルーデンドルフ將軍の如きは、フランスを叩くよりは寧ろ東プロシアからロシアの方に侵入し、そこに新しいドイツ植民地を確立しなければならぬといふし、中央黨のエルツベルガアの如きは、英佛との抗爭は勿論續けなければならぬが、バルカン方面へ戰線を擴大するのは無意義だと議論するし、海軍側は——不思議なことには社會主義者の一派もこれに加はつて——西部戰線の總攻擊は之れを中止し、寧ろ守勢の形にしておいて、一方外國商船に對する潛水艦の無警告擊沈により、英國に對する海上逆封鎖を實行しなけれ

ばならぬと主張して讓らなかつたことなどは、要するにドイツが戰爭過程に入りながら、なほその戰爭目的がきまつてゐなかつた證據であり、その結果全軍總司令部に於ても、作戰上どれほど不利な情勢を來したか分らない程であつた。

だから戰爭が濟んだ後のドイツ人には、その點に就いていつまでも後悔の氣持が續いたのである。一體前の歐洲大戰は何のために戰つたか？……何の目的がその中にあつたか？……といふ回顧は、常にドイツ民族の腦裡を徂徠した反芻の省察なのだ。それ故にドイツ民族は前の大戰によりて、戰爭には一定の計畫と、周到なる勝利への意思と、明確なる戰爭手段による目的の、重大なることを痛切に體得した。これが今回の大戰に際し、一方戰爭の七八年も前から計畫性ある統制の戰時體制を整へたと共に、他方戰爭が勃發すると同時に、總統ヒットラアの口を通して、『歐洲新秩序の建設』なる明瞭なスローガンを中外に闡明し、その戰爭目的のために今日國民上下が一致して戰つてゐる所以なのである！

五、プロシア主義の行動

話が多少脇道に外れたが、右に述べたやうにドイツは前の大戰に於て、驚くべく勇敢な戰ひを續け、最後に弓折れ矢盡くるまで、頑强な攻勢をやめなかつたが、戰爭そのものには國民を納得させるだけの、所謂 Kriegsziel（戰爭目標）なるものを持つてゐなかつた缺點があるに對し、他方聯合國の方は、あれ程戰場では到る所に浮足がたち、然も多數の種類と柄の違つた國家を寄せ集めたモザイク流のやうな爭鬪ブロックであつたに拘らず、たゞ一つだけ彼等聯合國に共通して、一絲亂れない耐戰の犧牲力を與へたものがあつた。

それは彼等の戰爭目的なのである。彼等はカイゼルの絶對主義的な野心を挫かう……從つてカイゼルの傀儡たるプロシア軍閥を根こそぎに剿討し、それによつ

て歐洲人が、枕を高うして安眠のできる自由を恢復しよう……といふので結束して起つたのだ。換言すれば大ナポレオンの末期に於ける、歐洲各民族の自由解放戰と、同じ意氣込みで戰つたのだ。

それだから大ナポレオンのために、到る所で反擊を受けながら、執拗に喰ひ下つて、遂にその最後の目的を達し得た十九世紀初期の情勢と同じやうに、聯合國家群にはドイツの手硬い攻擊を受くれば受くる程團結心が強くなつてきて、遂に聯合國を所謂『勝利』に導いたのである。

このプロシア主義の打倒といふスローガンは、アスクィスも、ロイド・ヂョーヂも、クレマンソオも、又ロシアのイズヴォルスキーのやうな脛に疵持つ政治家でも、常に口ぐせのやうに之れを表明し、各自國軍の士氣を鼓舞させてゐたものだが、同時に米國をして參戰せしめた動機も亦そこに在り、從つて米國が聯合國に加はつて後は、まるでウィルソン大統領が、聯合國の戰爭目的を一手に引受け

て、之れを神聖化し、哲學化し、理想化してしまつた。そこに堂々たる非賠償不併合の主義が生れ、そこに又極めて人道的な匂ひの高い、あの對獨十四ヶ條の原則が生れた所以なのである。

だからドイツ側では、カイゼルさへ居なくなり、又プロシア主義が再び擡頭しない限り、聯合國はドイツの提案を絶對的に採用してくれるもの、と眞面目に信じてゐたものらしい。それはヴェルサイユ條約に出席したドイツの代表ブロックドルフ・ランツァウ伯の手記を讀んでも明かである。即ちドイツ人は馬鹿正直に、ウィルソンの平和提案は口先だけのごまかしでなく、本當に人道的な至誠の發露であつて、それに反對してゐた今までのドイツの態度は、寧ろ多少恥かしい心持になつてゐたものゝやうである。

然り、戰敗ドイツはウィルソンの眞心、換言すれば聯合國の正當なる戰爭目的の前に頭が上らなかつた。それに逆つて横紙破りな平和の破壞を續けた點には、

今となつてマチアス・エルツベルガアでも、ブロックドルフ・ランツァウ伯でも、多少申譯がないと考へてゐたに違ひない。だからドイツ帝國が國家としての、その意味に於ける良心的刑罰や犧牲は、到底ドイツ自身が負ふべきものだとの心理的な覺悟は、彼等とても持つてゐたであらう。

だがそのカイゼルはオランダへ蒙塵して、もう國内にはゐないのである。ドイツはウィルソンの示唆と暗示に從つて、假政府ながら既に一九一八年の二月から國民議會を開催し、主權は人民の手に移つてゐる。聯合國が直接に打倒の目標としてゐたプロシアの軍閥は、それこそ本當に滅亡して、ドイツ國内にその跡形もない。それは社會革命の結果、プロシア軍閥の體制が崩壞したからと言ふばかりではない。勿論それもあつたらうが、プロシア軍閥の中核をなすユンカアによつて組織された勇敢な青年將校たちが、もうその頃には殆ど一人も生き殘つてゐないのだ。一九一八年にプロシア軍閥が、社會的勢力として退陣する以前、既に一

九一六年の末までに是等のユンカア出身の青年士官達は、マルヌの原頭に於て、又數回に亙るヴェルダンの攻撃戰に於て、事實上物理的に死に絶えてゐるのである。從つて一九一八年の初頭を飾る最後のドイツ大攻撃の場合などには、その百九十餘師團を數ふる尨大な軍隊の中に、純粹なプロシア出身の青年貴族將校などは、殆ど指を屈する位しかゐなかつたと言ふ。

六、ボッシュが拂ふさ！

そんな次第であるから、コンピエーニュ森の休戰條約に於て——從つてそれから半年經つて後の、ヴェルサイユ平和條約に於てはなほ更のこと、——ドイツ側では、ウィルソンの目的に叶ふやうな態度をとり、歐洲全般の人間の自由解放が約束されることを、ドイツが素直に承諾する限り、聯合國は寧ろ喜んで『平和』

に應じてくれるものと考へた。それだからヴェルサイユの平和會議の意義があるものと愚直に信じ切つたのだ。

然るに事實はまるで反對であつた。ドイツが降伏の形をとつて、一切を投げ出し、最早や全然抵抗が出來なくなつた形勢を見てとると、聯合國の政治家の頭は、まるで熱病にでも憑かれたやうに、ドイツに對する復讐と憎惡の念に燃え、カイゼル主義——從つてプロシア軍閥主義——の打倒などといふものは、嘗て戰爭目的のスローガンには一度も無かつたやうな顏に變り、卽ち今迄の假面を全然かなぐり捨てて、『ドイツ民族の殲滅』が本來の目的であつたかのやうな態度を示してきた。その結果が、ヴェルサイユ平和條約の調印なのである。それは歐洲に平和を齎來させる條約ではなく、近い將來に於てドイツ民族が復興する限り、必ず次の戰爭を捲起こさせる條約なのである。

民族自決といふ表看板の下に、チェコスロヴァキアだの、ユーゴスラヴィアだの、

ポーランドだの、新ルーマニアだの、バルト諸邦だのと、少數民族が將來必ず喧嘩を仕合ふにきまつてゐるやうな爭鬪群を隨所に新設し、在來の一纏りになつてゐる國家の手足を部分的に切りとつて（ドイツやハンガリイやブルガリアの例に於ける如く）、それを周圍から牽制し得る諸國の中へ、編入したり合併したりした。その目的は全く他でもない。先づ北氷洋からバルト沿岸地方を通り、ポーランドとルーマニアから黑海に到る、帶のやうな國家群の萬里の長城を築いて、一つはボリシェヴィキの西侵と、二にはドイツ民族の再興とが、不可能となるやうな建前にしたのだ。その次にライン河の西部へ持つて行つて、北はオランダから、ベルギー、ルクセンブルグ、スイスの中立的な第二の萬里の長城を構築し、ドイツの西侵を不可能とした。その上にポーランドの廻廊と、チェコスロヴァキアのズデーテン獨逸を含むボヘミア地方を、態々ドイツの心臟部へ、背中から刄を擬するやうな人工的地形に作り上げて、ドイツ人の自滅を策する計畫をとつてゐることが、

在々と發見されたのである。

それにドイツ人には、社會革命の結果、國内がもう麻の如く亂れてゐても、その秩序を立てるだけの武力を持つことさへ許されないのである。武裝不完全で徵兵制に據らざる常備軍十萬を維持する以外、國内の要塞は總て破壞され、海軍と空軍との再建は、ヴェルサイユ條約の鐵則で一切禁止されてゐる。

主なる產業を失つたドイツ民族が、飯の喰へぬ狀態になつてゐても、クレマンソオは平然として、『それは當然だ……要するに二千萬のボッシュ（ドイツ人）が多過ぎる！』と空嘯くのみである。その中から天文學的數字に近い償金を取上げようと言ふのだから、ドイツとしては之れに對して何等支拂ひの給付物を持つてゐない。北フランスの荒廢狀態を計算してその復舊費が大體一千億フランほど入用だといふことになると、クレマンソオは傲然として、Boche payera！（ボッシュが拂ふさ！）と突返すのみである。要するにドイツは國内に資源が乏しく人口が

過剩な上に、鐵鑛石や小麥生產の地帶を割き取られてゐるので、そこから何等かの賠償に充當すべき價値ある生產物を作るためには、國內の勞働力を總動員して、勞働加工の力を利用するより他に仕方がないのだ。卽ち尨大な賠償金さへ課しておけば、ドイツ勞働者大衆は、たゞその桎梏の下に賃銀奴隷となつて、ドイツ再興の氣運さへ起らぬのみか、その狀態をそのまゝに十年も二十年も放任しておけば、ドイツ民族は氣力も體力も衰へて、遂に自滅して了ふにきまつてゐる。

然り、ヴェルサイユの桎梏體制を通じての聯合國の對獨態度は、英佛が戰勝國としての專制的覇權を掌握することによつて、ドイツ民族の滅亡を計り、歐洲大陸に永遠の不和と不秩序を齎らすことを欲してゐる以外の、何物でもなかつた。聯合國の戰爭目的は、專制主義に對する歐洲の自由解放戰ではなくて、寧ろ歐洲に次の戰爭への準備と、民族間の嫉視反目と、戰敗民族の自滅を計る點にあつたのである。新しく生れ變らうとしたドイツ民族の前途は、たゞ暗澹と絕望とが、

口を開けて待つてゐるのみなのだ！

七、イギリスとフランスの立場

右に述べたやうに、ヴェルサイユ條約は、ドイツ國民の期待を全面的に裏切つたものである。尠くともドイツはこの平和條約により、眞に歐洲民族として、四隣と親善關係に入らうとしたのであるが、戰勝國はドイツ民族を精神的にも物質的にも再起不能として、その自滅を計る政策を執つたものである。

勿論聯合國の中でも、フランスとイギリスの立場は、多少異つた點もあつた。ドイツ民族の滅亡を心から望んだのは、寧ろイギリスよりもフランスなのである。フランスは大戰の結果、歐洲大陸の覇者たるの地位に躍進し得たとは言ふものゝ、戰爭に勝つたのは、自分の自力で勝つたのではない。英國の海軍封鎖力と、米國

の經濟的援助とがあつたために、單にドイツの總攻擊の力を喰止めて、一定期間頑張り通したといふのが、所謂『戰捷』の形となつたものである。實を言へば、力足らずして勝利を得た結果となつたに過ぎない。從つてドイツに對しては、恐ろしく怖いのである。このドイツが、又いつ復讐戰を始めるか分つたものではない。若しもドイツ民族が何等かの形で復興し、フランスに對する仇を報ゆる態度に出た限り、もうフランスとしては再びこれを叩き伏せる自信がないのだ。だからフランスとしては、今後ドイツが再起出來ぬやうに、全然その手足を束縛しておくに限る。卽ちドイツは負けた國として、この際勝利者の無理難題を、何でもかでも壓し付けておかう……といふのがその建前であつた。

その點に於てイギリスの態度も、原則としては大體同樣であつたが、然しイギリスといふ國は、元來歐洲に於て特殊な强大國の存在を許しておけない性の傳統を持つた國家なのである。ドイツが强い時は、他の歐洲諸國を誘つてこれを打ち

のめして了ふ。そして前の歐洲大戰に於ては、その目的を立派に達成し、カイゼル・ウィルヘルムの第二帝國を、物の見事に崩壞させることができた。然し今後ドイツに代るフランスが、獨り歐洲大陸に於て强くなることも、イギリスとしては餘り希望ではないのである。嘗てスペインが强大なりし時は、オランダを誘つてその覇權を挫折せしめた。次にオランダが擡頭してくると、フランスを誘つて之れを攻擊し、遂にオランダを世界の第二流國以下に叩き落してしまつた。次にフランスを中心とする大ナポレオンが、歐洲大陸の制覇に成功しようとすると、今度はプロシア其他の歐洲大陸諸國を糾合して、物の見事に之れを打倒し得たのである。最後はカイゼル・ウィルヘルムに統治されたドイツ帝國の、目覺しい勃興であつた。これは所謂世界大戰の形式で、世界の盟邦を狩り集めて、いとも無殘に崩壞させてしまつた。

さういふ國是を持つたイギリスのことだから、ドイツの沒落後、フランスが又

それに代はつて、歐洲に於ける唯一のヘゲモニーを握る國家となることは、到底默つてゐられないのである。從つて戰勝國としてのフランスの放肆な擡頭を、陰ながら牽制する意味に於て、敗殘に喘ぐドイツ民族の息の音を止めない程度に、之れを生かしておかなければならぬ。卽ちドイツ民族が、かつ〳〵に新興フランスの均衡勢力となり得る程度に、その國力を保存しておくことは、寧ろイギリスとしても希望する所である。然しドイツ民族の歐洲に於ける生存價値は、たゞフランスに對する——それからボリシェヴィズムの西侵に對する——障害物たるの點に在るのみであるから、若しそのドイツが、以前のやうに海洋に乘出して、海外植民地に覇權を爭ふやうになつては大變だ。その意味に於て、イギリスのドイツを遣付ける最後の目的は、ドイツをして永遠に海外植民地經營國たらしめざる所にあつた。從つてウィルソンの十四ケ條(非賠償不併合主義)に、いくらか考量の餘地ある如き態度を示したあの人道主義的なロイド・ヂョーヂでさへ、ドイツ

の海外領土の問題となると、寧ろフランスを押退けてまで、その沒收と合併とに、贊同の意を表した次第である。

その意味に於てイギリスは、歐洲文化の擔當者ではないのだ。イギリスは世界の海洋帝國である。世界の七つの海を支配し、世界の富をロンドンに吸收して、異民族を搾取する國家なのである。イギリスは歐洲文化の共同體に對しては、別に何等の寄與する所もなく、たゞ常に歐洲人相互の間を喧嘩させて、その均衡をとり、それで後顧の憂ひがないやうにしておいて、自分だけは獨り海洋の外に乘出して行かうとする。卽ち歐洲に對して何等與ふる所なく、歐洲全體の運命を共同に負擔する意思なく、たゞ海外の劣等民族を搾取し、その資源を吸收するために、歐洲の文化を利用し、或はそれを持ち逃げするのが、イギリス本來の面目なのである。だから後にナチスの時代となつて、ゲッベルスが『イギリスは我々歐洲人の運命を、共同で擔當する資格のある國ではない……イギリスは歐洲よりの

脱走兵(デザチュール)だ！」と、皮肉な痛罵を加へたのは、その邊の消息を遺憾なく物語つてゐる。

八、第三の觀點

斯くの如くフランスとイギリスとが、ドイツ民族の將來を觀る立脚點は、双方ともに各自異つてゐたけれど、尠(すくな)くとも歐洲大戰に對する彼等の目的は、カイゼルの專制主義を打倒するといふ最初のスローガン通りではなくて、實はドイツ國民又はドイツ民族そのものを打倒し、その勃興を抑へるといふ點に在つたのだ。それはヴェルサイユの平和條約によりて、ドイツ人の頭腦には、極めてハッキリ會得された。

ドイツは『戰敗者』としての烙印(らくいん)が捺(お)されたのである。戰敗者に對し戰勝者は

如何なる無理强ひでも難題でも壓しつけることが出來る。戰勝者は『力』を以て不正を正義に變へ、惡德を法律に直す資格を持つてゐる！

そこでドイツは、果して戰敗者であつたかどうか？　若しも戰敗者であつたとすれば、戰爭の責任を引受けなければならぬ。卽ち戰爭に對して、自分が惡かつたといふ『戰罪』を認め、その基礎に於て——或はその刑罰として——當然領土も取上げられるだらうし、軍備も制限されるだらうし、又尨大な戰債も引受けなければならぬといふことになる。だから問題は最初から國民心理の觀點に立脚してゐる。そしてそれには大別して三つの觀方があつたのだ。

第一には、その當時ベルリンや中獨や、又はミュンヘン地方などに、怒濤の如く荒れ狂つてゐたスパルタキストとか、モスコウの指令によつて赤旗の靡く間に社會革命を斷行しようといふ極端左翼の連中の觀方であつた。彼等にとりては、世界勞働者の團結が近づきつゝあることに狂欣し、ドイツ民族の將來などと

いふことは、殆ど眼中にないのだ。大戰は帝國主義的國家群の破局への進行であつて、どこが勝つたの、どこが負けたのといふ問題などは、實はどうでもよかつた。たゞヴェルサイユ條約の桎梏は、ドイツ勞働大衆だけの搾取を意味し、結局は世界勞働者階級全體の地位を低下させる體制に過ぎないものだから、これは當然打倒すべきものだ……といふ意味で、寧ろヴェルサイユ打倒を、彼等の結束の手段に使つたものである。從つて是等の人々は、初期のドイツ共和國に於て政治上の相當な役割を演じたに拘らず、彼等の理念は、將來のドイツ民族の再起といふことに對しては、別に何等の關與もなかつたといつてもいゝ。

第二には、當時の政權を掌握した社會民主黨及び自由主義の人々の考へ方である。彼等はドイツの政權を自ら戰ひ獲つたものではない。カイゼル一味及びプロシア主義の代表者たちが、自滅してくれた爲めに、政權が熟柿のやうに彼等の懷に落ちて來たのを、たゞ喜んで拾つたまでのことである。是等の人々を、世に『ワ

イマア憲法派』と呼び、後のナチスは『システムの一味』と稱してゐる。システムの一味は、何しろドイツ全體の政權を、期せずして掌握したものであるから、將來に對するドイツ民族の歸趨など、何一つ獨創的に考へる能力を持つてゐなかつた。彼等は相手の聯合國が命ずるがまゝに、ドイツの戰敗者たる地位をおとなしく容認した。從つて戰勝者より受くる刑罰は、當然の結果として甘受はするが、然し人道の立場と、歐洲全體の福利とのために考へて、ドイツ民族の滅亡を目的としたヴェルサイユの體制を、文字通りには强制しないやうに、多少そこには運用を加減して貰ふことを、英佛米に向つて哀願する態度をとつたものである。その意味に於けるヴェルサイユ體制への反對は、初期のバウアー＝ウィルト等の一派から、中期のマルクス、シュトレーゼマンを經て、末期のブリュンニング一派に至るまで、そこに程度の相違こそあれ、その立脚點に至つては殆ど同一であつたと言ふことが出來る。

第三には、ドイツ民族の將來を見詰めた國粹愛國者の一群の考へ方があつた。彼等にとりては、賠償金の高い安いは問題ではなかつた。又領土の喪失についても、第二の人々のやうに泣言は並べなかつた。たゞ彼等魂の奥底には、コンピエーニュ休戰委員を送る時のヒンデンブルグ老元帥の確信してゐた言葉——即ちドイツは負けてゐないといふ氣持——を彼等の心理から拂拭しようにも、どうしても出來なかつたのである。從つて自分達は本當の戰敗者ぢやない、といふのが彼等の立場なのだ。戰敗者でない以上はヴェルサイユ條約の骨子となつてゐる所の『戰罪』の責任は、ドイツ側に無いと主張せざるを得ない。そこで是等の人々は、ヴェルサイユ條約の存在を始めから否定してかゝるのだ。賠償金の高過ぎるのを、値切つたり負けさせたりするのは、始めから問題でなく、ヴェルサイユによつて戰爭は終結してゐない……戰爭は別の形をとつて、なほ繼續してゐると觀るのである。是等の人々の心理は、そのまゝヒットラア始めナチスの面々によりて繼承せ

られ、然も實現された所であつて、要するにナチスは始めから、ヴェルサイユ條約は成立せざるもの、從つて『戰罪』の問題に就いては、ドイツ側に責任がない……といふ所に、何よりの重點をおいて、國民の魂を呼び起したものである。ドイツは決して負けたのではない。然るに之れを負けたと認めた者は誰れであるか？　換言すれば英佛の要求する詭計にかゝつて、ドイツ民族の再起を永遠に不能ならしめたものはどこにゐるか？　といふ觀點から出發して、ドイツ魂の政治的な爆發が起つた。然もその爆發は、始めは外交に向はずして、寧ろ內政上の紛爭の形をとつて現はれたのである。一九二〇年三月ベルリンに起つたカップ一揆はその最初の烽火であつた。

九、カップ博士とリュットヴィッツ將軍

十一月革命が勃發(ぼつぱつ)した當時、陸海軍の兵士の間には、何となく革命思想が燎原の火のやうに燃え上り、軍人の勢力は、一時全く失墜してしまつたのである。

それは何となしの革命思想と言つた方が一番適當であらう。なぜかといふに、一般に浸潤した革命の意識には、別に前途に對する何等の理想がなかつたからである。勿論その當時、モスコウからの赤化宣傳的聯絡は、相當に強い根を張つてはゐた。國内にもスパルタキストの一味や、獨立社會黨の理論家の中には、モスコウの國際敗戰主義に酩酊して、一切の既存秩序を破壞しようとするプロパガンダに從事した者は、尠なからずゐる。然しその當時は、肝腎のモスコウ自身にさへ、世界革命へのハッキリしたテーゼすらもまだ完全に出來てゐなかつたものだから、それをドイツ國内へ擴めると言つたところで、その理論も目標も、さう正しい指令の形態がとれてゐなかつた。たゞ狡猾(かつくわつ)な猶太(ユダヤ)人や、熱狂的なインテリ代議士連が、思ひつき放題に彼等の破壞思想を、過激な表現で焚き付けるだけであ

つた。然しそれで以て戰爭に光明を失つてゐる歸休兵士たちの思想を、混亂させるのには充分であつた。兵士たちは、別に革命の彼岸に光明を認めたので、理解の上から革命思想に心醉したといふのではない。たゞ國內の饑饉狀態と、一九一八年總攻擊の失敗と、戰爭目的に就いてのあて途のない流言蜚語とで、何となく氣がムシヤクシヤするものだから、一時にカツとなつて、先頭を行く赤旗の搖れるまゝに、附和雷同してゐたといふのが、その當時の僞らざる眞相である。

所がドイツの政權は、かやうに赤旗を振つて走り廻る連中の前を素通りして、そのまゝ社會民主黨其他の自由主義者の掌中へ轉がり込んだのである。そして是等の政權を新たに掌握した人々は、そのヴェルサイユ桎梏を根幹とする外交に對して、何等積極的な政策を持つてゐなかつたのみか、國內に對する秩序の恢復に對しても、殆ど拱手傍觀の態度を持してゐるだけであつた。たゞ社會民主黨のノスケといふ幹部が、荒れ狂ふ共產黨員の數名を逮捕したり、その巨頭を暗殺した

り、集會を蹴散らしたりしたことはあるが、本來が臆病だつた社會民主黨政府は、かゝるノスケ一派の行動とは殆ど關係がないやうな素振さへ見せてゐた。

しかしその間に、戰線から歸つた一部の少壯將校の中には、社會黨政府の無能ぶりを見すかし、頻りに部下の兵士から、今迄に感染して來てゐる左翼思想を追拂ふことに、努力するものがあつた。彼等は自分達の兵營に歸ると、演說の出來るやうな部下の軍人を寄せ集め、これをその當時流行してゐた政治集會の中へ送つて、僅かながらもまだ魂の奧底に殘つてゐる聽衆の祖國愛に、革命政府反對の氣勢を焚付けるやうな行動をとつた。後に述べるヒットラアの如きも、さういふ集會へ派遣さるゝ演說班の一人として選ばれてゐたものである。

戰線兵士はドイツが『降伏した』との絕望から、一時革命煽動者の群れに身を投ずるものも可成り澤山あつたが、然し戰線で過ごした兵隊としての戰友生活の永い習慣が、さう一朝一夕に消え去る譯には往かなかつた。例へばリュットヴィッ

ッ將軍などが、戰線的秩序を、國內生活に於て恢復する必要を說いて廻つた時などは、一度革命思想にかぶれた兵卒達も、前非を悔いたやうに將軍の下に集つて、新しく祖國中心の政權を樹立する運動に、忠誠を誓ひ始めたのである。要するに十一月革命に一番早くかぶれたものは軍人であつたが、その迷夢から忽ち醒めて、先づ誰れよりも早く轉向した者も亦軍人であつた。

斯樣な軍人のうち、社會民主黨出身の警視總監ノスケの依賴をうけて、ベルリン郊外に駐屯してゐた一隊は、一九二〇年三月十三日、一齊に叛亂を起して、ベルリン進擊を開始した。その首謀者は祖國黨の一員たるプロシアの官僚カップ博士と、スパルタキストの首領（リープクネヒト及びローザ・ルクセンブルグ）を暗殺した前說のリュットヴィッツ將軍なのである。この兩名は、堂々とベルリンに乘込んで來ると同時に、『カップ博士を宰相に、リュットヴィッツ將軍を國防相とする臨時內閣はこゝに成立し、在來のエーベルト以下の政府は消滅、國會は解散…

……」といふ物々しい聲明書を發表した。

然るにエーベルト以下の社會民主黨政府は、ベルリンを捨てゝ先づドレスデンへ、それからスツットガルトへと遁げ廻つたが、その間に全國の勞働者に對し、カップ僞政府打倒のための總罷業を命令した。それによつてベルリン市は、周圍から全く交通が遮斷され、市中では水道も電氣も瓦斯も失くなつて、全然身動きがとれなくなつたものだから、流石のカップ博士一味の冒險も全然失敗に終り、簒立政府はその聲明後僅か五日にして、全部スエーデンに逃亡してしまつたのである。これが世に謂ふカップ一揆なのである。

一〇、官僚と秩序の維持

カップ一揆は一面、洵に詰らない政爭上の小挿話であつたとも言へる。

現に聯合國側のドイツ觀察者の批評によつても、又ドイツ共和國の發達に參加した人々の筆によつても、單に『喜歌劇革命』の好標本とて、戯畫化されてゐる傾きはある。

なる程彼等の行動は輕率であり、その計畫には根據がなく、又その頑張る力も甚だ脆弱ではあつた。一面まことに賴りないクーデターなりしことは、確かに事實であると言へよう。

然しそれと共に、今日の完全に復興したドイツを考へるにつけても、この詰らないカップ一揆によつて、表徵されてゐた當時のドイツの、在るがまゝの姿を想ひ浮べてみるのは、極めて重大なことだと思ふ。

カップはプロシアの官僚であつた。リュットヴィッツ將軍は歐洲大戰で大功を樹てゝ、然もやつと生殘つたドイツの軍人であつた。是等の人々に率ゐられてベルリンに進擊した一揆の面々は、革命の惡夢から醒めて、再び祖國の前途が心配に

なりだした戰線からの歸休兵であつたのである。

要するにこの一揆は、官僚と軍人の古手とが輕率な行動を起し、意氣地なく挫折したものだ、と言へないことはない。一揆が挫折したらばこそ、その行動は意氣地なく輕率であつたと笑はれても仕方がないだらう。それだからと言つて、世の中は既に全然變つてゐるのであるから——換言すればドイツ國家は上下を擧げて左翼思想の政府の掌中にその政權が移つてしまつた際であるから——常識から言つても彼等のやうな時代後れの連中が出る幕ではなかつた……と簡單に片付けて、冷評を加へるのは（又さういふ書物は非常に多いが）、それは多少見當が違つてゐる。

なぜなら左翼の連中が、十一月革命によつてドイツの政權をとつてゐた、ときめてかゝることが、既に正鵠を得てゐないのである。第一共產黨は政權に與つてゐなかつた。社會民主黨や其他の自由主義者は、なる程聯合國側から見ればヴェ

ルサイユ條約の署名者であり、又その條約の忠實な擁護者でもあるから、それ等の人々が新しい『共和國ドイツ』の政權の廟堂に立つことは、望ましくもあつたらう。又贔屓眼から見て、ドイツの新秩序の建設者であるかの如く思はれたかも知れぬ。

然し裏面から覗いてみると、その當時の社會民主々義者や自由主義者（主としてユダヤ人）だけが、如何に大きな顔をして威張つた所で、ドイツの本當の政治はとれなかつたのである。政治といふ言葉が惡ければ、『戰敗直後の秩序』といふものは、拾收がつかなかつたのである。

ドイツが十一月革命の崩壞に逢着し、兎も角も國內で秩序を守り、辛うじて祖國の滅亡を救ひ得た所以のものは、ドイツにプロシアの官僚が殘つてゐたおかげであると思ふ。

官僚は勿論政治家ではない。從つて政治の表面に出て、民衆を指導して行くと

いふことは彼等に出來もしなかつたらうし、又彼等にそれを許す譯にも往かなかつたかも知れぬ。然しプロシアの官僚は、與へられたる職務の範圍内に於て、獻身的であり、勤勉であり、且つその責任感の強いことでは、實に天下一品であつた。彼等は各自の省内に於て、州廳に於て、或は稅務署や、鐵道廳や、郵便局等に於て、社會革命と共に秩序が紊亂することを見ながら、指を咥へて引込んでゐる譯には往かなかつた。假令外國の壓迫が押寄せようとも、革命の風が吹き荒ばうとも、彼等は敢然起つてその持場立場を守り、それがために事務を澁滯させることは決してしなかつた。中には自分の長官が、革命騷ぎで留守になつてゐる所もある。然し彼等は上長官が居なくても、誰れからも賴まれもせぬのに、單に自分の責任感から、自分の職場をどうしても離れようとしなかつたのである。後には次第にインフレの波が打寄せて、彼等の俸給は滯り、或は俸給の實價値が零に等しくなつたやうな場合でも、齒を喰ひ縛つて働いてゐた者さへあつた。

さう言ふやうなプロシア官僚が存在してゐたからこそ、ドイツはあの場合尠くとも潰れないで、やつと滅亡を免れたのである。從つて其の場合——國會で過激な演說を使ふ若干の人間以外、政治家らしい政治家はたゞの一人も居なくなつた場合——そのプロシア官僚の中からカップ博士のやうな人物が、一人位飛出したといつても、別に時代錯誤でもなければ、又見當違ひな飛出し方であつたと、一蹴する譯には往かぬ。

一一、四百の祕密結社から

それからリュットヴィッツの如き舊式の軍人が現はれて、戰線から歸休兵士を躍らせたといふことも、その當時としては、別に珍らしい現象ではなかつた。

大戰五年の間、勝味のない戰爭を續けて、故國に歸ると何等の希望も光明もな

く、凱旋者として迎へられないのは勿論、寧ろ時代に逆行する邪魔者扱ひを受け、否一般からは嘲笑の的とさへなつてゐた軍人が、それでもなほ祖國愛に對する信念を持ち續けて『戰爭でドイツは勝つてゐた……ヴェルサイユ條約の調印者は國賊である……次期の戰爭に對する準備のために、新しい政府を創設しなければならぬ！』と叫んで、同志の者を糾合したリュットヴィッツ將軍の如きは——假令その經驗の足りない行動が、ドン・キホーテ式であつたとしても——極めて見上げた人物であると思ふ。

その當時社會の裏面には、なほこの種の人物が澤山匿れてゐた。從つてヴェルサイユ條約締結の當時には、ドイツ全體の勞働者と農民の全部が、過激な國際思想階級思想の俘虜となり、以前の大地主や資本家までが、尠くも社會民主々義的思想の邊にまで左傾して來てゐた、と見る通說も間違ひである。

なるほど國民の、外交に對し、又經濟に對する世界觀は、今迄の戰時統制時代

から一遍に自由な思索の領域へ解放されたために、一變してゐたことは事實であるが、それかと言つてドイツ人が全部『民族の魂』を喪失してしまつた譯ではない。たゞそれは暫くの間地下に潜つて、社會の表面に立ち現はれなかつただけなのだ。リュットヴィッツ將軍が一揆を起した前後には、ルーデンドルフ將軍もスエーデンからミュンヘンに歸つて來て、南獨に於けるドイツ主義的官僚や士官連と、盛んに左翼政府の暴力的打倒を、相談し合つてゐたものである。

一方神出鬼沒の妙を得て、昨日はライン地方に、今日は東プロシアに、明日は北海の海岸にと同志を糾合し、ドイツ魂の復活に努めてゐたエーアハルト海軍大佐の如きも、全國到る所の在鄕軍人や、純眞な青年達の尊敬の的であつた。

バルチクームの義勇兵達が、西部戰線の解消の鬱憤をボリシェヴィキ打倒の新行動によつて晴らさんがため、重い大砲を曳きずりながら、晝は森林に匿れ、夜は闇夜を利して三百キロの行程を、殆ど飲まず喰はずで、ラトヴィヤまで徒步の

祕密强行軍を續けたのも正にこの頃である。

又後にヒットラア總統によりて『ドイツの祖國はシュラーゲタア青年の血潮によりて、その復活が約束された』と讃美された悲劇の主人公シュラーゲタア大尉が、同志の青年を狩り集めて、ポーランドのコルファンティ侵入軍を上シレジアに粉碎し、その電光石火の如き戰爭に勝つたかと思ふと、一同知らぬ顏で、銃器を鋤にかへて、小麥畑を耕してゐたのも、矢張りこの當時のことである。

ドイツ精神は消え果ててゐたのではない。前にも言つたやうに潛行運動として、地下の到る處に、魂の養分を吸收してゐたのだ。當時の左翼全盛と想はれたドイツに、四百に餘る『ヴェルサイユ反對、共和主義打倒の祕密結社』が存在してゐたといふのは、嘘のやうな事實である。彼等の或る者は極めて巧妙なる手段により、平和主義者やユダヤ人の成金政治家を矢繼早やに暗殺していつた。ハーゼ、エルツベルガア、ラーテナウ等の大官が、無殘な最期を遂げたのも、矢張り彼等

の手に依つて行はれたものだ。

是等の祕密結社の間では、古ゲルマン式な血盟の方式が嚴重に遵守され、同志を裏切る者があつた場合は、之れに自殺を强要し、若し聞かざるものがあると用捨なく之れを射殺してしまふのが常であつた。その遣り方を Feme=Mord（フェーメ・モルド）と稱し、當時の若い青年の間には、一種の魅力ある流行として、全ドイツの隅々にまで擴がつてゐたといふ。要するに社會主義が全盛の時代に、ゲルマンへの復古運動も亦全盛を極めたものだ。たゞ前者が社會の表面に流行する間に、後者は地下の暗い所で流行してゐただけの差異があるに過ぎない。

ナチスの運動も亦、ヴェルサイユ條約がドイツ人の魂の復活を刺戟したために起つたこの四百の祕密結社の一つとして、ドイツの地下の暗い所から、次第に明るみへ盛り上つて來たものである！

一二、政治の『渾沌』と政治の『對立』

カップ一揆の效果は、ドイツに於ける左右兩翼の政治的擡頭を、ハッキリさせたことである。

右翼に言はせると、社會民主黨を中心とした當時の政府では、すぐ全國の社會化だの總罷業だのと騒ぎ廻つて、戰後ドイツの復興といふことは、少しも考へないから困る……ヴェルサイユ條約で安定な地位を得たものは、國際金融に關係あるユダヤ人と、輸出入によつて巨利を博した戰後成金だけであつて、本當の血筋によるドイツ人は、この狀態では滅亡の外はない。尤もそれがため、カップのやうな暴力に訴へる一揆はいけないとしても、この際祖國の秩序を救濟する合法的なドイツ民族の政治進出が何より必要だ……との意見であり、それがいつの間に

か次第に瀰漫し始めたのである。要するに一九一八年から二ヶ年もするうちに、一時ロシアから流れて來た國際革命主義の魔術にかゝつてゐた本當のドイツ國民が、多少なりと本來のドイツ人としての意識を取戻す傾向が、相當に強くなり始めた。

然しそれと共に、他方の過激な左翼の陣營も亦、カップ一揆によつて非常な勢力を盛り返した。彼等はカップ一揆の報復と稱し、ドイツ共產黨の名の下にルールの炭田地方や、中獨工業地帶に工場占領、地方赤色政權の樹立等による暴動を起した上、カップ一揆の如き反動革命に擡頭の原因を與へ、且つカップのベルリン進出に怖氣(おぢけ)ついて、ドイツ中を遁げ廻つたやうな、意氣地のない政府を支持する譯には行かぬ……未來は赤旗を擁するわれ等のものなり！……といふ鹽梅に、非常に鼻息が荒い。實際カップの一揆に對し總罷業を敢行せしめ、遂にその一味をして手も足も出なくして、之れを國外に遁走するの已むなきに至らしめたのは

――假令その命令は社會民主黨から出してゐるにしても、之れを實行に移さすやうに努力したのは――何と言つても共產黨の手柄なのである。從つて共產黨が政治進出をするのは、尠くともう既定の事實となつてきた。

換言すれば十一月革命から、カップ一揆に至る迄の時期は、政治的に見て、ただ渾沌が支配するのみであつた。社會民主黨と自由主義者とが、形式的に內閣を組織してはゐたが、それはヴェルサイユ條約調印のための、則ち戰敗直後のドイツが對外的獨立の體面を立てるための、政治の中樞でも何でもなく、單なる政權的な飾り物であつた、といふに過ぎない。

それがカップ一揆を一轉期として、茲に始めてドイツ民族が生きるための、本當の意味の政治が始まつたのだ。それはどんな形式の政治であつたか？　曰く――政黨分派による政爭、といふ政治形式であつた。今までは右も左も暗闇の中で、たゞ自分の世界觀を勝手放題に主張するに過ぎなかつたものだ。それが敵と

味方の双方に對立し、どうかして相手を倒さうとすることだけに、目的を集中することゝなつた。『渾沌』が『對立』に變つてきたのだ。

その現象を實證するためには、當時の國會に於ける各政黨の勢力分布を見れば、一番明瞭である。一九一九年の一月——卽ち國內で血腥い革命騷動をやつてゐる眞最中の——ドイツ共和國々民議會に於ける選擧の結果は、社會民主黨が一六三、獨立社會黨が二二、中央黨が九一、民主黨が七五、ドイツ國民黨が四四、ドイツ人民黨が一九といふのであつて、大體ヴェルサイユ體制を支持するために選ばれた穩和な中庸分子のみの糾合であつた。從つて左右兩極端の世界觀を代表するやうな國內的政爭狀態の色彩は、案外まだ尠なかつたと見てもいゝ。

然るにカップ一揆が終つて直後の、一九二〇年六月の總選擧の結果を見ると、社會民主黨が一〇二、中央黨は六四、民主黨は三九と、政府支持黨は何れも著しく減少したに反し、右派と言はれるドイツ國民黨は七一、ドイツ人民黨は六五の

數を獲得し、左派の獨立社會黨は一擧に八四、共產黨は始めてだが四、といふ狀態になつてゐる。世の中は明かに國內對立の政爭時代を出現することゝなつたと言つても宜からう。

一三、一揆に不手際なドイツ人

カップ一揆以後のドイツ民族をして、左右對立の政爭狀態へ血眼になつて沒頭せしめる大きな原因を作つたものは、當時の怖ろしい大インフレーションであつた。換言すれば貨幣價値の極端な暴落によつて、普通のドイツ人は大體飯が喰へなくなつたのだ。大抵の人間が日常の生活に事缺いて、手も足も出なくなつたのだ。

この怖ろしい窮地を脫するためには、他人の財物を泥棒するか、血腥い革命に

よつて物資を配分する行爲に出るかの外はない。然るにドイツ人は法的觀念の非常に強い民族である。小さな搔拂ひか何かの事件ならいくらでもあるが、國民が一つの正義感からして他人の物を强奪するやうなことは到底ドイツ人には出來るものでない。

又ドイツ人は共產主義的革命の非常に下手糞な民族である。嘗てバクーニンが長大息して、『世にもドイツ人ほど革命に不適當な人間はない……』と言つたことがあるが、事實は正にその通りであつて、秩序と離れた革命行爲といふのは——スラヴ人やラテン人ならいざ知らず——到底ドイツ人には出來ないのである。

大戰直後の十一月革命！　これは立派な革命の典型であるかのやうに見える。だが仔細に檢討して見ると、あの革命によつてカイゼルが遁出した形式の如きも、ブルボン朝やロマノフ朝の沒落などとは、全然その趣きを異にしてゐる。ハンブルグやベルリンに暴動が起つたとの報に接し、カイゼルは直ぐにも外國へ遁げた

かつたが、それではドイツの主權がどこへ行くかの順序が立つてゐないので、遁げようにも遁げられなかつた。そこに人民の假政府といふものが成立し、カイゼルはその主權を政府に讓り渡すといふ形式が出來たので、カイゼルは始めてホッと胸を撫でおろし、そこで始めて退位書に署名(サイン)を濟ませ、これで安心だと計りにオランダへ遁走されたのである。普通の革命だつたら、敵に主權を讓渡するもしないもあとは野となれ山となれで結構な筈だ。それがさう簡單に行かないのは、物の秩序を順當に履んでゐない限り行動がとれぬ、といふドイツ人らしい物の考へ方が、さうさせることだ。

十一月革命の例だつてさうであるから、十九世紀の中葉に於ける民族自由解放の革命の如き、或は今後のヒットラアの斷行した國民高揚の革命の如き、それによつて社會狀勢は勿論一變することはしたが、然しさういふ革命の手段方法を考へてみると、フランス革命とか、ボリシェヴィキの革命とか、或はスペインや南

米などによく起つた種類の革命とは其の趣を全然異にし、議會の運用とか、法令の忠實な履行等によりてのみ、その革命が行はれてゐるのである。元來革命といふ言葉には『非合法』といふ意味を内包してゐる。然るにドイツに行はるゝ革命は所謂『合法的革命』ばかりなのである。言葉の固有の意味に矛盾した一種不可思議の革命なのである。

革命を斷行する前提手段としての『一揆』の如きも、ドイツ人はそのやり方がいつでも非常に不手際である。カップ一揆は、世の物笑ひであつた。その後のヒットラアのミュンヘン一揆の如き、或はエーアハルト大佐の全國到る所で試みた小一揆の如き、かのナポレオンの議會に於けるクーデターなどの鮮かさに較べると、殆どお話にならぬ不味さだつたと評してもいゝだらう。

然り、ドイツ人はもう血に飽きてゐる。四年三ケ月の殺傷沙汰により自分の夫や息子を或はアルデンヌの森に、或はウクライナの野邊に失つて、悲しみの喪服

をつけた女達は、裏町の隅々にもうウヨ〳〵してゐる。毒瓦斯にあてられて身體中を痙攣させた癈兵や、松葉杖を引摺つて道行く人の袖に合力を乞ふ除隊軍人の痛ましい群れは、ウンタア・デン・リンデンの並木道に、充ち溢れてゐるではないか？　これ以上になほ國民同胞が、何の殺傷沙汰ぞや……何の血腥い革命の必要があらうぞ？　中部ドイツで共産黨が、ロイナ工場を占領し、事務所の塔の上に大きな赤旗を飜して見た所で、黑パンの一片れも餘計に食卓を賑はさなかつたではないか？　カップ一揆によつて陰鬱な瓦斯の光りが、たゞの半燭光も增さなかつたではないか？

一四、生活改善の手段としての選擧

さういふドイツ人らしい觀點に立つて、大インフレーションの窮迫に直面した

彼等の選ぶ道は、議會の利用以外に何一つなかつた。議會に於ける政治の運用によつてのみ、貨幣價値の安定に曙光が見える。爲替相場の下落によつて巨利を博するユダヤ人や戰後成金を追拂ひ、尠くとも物資を豐富にし、物價を引下げ、飯の喰へる程度に收入の途を計り得るのは、議會の多數に基いて、政府を自分達の味方に引きつけるより、他に手段がない。政治は生活の手段である……同時に生活に對する彼等の世界觀の正しい表現方法でもある……といふのが彼等の僞らざる心理狀態であつたに違ひない。從つて地主もインテリも、醫者も勞働者も、老人も女達も、誰れもかれもが政治へ……政治へ……と乘出した。

尤もそれは長續きはしなかつた。生活の改善手段として選擧政治を利用してみること程ばかげた話はなく、その期待は物の見事に裏切られたのである。だがその次第は、もつと後に說明することにして、尠くともこゝではインフレの窮迫期を轉機として、誰れもかれもが始めて政治的に目覺めてきた……然もそれはドイ

ツ人の戰後國民生活にとりて、忘るべからざる苦い體驗と教訓であつた、といふことだけを言つておかう。

インフレと言つてもその當時、卽ち一九二一年頃から一九二三年の十月に至るまで、ドイツの經濟界を暴風の如く吹き捲つた所謂大インフレーションは、私達が今日わが國の『インフレ政策』とか、『インフレ景氣』とか、或はそれが惡く外れた『惡性インフレ』等の言葉によつて、想像する觀念の世界を、逸脫したものであつた。どの國でも、惡貨の橫溢に惱み苦しんだ例は多い。フランス革命の直後に於けるアシニヤ紙幣の大洪水で、世人が紙幣を壁紙代用に使つたと言ふのでさへ、既に空想的であるのに、ドイツに於ける場合は、なほそれ以上のものであつた、それはマルク貨幣の『暴落』などといふ言葉では、全然表現が出來ない。マルク貨幣は暴落したどころの騷ぎぢやない、崩壞したのである。滅亡したのである。價値がゼロになつたのである。

まだ一九二二年の始めには、日本の一圓が九二マルクであつた。大戰前の本來なら日本の一圓が二マルクに該當してゐたので（從つて一マルクは五十錢）九二マルクと言へば、一マルクが一圓の四十六分の一に下つた譯だ。それが同年の十二月には一圓が三、六七四マルクとなり、その趨勢は千臺が、萬臺、十萬臺、百萬臺……と奈落の底まで轉落して、一九二三年の十月には、遂に一兆臺を割つてしまつた。日本の一錢が、二百億マルクとなつたのだ。著者は嘗てチェルウォーネツ貨幣の發行される直前に、ソ聯のモスコウに於て、街頭の乞食が、『旦那樣、どうか百萬ルーブルの御慈悲を願ひます』と、手を出してゐる光景を見て、何だか頭が變になつたことを想ひ出すが、當時のドイツでは、百萬くらゐ貰つたんでは、乞食にもなれないと見えて、『どうか一文……』の代りに、『どうか二百億……』と、桁違ひな憫みの乞ひ方をしなければならなかつたのだ。

然し笑ひごとぢやない。その當時のドイツ人には、生きるか死ぬるかの眞面目

な問題だつたのだ。給料なり賃銀なりを貰つたと思つたら、出來るだけ早く商店のある所へ飛び込んで、生活必需品だらうが、餘計な商品だらうが、何でもかでも持つてる金全部をなげ出して、買へるだけの物を買つておかなければ、うつかり財布へ入れて二三日忘れてゐると、もうその時にはパンの一片(ひとき)れさへも買へない程、物價が天井上りに飛び上つてゐるのである。

一五、大インフレーションの眞因と實情

一體こんな滅茶苦茶なインフレ狀態は、何によつて起つたかといふに――その原因はいろ〳〵あるだらうが――結局ヴェルサイユ條約が、ドイツから尨大な賠償金を取上げようとしたことに歸因する。

聯合國は一九二一年の賠償委員會によつて、ドイツから賠償金一千三百二十億

金貨マルクを支拂はせることゝし、その支拂方法まで詳細に規定した。然しそんな所謂『天文學的數字』を、疲弊し切つたドイツ國民から捲上げることが、始めから見當違ひであつたのだ。それが爲めに聯合國自身が、自國の經濟界を破產の危殆に陷らしめ、遂にはドイツから一文も金が取れないといふ、悲慘な結果を生んだのであるが、そのことは後に述べよう。要するにこの賠償金の徵集により て、債權者たる聯合國は、自分自身が非常に苦しまなければならぬことゝなつたと同時に、債務者たるドイツの財政經濟の機構をも、根本から崩壞させてしまつたのが、この大インフレの現象なのである。

その上、大戰中の尨大な戰費に就いて、英佛側は大體之れを增稅で以て賄つていつたのであるが、ドイツは租稅に據らず、專ら公債にばかり賴つてきたので、大戰後はその償却のため、どうしても不換紙幣を濫發せざるを得なかつた。然も大戰後は、國內の生產力は著しく減退してゐるにも拘らず、歲出が非常に增加し

てゐたのである。それへ持つていつて賠償金として、一千三百二十億金貨マルクといふものが賦課されたものだから、事實上の支拂不能の上に、さらに國家信用の心理的な不安が、著しくそれに伴つて、貨幣價値は益々下落する。政府はたゞ印刷機械と紙とを動員して、それに應ずる不換紙幣を、矢鱈に製造する。それが更に一層、貨幣價値の暴落に拍車をかける作用をする。それも聯合國から、賠償金に關し、暫く沈默を守つてゐてくれる間は、暫時小康を得てゐるが、『何月何日までに、賠償金利子の何ヶ月分を遲滯なく支拂ふべし』といふやうな通牒が、賠償委員會から來たとの報道が、一寸でも傳はると、いゝ加減に落ち加減だつた紙幣價値が、又急激にドッと下がる……それに對しドイツ政府が、當座の猶豫を乞うたり、委員會の要求額に抗議を申込んだりしてゐると、今度はライン河の彼方にフランスの軍隊が『それぢや已むを得ん……ルール地方の保證占領だ！』と、サーベルの音をガチャ〳〵鳴らせてゐるとの報道が、又傳はつてくる……それを

聞いたドイツの財界は、更に縮み上つて、マルクの價値は急轉直下の墜落症狀を示す……

と言ふやうな狀態を、三年ばかり、毎日のやうに繰返してゐたものである。それでは貨幣價値の上りやうがないのだ。

それも今日のナチス・ドイツがやつてゐるやうに、物價と輸出入と爲替との統制とが、うまく行つてゐたなら、そのやうな悲慘な結果は生れなかつたかも知れぬ。今日のナチス・ドイツは、この當時の死ぬよりも辛かつた大インフレの苦い經驗が、いつでも身顫ひするやうな記憶を起させるものだから、國內の金貨が無くなつたと同時に、逸早く右の統制を斷行して、國民の勞働を基礎とする全然別種の財政經濟及び貿易の體制を採つたのだ。それだから政府に支出がいくら要つても、もうその當時のやうな惡性の大インフレなどといふものは、金輪際やつて來ないことが明かとなつた。結局今日のドイツは、當時のインフレの悲慘な體驗

によつて、得難い教訓を學んだのだ。

それはドイツ國民としては、文字通り悲慘な體驗であつたと言へる。なぜなら其の當時のドイツは、自由主義全盛のドイツなのだ。第一ワイマアで作つた憲法自體からして、米國にも英國にも亦フランスにも追從を許さぬ程の、極端な自由主義に基いて、作られてゐた關係上、國家が權力を用ひて、自由なる職業、自由なる企業、從つて自由なる貿易及び外國爲替相場などを、制限したり統制したりすることは、思ひも寄らなかつたのである。

そこで爲替相場を利用して、一儲けしようとする國內の賣國奴的成金者流や、國際金融界のユダヤ人などは、この大インフレの好期逸すべからずと、爲替相場の賣買をやつて、世人の想像もつかぬやうな、巨億の富を積んで行くことが出來る。全ドイツ國は國際投機界の天國だ！　マルク貨幣は全然上る見込みがなく、いつまでも下る一方だときまつてゐるのだから、こんな容易な投機はない。濡手

で粟の掴み取りである。大きな投機業者なら、それによつて儲けた金で、そのまま金より物への原則に從つて、鑛山を買ひ、工場を買ひ、土地を買ひ、森林を……穀物を……ホテルを……新聞を……と、何でもかでも買煽つて行く。中には官僚や政治家の節操を買ひとり、國民大衆の乏しい生活の一切を搔つ拂つて行く者さへある。それよりももつと型の小さい投機者なら、或は米貨一ドルをドイツに持つてきて、自動車をはしらせ、一流の料理店に美酒佳肴の晩餐をとり、傍らに美人數名を侍らせて、陶然と醉うた上に、まだ若干の釣錢が來るといふ有樣なのだ。

それがためにポーランド邊から彷徨つてきて、昨日までベルリンの裏町に、古本屋の會計にゐた小僧や、夜店の商人をしてゐた見窄らしいユダヤの老爺などが、まだ碌にドイツ語さへも語れないのに、たちまち以前のプロシア貴族の邸宅を買ひ取つて、夜會のサロンを開いたり、市會議員に當選したり、新聞社長や活

動會社の支配人にをさまつたりしても、決して不思議はない。一方身分の正しい純ドイツ種の官吏や、退役將校や、中產の商工業者などは、いくら正直に稼いでも働いても、物價騰貴との競爭に追ひ付くことが出來ず、住宅を賣り、家寶を賣り、家具を賣り、果ては自分の女房や娘たちが、その貞操を外國の漫遊客などに嚬ぐのを見ても、見ぬふりをしなければならぬといふ悲慘な例さへすくなくはなかつた。

道德は地に墜ちたのである。人間は卑屈となり、怯懦となり、虛僞と輕薄とは上下を風靡し、淫亂と墮落は一世を掩うた。民族の情緒は廢れ、魂の希望は光明を失ひ、たゞ物慾のみが一切を支配した。その當時の哲學、その當時の藝術、その當時の民衆娛樂……そこには質實なゲルマン・ドイツ精神の色が褪せはてゝ、たゞユダヤ文化の惡の華と、アメリカニズムの現世的計算とが、跳梁跋扈するのみである。

試みに今日のドイツ人に、『君達の過去の經驗で、いつの頃が一番苦しかつたか？』と訊ねて見るがいゝ。彼等の大概の人間は立ち所に、『それは大インフレの當時であつた！』と卽答するであらう。大戰中も勿論苦しかつたには違ひない。一九一六年から、全軍が崩壞するまで、ドイツ國內の銃後の生活は、惡疫と饑渴と寒さとに惱み通したものである。然しその時分には、尠くともまだ擧國一致の戰時統制體制が行き亙つてゐたものだから、襤褸を身につけても、屋根が雨漏りしても、バタのない砂まじりの黑パンを嚙つてゐても、みんな國家のためには、一樣にお互ひ樣であつた。貧乏人に無い物資は、金持にだつて手に入らなかつた。自分の息子が戰死したと言へば、隣りの夫もまた行方不明になつてゐる。人間の苦痛と悲慘といふものは、物質的であるよりもむしろ心理的であり、從つて涙と共に分け合つた一片のパンの味は、かへつて大牢の珍味に勝り得るものである。

だが世の中が自由主義となり、黄金と姦智のあるものなら、國家を犧牲にして、どんな榮耀榮華な生活も出來るが、正しい道を歩むものは、その所を得ずして路傍に見棄てられるやうな狀態になつてゐて、しかも各人のあひだに個人主義的な角突き合せや、嫉視猜疑による社會心理に支配されてゐる場合は、わづかの犧牲や、損失や、失望や、不足といへども、怖ろしく壓迫で苦痛で、且つ悲慘な種となる。

その意味に於てドイツのインフレ時代は、戰後復興ドイツ史中の、一番物凄い地獄の姿を現はした一頁であつたと言へる。この試練を通し、この苦痛を經て、起ち上つたドイツ精神であつたらばこそ、今日のドイツにはなほ光榮の輝きが見えるのである。今のドイツの偉大は、決して代償を拂はないで、天から降つて來た偶然の拾得物ではなかつた！

國內的な出來事としての大インフレは、同時に對外的にも、種々の影響を及ぼ

したものである。前にも述べたやうに、この様な狀態ではドイツとしても——國家の建直しによつて、財政經濟の事情が一變しない限り——常識から考へて、賠償金の支拂ひなんか、到底及びもつかなかつたので、ドイツ政府は屢々その窮狀を、賠償委員會に訴へて、その支拂の猶豫を乞うた。然るに元來、ドイツ民族の滅亡を企圖してゐるフランス側が、之れを聽入れる筈がない。これはドイツの横着なサボタージュだとの理由で、一九二三年一月、遂にベルギーを誘つて、ドイツ唯一の炭田地方たるルールの占領を斷行した。フランス將校に引率され、頭の頂邊から足の爪先まで、鐵甲と機關銃と投擲彈とで隙目なく武裝したアフリカの黑奴兵が、旗鼓堂々とラインの鐵橋を押渡り、更に轟々たる戰車の轍の音を立てて、ゲルゼンキルヘン市に……ボーフーム市に……エッセン市に……要するにドイツの心臟部に進擊してきたのだ。さすがのドイツ政府も憤然色をなし、その報復手段として、即時に消極的抵抗の命令を發し、それ等の地方に於ける坑夫や勞

働者に、總罷業を敢行させた。消極的抵抗に滿足しないで、武力を以て之に抗爭しようと、同志一味を糾合した愛國の青年士官シュラーゲタア大尉が捕へられ、銃殺の刑に處せられたのも、正にこの時である。ドイツ青年のフランスに對する憎惡の念は、それによつて益々募り行つた。

ルール占領と消極的抵抗との爭ひは、フランスにとりて何等の獲る所もなかつたと共に、ドイツ國內の產業界も亦、名狀すべからざる困難に陷つたものである。惡性インフレはその高潮に達し、國民は全く戰々兢々として、胸を安んずる暇もなかつた。共產黨がザクセンに獨立運動を起すし、ライン地方にはドルテン博士なる賣國奴を中心に、フランスの金によつて獨立が計畫されるし、又反對にヒットラアが南獨に於て、有名なミュンヘン一揆を起したのも、丁度この時分のことなのである。

一六、均衡外交とマルク貨の安定

尤も大インフレは、その間に終熄の時期が來た。

貨幣價値も斯ういふ風に、ある度合を蹈み外して顚落し始めたものは、どんな財政上の名匠と雖も、これを停止する技術はない。たゞ行き着く所まで行くのを、見てゐるより他に方法はないのである。然し行き着く所まで行つた以上は、本當の財政技術の達人である限り、これを整理し統合し、尠くとも正常の姿に戻せない譯のものでもない。所がドイツのマルク貨の場合は、本當にその行き着く所までいつたのである。價値は大體零に等しいものとなつた。零以上に顚落の仕樣はない。それに今迄は政治上の理由も伴つて、ドイツ政府としても——勿論、意識的計畫的ではなかつたらうが——尠くともマルク貨が無價値となることを、

望んでゐた傾きもないではない。それによつて賠償問題を、永引かせる手段に應用し得ることは誰にでも考へられる所である。

だがドイツ政府はさういふマルク貨を、自動的に落して、之れを外交目的に使つてやらうと考へたがためか否かは別問題として、尠くともその大インフレの三年間は、藏相ヘルフェリヒのやうな頭の綿密な金融技術の專門家でも、又シャハト（後にはヒットラアの財政顧問格でナチス初期の財政及び貿易政策の重要人物となつたのだが、まだこの當時は自由主義的な銀行家であつた）のやうな理財家でも、殆ど指を咥へて、成行に任せてゐた觀がある。

所が貨幣價値が零にまで行き着いたので、是等練達の士は始めて表面に乘りだして、所謂マルク貨幣の安定策に沒頭し始めた。それには一番大きな條件がある。その條件はドイツ自身の國是方針を示すものであつて、その國是方針が變らない限り、どんな財政上の名人でも、マルク貨幣の安全策を考へ出しやうがない

のである。

この條件に最も適合した人物は、グスタフ・シュトレーゼマンであつた。この人は一九二三年八月に宰相の地位につき、組閣後僅かに二箇月にして挂冠したが、その後もドイツ外相として、一九二九年その死に至るまで歴任し、所謂シュトレーゼマンの『均衡外交』なるものに努力した。彼はその最初、マルク貨安定運動に、一應の努力はしてみたが、中々物になりさうにもない。そこで彼の建前としては、マルク貨の安定は人心の不安狀態を一掃するに在り……人心の不安一掃には、産業方面に於ける國民才能を、自由に發揮せしむるに限る……國民の才能を安んじて發揮させるには、どうしても茲しばらく戰爭、敵視、發怒等の感情を和げる必要がある……それにはいつまでもフランスと喧嘩する狀態ではいけない……然も今フランスと喧嘩すれば負けるに極つてゐるが、負けてもなほ之れに反抗しようといふ態度、即ち絶望的緊張の態度が、國民心理に反映して、人心の

不安がいつまでも解消しないのだ……從つてマルク貨を安定せしむる第一の基礎は、フランスと仲を直して、協調の外交をやるに限る……といふ考へを持ちはじめた。

この考へ方は間違つてはゐない。なぜならシュトレーゼマンの觀點に立つて、始めてドイツの復興といふものが、具體的な第一歩をふみ出し得たからである。ドイツの復興のためには、歐洲全體の安全が必要條件である。然るにドイツ自身が歐洲全體の安定を破壞して、腹癒せをしようとの態度では、歐洲自身が良くならぬのみならず、ドイツの復興は到底望まれないし、從つてドイツの將來には、希望も光明も發見されないのである。

さういふ出發點からして、彼はフランスにありて、それと同じ考へ方をしてゐたブリアンと提携し、歐洲大陸全體が精神的に理解し合へるやうな平和外交を、强調し始めたのである。同時にさういふ基礎方針の上に、右に述べたヘルフュリ

ッヒ博士なり（この人はその後間もなくイタリアへ行く途中、汽車事故のために、不慮の死を遂げたが）、或は銀行家のシャハトなりが、レンテン・マルクの制度を採用し、さしもの難物たりし大インフレを見事に克服することが出來た。

レンテン・マルク制（その最初の出發はボーデン・マルク制）は、今迄のやうに金を準備とせず、土地、森林、建築物等の不動産を企業の擔保として、單位紙幣を發行し、その標準を一兆マルク＝一レンテン・マルクに換算し、なるべく急激に、濫費紙幣を回收しようとしたものである。そしてそれに依つて安定した事情を見屆けた上、一九二四年十一月には、新たに貨幣法を發布して、再び金準備に立脚したライヒス・マルク貨が發行され、こゝにドイツの通貨は、始めて舊に復することが出來たので、所謂大インフレは魔術の溶けたやうに、雲霧消散してしまつた。

一七、自由主義による復興

歴史は常に繰返へすといふが、マルク貨安定の大事業を完成した同じ方法と、世界觀とは、今日のナチスの國策の中にも、繼承(けいしょう)された形で底光(そこびか)りしてゐる。

卽ちシュトレーゼマンが歐洲大陸の協調平和を、ドイツ民族復興の目標とした點は、今日のナチスに於ても歐洲新秩序の建設といふ形式で繼承されてゐる。又シャハト以下の、金を準備しないで不動産及び企業を擔保とし、レンテン・マルク制を創設した遣方(やりかた)は、多少その意義は違ふけれども、矢張り今日、フンク經濟相などの發表してゐるやうな、勞働力を基礎とする貨幣及び金融制度といふナチス式考へ方の濫觴(らんしやう)をなすものである。

然しその當時のシュトレーゼマン＝シャハトの政策は、その根本に於ては、ナ

チスのそれとは逆になつてゐると言ふことをも、見遁すことは出來ない。シュトレーゼマン＝シャハトの政策は、その目的が單なる自由主義の起伏の波の間に間に漂つてゐるうちに、眼前に控へた大きな困難と窮狀とを、打開したといふに過ぎない。彼等の事業は『復舊』であつて『創設』ではないのだ。正常なる自由主義への復舊である限り、その自由主義に次の困難な暴風が來た場合は、又必ず別の意味に於て行詰まらなければならぬに極つてゐる。例へばインフレは打開したと言つて喜んでゐても、次にデフレが來れば、又行詰まる運命を控へてゐる。最初のシャハトなどが、形式上は金本位によらざる新貨幣制度を採用したと言つても、彼等の貨幣價格安定の目標が、新しい世界觀の創造ではなくて、單にもとの金本位に復舊すべき過渡期の準備工作であるに過ぎなかつたものだから、マルク貨安定の一應の見當がつくと、當時のドイツは、又もとの金本位制へ復歸してしまつたのである。その意味に於てシュトレーゼマンやシャハトの如きは——ある

一部の人々は共和國時代の立派な政治家であつたやうに激賞してゐるやうだが——純然たるドイツの政治家ではない。一時人心を鎮定せしむるために非凡な能力を持つた政治上の……一種の技師に過ぎなかつたのだ。

然り、シュトレーゼマンの政治技師としての方式は——シャハトは其の後に物の考へ方も非常に變つて來たのであるから、茲には暫く見ないことにして——ドイツに固有なる傳統的精神を完全に清算し、十八世紀以後に於ける『西歐的ドイツ民族』といふ立場に於て、英米佛人と比肩して、負けをとらないやう、彼等の間に相互し相交はり、そのうちドイツ民族を一番高いものに引上げようといふ計畫だつたのである。ドイツ人が戰爭に負けたのも、戰爭に苦しい目に逢はなければならないのも、要するに偏狹な分爭的ゲルマニズムに閉ぢ籠つて、自らを高しとするからいけない。だから之れに反感を懷く西歐流の自由主義諸國は、永遠にドイツを敵に廻し、互ひに結束してドイツに打擊を與へようとするのだ。この際

ドイツ自身が、極端な自由主義の基礎に復歸し、英米佛なみに調子を揃へたなら、どうなるだらうか？　それは英米佛の陣門に降つて、協調提携の形式をとるといふ建前に於ては、一見極めて卑屈のやうであるけれども、それによつてドイツ國内に秩序が整ひ、ドイツの紊亂した經濟が、ある程度まで復興した曉には、ドイツ人本來の聰明さと、優秀なる科學性と、比類のない勤勉努力とによつて、相手の英米佛などを後へ瞠若たらしむる時代が、屹度來るに違ひない。この際ドイツが、獨り退け者になつてゐるのではなく、自ら進んで西歐自由主義及びアメリカニズムのお仲間入りをし、彼等と同じスタートに立つて、マラソン競爭を始める限り、未來は確かにドイツのものだ……といふのがシュトレーゼマン一派の世界觀だつたのである。

從つてシュトレーゼマン式な世界觀に據ると、（一）將來の經濟的繁榮を購ふがため、ドイツ本來の獨自の魂を、悉く西歐的自由主義とアメリカニズムに賣渡

すといふことになり、又(二)それによりて一時マルク貨を安定し、外觀上の繁榮を來したやうに見えても、次に大きな恐慌なり不況なり（物質的精神的兩面に於て）が訪れた時は、今度こそ本當に行詰まらなければならぬ危險を、その內部に包藏したものであつたと言へよう。

一八、ドーズ氏のパイプの煙

それは兎も角、シュトレーゼマン式な協調均衡の內政外交方針により、彼の偉大なる功績(?)として、當時の人々に謳はれたのは（1）戰債問題への一應の解決と、（2）ロカルノ條約及び國際聯盟への加入とであつた。

戰債問題が一時解決したやうに見えたのは、かの有名なドーズ案が成立したからである。この案は、ドイツの財政を建て直し、ドイツが賠償金を支拂ひ得る方

法を發見するために、米國モルガン財閥の番頭ドーズによつて、案出されたものだ。そしてこの案に據ると、賠償金額は幾らに値切るか、それとも元のまゝに据置くかといふやうな、基礎金額の問題には觸れぬことにして、たゞ毎年ドイツの產業が（從つてドイツ人の勞働力が）、一體どれだけの金額を本當に支拂ひ得るかの金額を合理的に算定し、これを債權國に引渡して行くといふのである。

今迄は一千三百二十億だとか、いやそれよりも多いとか少いとかと、議論ばかりしてゐた。その議論の結着がない點自身が、既に雲を摑むやうな曖昧さであるが、更に一千三百二十億などといふ數字そのものが——所謂天文學的數字で——普通の算盤を執る人間の頭にピンと來ない所である。だからそんなハッキリしない原則論は放つておいて、ドイツから取立てられる金額だけをサッサと取立てゝ、それを半世紀も續けるなら相當の額になるだらう。議論して喧嘩した揚句一文にもならぬより、其の方が實際的で餘程賢い……

例へばドイツに國有鐵道といふものがある。ドイツは世界で一二を爭ふ鐵道の發達した所だから、鐵道事業の仕事は驚く程尨大なものだ。だがその鐵道の收益から勝手に賠償金に該當するものを取上げて行けば、いかに規模の雄大な鐵道事業でも、そのうら資本金を喰込んで、萎靡して行くかもしれぬから、そんな取立て方はいけない。それよりもドイツの鐵道には、今迄社債といふものがあつた筈だ。どんな鐵道會社にも社債を持たぬものなどといふものは有る筈がない。と調べて見るとなる程ドイツの國有鐵道にも、二百億に近い大きな社債を、今迄は背負つてゐたものである。然るに大インフレのために、その社債は帳消しになつたも同然で、從つてドイツの鐵道は、大インフレのおかげで、社債の利子を支拂ふ必要なく、却つて非常に樂な仕事をしてゐる。

それならドイツの鐵道に對し、今迄と同じやうな社債が存在するものと假定し、そのうちの年八分といふものを、今迄に在つた社債の利子だと諦めて、それ

を年々支拂つて行けば、鐵道會社としてもさう苦痛でなく、それだけの金は支出することが出來る譯だ。それは鐵道に限つたことではない。鐵工業でも化學工業でも、或は鑛山業でも、ホテル經營でも、さういふ餘り肚の痛まない方法で、一定の金を絞り出すことは、さう骨の折れるものではないのだ。

だが然し、それも初めから、ドイツの企業經營を痛みつけるとあつては、折角金融界が安定してゐるのを不信用にして、又以前のインフレなどを起させる心配がないでもない。從つてこのやうな賠償金を取立てる最初の數年は、米國がドイツへ投資の形で金を貸してやる。ドイツ人は產業にいそしんで、その資本を利用して、國內の繁榮を計り、その中から前に言つたやうな僅かな金をせめ出して、それを賠償金とすればいゝだらう……

といふのがドーズ案の骨子なのである。さすが算盤の國のアメリカから、現實的な數字をキチンと表に作つて、賠償委員會に提出したものだから、その頭のよ

さに世界は感嘆の聲を擧げた。所でよく考へてみると、こんな几帳面な合理性の方が、皮肉なことには却つて空想的なのである。其後二三年の間ドイツ人は、ドーズ案の計畫に從つて多少の賠償金なるものを支拂ひはした。同時に米國から大枚の金を借りて、その國內の產業を繁榮ならしめ得た。然し貸金で負債を拂はせるやうな建前で、然もそれを賠償金の形で取立てるといふ物の考へ方は、假令算盤にいくらキチンと合つてゐた所で、到底それはドン・キホーテ式な計畫である。ドーズの咥へたパイプから立昇る煙のやうに、取留めもない空想だ。何故なら一旦ドイツに國民主義が起つて、そんなものはもう拂はぬと決心した以上、金は一文も取れぬのみか、貸した金さへフイになつて了ふ性質のものだからである。由來ユダヤ人は現實的で計算的で實際的だといふ。だがその現實と計算と實際とは、往々にして勘定合つて錢足らずとでもいふやうな、空想と跳躍の彼岸に消えて了ふことが多い。だからこれほど立派に見えたドーズ案が、間もなく二進とも

動けないやうに行詰つたのだ！

そんな事ならドーズ氏は、初めから『戰債賠償一切帳消し』の案を作つた方が、餘程賢こかつたといふことになる！

一九、ロカルノと聯盟加入

その次はロカルノ條約と國際聯盟加入の問題である。

ロカルノ條約と言ふのは、一九二五年十月、スイスのロカルノといふ風光明媚な避暑地に於て、締結せられた條約であつて、その骨子となす所は『歐洲の現狀維持』と、『國際間の紛爭は仲裁々判に附すこと』を約束したものだ。その中でドイツにとつて最も重要なのは、英佛獨伊白の五國が相互保障條約を結んで、それにより特にライン河流域地方に起るべき紛議を避けようとした點なのである。

それまでのドイツが、對外親善關係を結んだ條約と言ふのは、一九二二年に、ソ聯との間に結んだラパッロ親善條約といふのが、たゞ一つ存在してゐたゞけであつた。それほどドイツは、その當時世界の各國から退け者にされ、特殊の扱ひを受けてゐたものである。しかもラパッロ條約といふのは、西歐諸國が賠償金の問題を、餘りにも威壓的に强制するので、ドイツとしてもその桎梏から免れる窮餘の一策として、一方で同じく西歐諸國から特殊扱ひを受けてゐるソ聯と握手して締結した一種の皮肉なそして示威運動的な條約なのである。所がシュトレーゼマン外相の時代になると、さういふタクチークの問題を離れて、右に述べた歐洲諸列强と、相互保障の條約を締結し、その上更にポーランドとか、チェコスロヴァキアといふやうな、本來ドイツ民族の發展を阻止する目的を以て作られた隣接諸國とも、仲裁々判條約を結んだのである。その基礎に於て、翌二六年の九月になると、ドイツは國際聯盟加入を斷行し、その常任理事國の一つとなつた。

この事は當時の一般から、シュトレーゼマンの平和に貢獻する偉大なる功績として謳はれたものである。從つてシュトレーゼマンは、フランスのブリアンと共に、ノーベル平和賞の受領者となつた位だ。

だがこれによつて、ドイツ民族固有の生命は、全く瀕死の狀態になつたといふことも、同時に考へなければならぬ。換言すればドーズ案により、賠償の可能を米國に任せ、ロカルノ條約の締結と國際聯盟への加入によつて、現狀の維持に暫定の平和を購ひ得たといふことは、國際ユダヤ財閥と西歐自由主義の、ドイツに於ける偉大なる勝利を物語るものであるとするも、本來のドイツ民族の眞意義と價値とは、完全に失はれたことゝなる。

なぜなら是等の所謂『積極的了解』(當時の共和國政府の政治的標語)は、要するにヴェルサイユ條約の忠實なる遵守を前提とするものであつて、その條約の不合理を克服しようとするドイツの精神的な復興の面目は、惜しげもなく放棄され

たことゝなるからである。

ヴェルサイユ條約は前にも述べた通りドイツ民族の再起不能を目的として作られたものだ。その植民地沒收、軍備制限、ドイツ國領土の寸斷、賠償金の賦課等は、一定の限度を越えた過酷なもの、從つてドイツが起ち上らうにも起ち上れない程度に、鐵鎖によりて之れを縛り付けたものなのである。それに對してドイツが不平を唱へ、その鐵鎖を斷ち切らうと努力するやうな場合は、民族自決の美名のもとにドイツ國を背面から、また横合から匕首を以つて脅しつけるやうに、ポーランドなり、チェコスロヴァキアなり、其他バルカンの小聯合國なりといふ澤山な國家を、旨く配置してある體制なのである。

さう言ふ『ドイツ民族の自滅』を目的とした現狀の維持を承認することは、結局ドイツ民族自滅それ自身を、甘んじて承認するといふことに等しい。それだからドイツ民族の滅亡を肯じない決心を持つた眞のドイツ人である限り、既に大戰

の『戰罪』を引受けることさへ堪へ難いことだ。そこでドイツが力盡きて躓いてゐる矢先だから、聯合國の暴力的脅迫の事實を、已むを得ざる害惡として堪へ忍ぶといふ事と、本當に自分が惡かつた、これからはドイツ魂といふ惡い魂を入れ替へて、將來は西歐流の物質的な自由主義精神の仲間入りをして、ドイツの自滅を計つてゐるヴェルサイユ條約を承認するといふこととは、本來全く別問題なのである。

だからドイツが國家として生きるためには、ヴェルサイユ條約を粉碎する建前が、何を措いても必要であつたのだ。ナチスが起つて、何よりも重點を置いたのも、矢張りそこであつた。ナチスが當時の共和國政府——ワイマア憲法の擁護者——を蛇蝎の如く嫌つて、その『システム』を根こそぎに覆へした所以のものは、是等の『システム』を擁護する者達が無爲無能で、ドイツの發展を行詰まらせたから惡いといふのではない。ドイツ人の魂を西歐人に賣つてしまつた行爲を

惜んだのだ。換言すれば『システム』によつて、ドイツが繁榮の域に達するか達しないかは問題でなく、むしろ國民倫理の問題として、ワイマア憲法式なやり方は、どうしても放つておけない……といふのが、後のナチスの世界觀的立脚點であつた。

然しこの點に就いて、當時一般のドイツ人の反省は、充分ではなかつた。ゲルマン主義の再認識に對しては、まだその機が熟してゐなかつたものである。從つて一九二五年に、大統領エーベルトが死んで、その後繼者たる老ヒンデンブルグ元帥が七十八歳にして大統領の位を嗣ぎ、そして其の後五ヶ年間は、假令經濟的方面においてドイツは復興の上り坂のやうに世人の眼には映つたけれど、その實ドイツは精神的に、目に見えぬ下り坂を、大へんな勢で轉落しつゝあつたのである！

二〇、繁榮と合理化

以上の經緯は兎も角として、ドイツが自國傳統の魂を質に入れ、西歐ユダヤ人的な金權政治の陣門に降る平和政策を執つて以來、その所謂經濟的復興なるものには、實に眼覺ましいものがあつた。世人はそれでドイツが、偉くなつたものだと、驚嘆の眼を瞠つたものである。

一九二〇年當時は、ドイツの經濟的復興など、絶望的に見えたものだ。所が一九二五——七年頃には、大體が大戰以前の膨脹ドイツ帝國と同樣か、または遙かにそれ以上の水準に達した。

例へば石炭の毎月の產出額の如き、大戰前のドイツ帝國では、一千百七十萬噸を出してゐたものが、一九二七年には一千二百八十萬噸となり、銑鐵は毎月九十

一萬噸が百九萬一千噸となり、鋼鐵は九十九萬三千噸が百三十四萬七千噸となり、加里の如きも百十八萬九千噸が百二十六萬九千噸に上昇してゐる。これなどは大戰前の狀態を遙かに凌駕した主要生產品の例であるが、勿論何でもかでも大戰前以上の域に達した譯ではない。例へば商船の如き、大戰前は五百五十萬噸を保有してゐたものが、一九二五年には三百萬噸を恢復した程度である。然しその商船は大戰直後一度零に等しくなつてゐたものだ。零に近い點から僅かに五六年の間に、新造船三百萬噸といふ世界一流の海運國に伍し得る程度に躍進したといふことは、何と言つてもその復興振りの偉大なるに、舌を捲かざるを得ない。

然しこの驚くべき經濟復興は、その裏面から觀察する時は、決してドイツ民族の偉大を物語るものではない。勿論ドイツ民族が、企業的科學的に於て、優れた能力の持主であり、隱忍持久と勤勉努力であることの證左とはなるが、それかとて必ずしも、ドイツ民族の眞の底力を示す强さは、そこに現はれてゐないのであ

る。

なぜならヴェルサイユの體制はどこから考へても、近い將來に第二次の世界大戰を勃發せしむべき、至極不完全なそして無理な體制であつた。それにも拘らず當時のドイツの爲政者は、この體制が恰も平和の基礎であるかのごとき假想の下に、經濟の復興を志したのだ。だからドイツは大戰に於てまだ負けてゐないとの、あのヒンデンブルグ元帥が休戰提議の代表者を涙ながらに送つたときの決心は、全然消して了ふ條件に於て、始めて樹立さるべき『システム』なのである。自分を敗北主義の地位に置いて、自分の起ち上るのを抑へるヴェルサイユ精神を、換言すれば近い將來に於て渾沌と不和とから戰爭の勃發を惹起するにきまつてゐるヴェルサイユ體制を認めたといふ點に、ドイツの未來の絶望が横はつてゐた。

それと同時に經濟的繁榮自身も亦、決して絶對的なものではなかつた。一見繁榮らしく見えて、其の裏面は缺點だらけであり、穴だらけであり、そして所々に

蟲が入つてゐたのである。その次第は斯うだ——

一體ドイツの資本家は、大戰及び革命後の混亂に乘じて——今迄のやうに官僚やプロシア軍閥の力がなくなつたのを、いゝことにして——却つて社會の各層に支配力を高め、特にインフレ時代には、多くの群小企業を併呑し、又爲替安を利用して海外に投賣りによる販路を開拓したものだから、財界安定時代に於ては、寧ろ英米佛等の先進資本主義國よりも、もつと高度化した爛熟資本主義國となり得たのである。換言すれば世界の資本主義國中の第三階梯の末期を行く、一番進んだ資本主義國家の型となつてしまつた。

餘りにも高度の資本主義狀態は、見方によると資本主義の最後の行詰りを意味するものである。そこで今迄のやうな放漫な自由競爭の形で、その高度性を維持することが出來なくなつたものだから、その資本主義の圓滑な運營のために、遂に產業の合理化が避くべからざるものとなつて來た。言ひ換へると、既に大戰前

に始まりかけてゐた企業の獨占集中の傾向が、極端に酷くなり、今迄のやうな同一種類の產業を、所謂水平的に結合したばかりでなく、更に進んで相互に有機的聯關ある產業を所謂垂直的に結合するやうな運動となり、それによつて莫大な生產費の節約が起ると同時に、利潤の增大が非常に偏したものとなつたのである。

斯くしてドイツの經濟企業面は、著しく『コンツェルン』化した。例へばスチンネスを中心に作られたスチンネス・コンツェルンの如きは、ドイツ・ルクセンブルグ鑛業會社、ゲルゼンキルヘン鑛業會社、ボーフーム鑛山製鐵會社の三大トラストを糾合したものへ、其他の石炭、鐵、海運、造船、製紙、印刷、通信、新聞等を傘下に集め、全體を統一した企業によつて經營したために、當時のドイツの國富を殆ど一手に掻きさらへることができたなどは、その典型的なものである。勿論スチンネス・コンツェルンは、所謂インフレ型のものであつたから、インフレ時代が經過して、デフレの世の中が來ると、遂にコンツェルン自身が次第

に解體崩壞の途を辿らざるを得なかつたが、デフレ時代になつても、更に又新たにシーメンス、アー・エー・ゲー、クルップ等の古い諸會社が、何れも時代に適するコンツェルンの形で起ち上り、又ウォルフ、チッセン其他の全然新しいコンツェルンも、續々あとから輩出して、スチンネスの破產した後の後繼者たる役割を引受けていつた。要するに國內の富は、是等の合理化された數人の者の手に壟斷されてしまつた、といふことに歸着する。

二、外には統一、內には分裂

從つてドイツの繁榮は、これと經濟的競爭の立場にある他の資本主義諸國にとりては、驚くべき大きなドイツ的結束の力と見え、將來怖るべき敵であるかの印象を與へたが、これを對內的に見ると、そはドイツの結束に非ずして寧ろ非常な

分裂でもあり、不統一でもあつたのだ。

分りやすく言へば、高度自由主義による經濟が、繁榮に進めば進むだけ、國富の片寄りが出來て、國民大衆は不滿な狀態となる。殊に產業が合理化過程に入ると、勞働力の節約が主眼となるため、失業者は次第に增加の傾向を示し、年に平均百萬人、冬期になると百五十萬から二百萬人の失職者が、街頭に放り出されることゝなつた。

尤もそれは當然の結果なのである。さういふ高度の資本主義的な經營形態に移つてゐる場合、ドイツやイギリスのやうな國では、或は百萬や二百萬の勞働者が所謂產業豫備軍として控へてゐてくれないと、賃銀が上つて仕樣がない。賃銀の上騰によつて生產費が嵩むやうなら、その產業豫備軍として控へてゐる失業者群を以て、高い賃銀を要求する勞働者と、入れかへることが出來るので、その意味に於てドイツのやうに資本主義の進んだ國に、百萬や二百萬の失業者が出ること

は、寧ろ正常なのである。

然しそれには是等の失業者が、政治化しないといふ條件を、第一に必要とする。是等の失業者が、社會主義なり共産主義にかぶれて、政黨を組織し、暴動を起すか或は議會の多數主義を武器として戰ひを挑んで來る場合は、資本階級側は之れに抗爭する力が極めて弱いのである。それから失業者は産業豫備軍として必要ではあると言つても、それには一定の程度があり、百萬や二百萬が程度を越えて四百萬も五百萬にもなるやうな傾向がある場合は、資本家の造つてゐる國家と雖も、この不生産的な大失業群を、直接に救濟するなり、或は失業保險其他の制度によつて、尠くとも飯を喰はせてやる覺悟が必要だ。それには莫大な金がかゝる。いくら合理化で節約して儲かつたと思つても、その儲かつた金で、たゞ遊んでる人間に、無駄な飯を喰はせる失業が多いとあつては、どんな資本家萬能の國家でも、旨くやつて行かれる筈がない。

所が右の二つの心配が『産業の繁榮』に喜んで、有頂天になつたと思ふ瞬間から、もう始まりかけたのである。換言すれば、(一)勞働階級は急激に過激な政治圏内にはひつて來たし、(二)同時に失業者が多くなるにつれその救濟のために國家の財政は窮乏を告げ、どうにもその狀態ではやつて行かれなくなつた。斯くしてドイツのヴェルサイユ體制承認の政策は、一方に於てドイツ民族が、その本來の魂を西歐の敗北主義に賣渡したからいけない、といふ精神的方面は見ないことにしても、事實の方面で、既にその『繁榮』は行き詰り、從つてそんな政策は、ドイツの底力を示すものではなく、反對にドイツの弱さを暴露する原因となつたのである。

それを具體的に言ふと、勞働階級の政黨は、一方社會民主黨が資本主義との鬪爭で無力化した代り、今度は共產黨が單なるテロを淸算して議會進出に乘出し、議會では常に第四位を下らぬ有力な政黨となつて、黨首テールマンの如きは大統

領選擧に於て、候補としての名乘りを擧げ得る情勢を示した。

又始め百萬、二百萬だつた失業群は、一九二八年後の世界的不況が訪れると共に、ドイツは眞先にその打擊を蒙つて、一九三〇年頃には常に六七百萬の失業者を有することゝなり、これが扶助救濟のために、國家の必要とする豫算が、常に四十億マルクを下らなくなつたので、それではドイツとしても、到底破產以外には、立つて行かれないといふ窮境に到達したのである。

そこでドイツを救濟し得るもの、ドイツをその底力から本當に建直して、民族の高揚に至らしむる仕事をなし得るものは、ヴェルサイユ條約破棄の大決心をもつて立つ政治力でなければならぬ、といふことに相場がきまつた。問題は『これか、それか』である。その中間は許されぬ。

その中間として戰債問題の行詰りからヤング案なるものに依つて、ドイツの賠償金額は、僅かに總額が三百五十八億に引下げられ、その支拂ひ條件も餘程緩和

された。然しそれでも問題は少しも解決しない。國内の政治方面でも、社會民主黨首のヘルマン・ミュラー内閣から、一九三〇年には中央黨のブリュンニングを首班とする内閣に移り、それが二ヶ年の間續いて、パーペン、更にシュライヘル將軍といふやうに移つていつたが、是等は總てヴェルサイユ體制緩和策が、その基礎となつてゐるものであつて、根本的な點に觸れてゐなかつたのである。

どうしても前に述べたやうに、先づ何よりも斷乎として、ヴェルサイユの鐵鎖を斷ち切り、『獨逸は負けてゐない』とのヒンデンブルグの決心を實現し、從つてドイツの『戰罪』を徹底的に否定して、寧ろ歐洲にドイツ流の新體制を布くやうな指導原理を持つ政治力の存在のみが、ドイツの前途を確保するものなることが、明かとなつてきた。

この大きな責任を負うて起つたのが、ナチスなのである。換言すれば今日わが日本の盟邦となつて、歐洲に新秩序を建設しようといふ大きな理想の下に、英米

の勢力と覇を爭つてゐるドイツなのである。このナチス・ドイツなるものは、アドルフ・ヒットラアといふ偉大な指導的人物により、象徴されてゐる姿であるから、今日のドイツが世界の文化史上に、どんな役割を演じてゐるかの事實を見る前に、私達はまづ、一應ナチスなるものゝ成立發達の歴史と、ヒットラアなる指導者の人間とを、ハッキリ把握しておくことゝしよう。

第二編・

秩序より復興へ

―(ワイマア憲法下のドイツ)―

一、ナチスの生誕

國民社會主義獨逸勞働黨（ナチス）といふ一つの政黨は、歐洲大戰が休戰期に入つて、間もなく成立したものである。

普通ナチスの誕生は、一九一九年一月十五日といふことになつてゐる。尤もその頃には、ドレクスラア他數名のものが、ドイツ勞働黨といふ名目で、地下運動的に鳩首協議してゐた同志の集まりであつて、何等の政綱もなく、又今日の總統ヒットラアも、まだそれには加入してゐなかつたのであるから、それを今日のナチスの誕生日とする譯には行かぬ、などといろ〳〵の異論もあるやうだが、そんなことはどうでも宜敷い。

要するに歐洲大戰の休戰直後に、ドイツ民族はまだ大戰に負けてゐない、戰爭

はたゞの中休みであるから、今にもう一度起上つて、本當の決着を着ける……然もそれは單なる復讐戰ではなく、ドイツの勝利によつて、歐洲人の秩序ある歐洲を恢復しよう……といふ高い理想と目的とを以て、大戰の間に痛ましい幾多の經驗を積んだ戰線兵士の間に成立した政黨なのだ。

軍人の政黨であるから、選擧戰を生命とする政治上の權利義務による政黨ではなく、國家と民族との間に生命を獻げようといふ情緒と精神の政黨なのである。だが軍人の政黨と言つても、軍隊が在來の政治を弄んだり、或は之れに干涉する意味の政黨ではなくて、國民全體が擧國的に軍人となり得るやう、これを訓練し育成して行く意味の政黨なるに過ぎない。從つて政黨とは言ふものゝ、私達が今迄考へてゐた『政治』の團體とは、全然考への範疇を異にするのであつて、そこには相對的の觀念がない。政治も經濟も文化も道德も一つの民族生態の中に、總て引つくるめた意味での大きな政治、その政治へ參加するために、民族全體を

啓蒙し、教化し、指導し、刑罰して行く意思と力との團體なのである。

ヒットラア自身が、さういふ理念と資性とを持つた一人の兵隊であつた。彼が一九一九年の秋、この小さな『ドイツ勞働黨』といふ團體へ、第七號の黨員證を貰つて加入して以來、彼の燃ゆるが如き至誠と、そして彼の雄辯とによつて、この小さな團體は、忽ちのうちに擴大し、軈て名前を前に言つた『國民社會主義獨逸勞働黨』――共產主義者其他この黨に反對の立場にある人々から輕蔑の意味を以てナチスと呼ばれたもの――と改名した。

始めのうちは、その勢力がまだ微々たるもので、第一回の總會には、全部で僅かに百餘名の人間しか集まつて來なかつたし、然も黨自身僅かな金に窮してゐた頃だから、さう言ふ集會さへも、極めて稀にしか行へなかつたものである。だが一九二〇年一月になると、ゴットフリード・フェーダアといふ頭のいゝ黨員が黨の綱領二十五ケ條なるものを起草したので、稍々政黨らしい形式を整へ、翌二月二

十四日になつて、愈々第一回の大會をミュンヘンに開き、この綱領を採決し、之れに據つて黨員全部が活躍することゝなつた。

更にその年の夏には黨員ヒットラアの意見で、黨の徽章及び黨旗を鉤十字と定めた。鉤十字の起原及び語原等に就いても、今日なほ種々の議論もあるが、そんな詮索も亦どうでもいゝ。ヒットラアがこの旗印を掲げた當時は、これによつて民族の純潔、從つてユダヤ人に反對する意思を、表示したものであつたことだけは事實だ。換言すればヒットラアとその一味は、始めからドイツの復古運動をやる積りであつたのだ。

それから同年八月には更に黨の組織が改造され、突擊隊、親衞隊の制度も完備した。突擊隊はその當時暴力的な共產黨の襲擊に備へ、會場を整理擁護し、且つ青年訓練のために示威運動を行ふ目的を有するもので、親衞隊は黨首及び黨の幹部の身邊を護衞し、秩序によりて黨の行動に、威嚴を與ふる目的を以て作られた

ものである。

一九二一年七月二十九日、ヒットラアは愈々その新しい『政黨』の黨首に就任した。

一體このヒットラアといふ人物は、どういふ人間であつたか？

二、民族主義者としてのアドルフ・ヒットラア

アドルフ・ヒットラアは一八八九年四月二十日、舊墺匈帝國のブラウナウに生れた。父は下級の稅關吏で、從つて家計は貧乏であり、且つ彼自身生來極めて病弱な身體の持主であつたため、學業さへ充分に修めることが出來なかつた。十三歲でその父を失ひ、それまで通學してゐたレンツ市の、日本流でいふなら中學校のやうな學校を中途で退學し、何か藝術で身を立てるために、美術學校に入學し

た。彼は始めから美術家になりたかつたのだ。然し父は本來彼を役人にしようとして、常に之れに反對してゐたものであるが、彼の唯一の理解者であつた母親も、彼がその美術學校に在學中、即ち彼が十七歳の時に、遂に他界の人となつた。

そこで彼は無一物のまゝ、憧れの藝術の都ウィーンに出て、或る建築業の事務所に雇はれ、壁紙を貼る職人の仲間にはひつて、つぶさに勞働の苦痛をなめた。この青少年時代孤兒として貧窮な生活に堪へた經驗は、後年の彼に鐵の如き意思の持主としての性格を與へたものであらう。然も本來が藝術で身を立てようと志した人間だけあつて、その纖細で且つ熱烈な情緒は、當時のウィーンの空氣を異邦化してゐたユダヤ人に對し、激しい憎惡心を抱かしめ、從つて彼は其の頃から、既に醉へるが如きドイツ民族主義者（ゲルマニスト）となつてゐた。

一九一二年に墺太利を去つて、彼は南ドイツの首府ミュンヘンに移り、やがて世界大戰が始まると、志願兵としてバイエルンの軍隊に入隊し、西部戰線に戰つ

た。戰場に於て、彼は屢々偉勳を樹てゝ鐵十字章を得、その間二回に亙つて負傷したが、殊に一九一八年のランゲマルクの激戰には、毒瓦斯に中てられて、瀕死の重傷をさへ蒙つてゐる。

戰爭の間、彼の愛國心は益々高まつた。その點では今日のイタリアの指導者ムッソリーニと同樣である。さて一九一八年の十一月革命當時、ヒットラアはまだ病院生活をしてゐたものだが、退院後はそのまゝ默つて見てゐる譯に往かず、當時軍隊內で多數發生してゐた愛國的な政治集會に出席したのが、彼の政治運動に乘出す最初の動機であつた。そのうち『ドイツ勞働黨』なる小集會に出て、その席上計らずもフェーダアの國民社會主義の講演を聽いて痛く感激し、自分もその黨の仲間に入れて貰つて、前にも述べたやうに、その第七番目の黨員證を獲得した。

以上がアドルフ・ヒットラアの自ら起つて積極的に政治運動に携はる以前の、傳記の概略である。その邊の消息は、もう世人周知の事實であるから、特にヒッ

トラア傳でない本書としては、これ以上の細かい點を述べる必要はあるまいと思ふ。

たゞ茲に彼の傳記を考へるに就いて、特に私達の注意を喚起する點が二つばかりある。その第一は既にヒットラア自身がさうであつた如く、大凡その後のナチス運動に參加し、その幹部となり指導者となつた人物は、大抵戰線の兵士であつたといふ點である。卽ち今日ヒットラアの後繼者を以て目せられナチス・ドイツの空軍及び產業四箇年計畫の大立物として衆望を聚めたゲーリング元帥の如き、またヒットラア總統の肱股として副總理の地位を占むるヘッスの如き、或は食糧團の指導者にして農業大臣の要職を占め、ドイツ食糧問題の戰時體制を完成したワルタア・ダレエの如き、孰れも大戰の一兵卒として勇敢に戰ひ、然も名譽の負傷を受けた人々だといふことである。換言すればナチスをその理論方面から觀ると、後段にも說くやうにその中に種々の複雜な要素を含んだものであるかも知れ

ぬが、その感情的な方面から判斷すれば、要するにナチス運動は單純(たんじゅん)で、眞直ぐで、純眞な戰線兵士主義の氣持の延長だと見ることが出來よう。

第二にナチスの民族主義を極端に主張する主なる大立物は、ヒットラアを始め多くはドイツ國以外から來たドイツ人だといふ事實も、また何となく異樣に感ぜらるゝ點である。第一總統ヒットラア自身が墺太利(オーストリア)人である。本來ドイツの政治家と言へば、大抵プロシアの地主、官僚、軍人等であるべきが普通であつたのに、ナチス時代となると、プロシア以外の人間、例へばヒットラアのやうな墺太利人が、ドイツ全土に呼號し得るやうになつたのも不思議な氣がする。それは單に總統ヒットラアの場合のみでない。前に述べたワルタア・ダレエの如きも、實は南米アルゼンチンからやつて來た牧畜業者の子供である。又副首相ヘッスは、埃及(エヂプト)のアレキサンドリアに永住してゐた貿易商人の息子である。更にナチス世界觀の擔當者なる有名なローゼンベルグは、バルト地方に生れたドイツ人で、レー

ニングラードに於て教育を受けた人物なのである。

さう言ふやうに國運の傾いた時、之れを挽回せんとして起つた憂國の士は、本國人であるよりも、寧ろ異邦に永住した移住民の子孫である場合が極めて多いのは、一種不思議な現象であると言はねばならぬ。或は外國に移住しながら、その地で民族的な血の純性を保つてゐる人々の方が、鄕國の危急興廢に就いては、却つて鋭敏な感情を持ち得るためなのかも知れない。

例へていふと、フランス大革命の當時、フランスの本國では、自由平等の觀念が、妙な形に極端化して、人間はもう理性の舵機を失ひ、フランス的な本性がなくなつて、精神的に右往左往してゐた場合、嘗てイタリア領だつたコルシカ島の一ナポレオンが、同じ自由平等の思想に育ちながらも、なほフランスの祖國を救ふために本國に歸つて、あんな驚天動地の大事業をやつたことなどは、矢張りそのいゝ手本であらう。

又本國のパリに本當のフランス人が居なくなつた場合、大西洋の彼方のハイチの島――當時フランスの植民地――などでは、まだ中世紀頃のノルマンディ貴族の思想と感情とが、同地の開拓地主の中に、二三百年以來少しも損はれないで、傳統的に保存されてゐたものだから、さういふ植民地からの愛國者たちは、本國の沒落の有樣を見るに忍びず、續々としてナポレオン軍に投じて、眞にフランス的な民族解放戰に血を流したものも多かつた。

ドイツの例をとつて見ても亦さうである。かの一九一九年十一月の革命に於て、ベルリンや西ドイツ都市地方の、プロシア的ドイツ人の思想が、無意識のうちに社會民主黨化し始めた時、敢然立つて之れに反抗し、傳統のドイツ精神を政治の標榜として一歩も讓らなかつた者は――ヒットラア一派のナチスの發祥も、勿論その例の大きな一つに相違なかつたが――ドイツから見れば邊疆も邊疆、殆どドイツの中心からは外國にも等しいバルト諸邦に、四五百年も前から移住し

て、そこに生活の本據を定めてゐた騎士（移住地地主）の後裔であつた。それを始めはバルチクーム團と唱へ、後には鐵兜團の形に團體化し、更に後にはナチスの中へ溶け込んでしまつた。

さういふ工合に、眞に祖國を想ふ愛國者の群れは、一旦緩急ある場合に、國內の責任ある中心からは案外出て來ないで、却つてその國の邊疆から祖國救援の豪い人物を輩出することは、古今東西に共通した現象でなければならぬ。

殷鑑遠からず、明治維新の大業に翼賛の偉勳を樹てた勤王の諸名士は、大體日本の中心地から出ないで、殆ど交通機關も不完全で、米の飯も碌に喰つてゐなかつたやうな地方とか、山猿啼いて歇まざる如き人跡絕えたる地方封建の偏鄙などから輩出してゐるではないか？

その面影は矢張りナチスの發祥ヒットラアを始め、主なるナチスの人々の出身地と、その環境の中にも、明かに看取せられることと思ふ。

三、政綱の政黨

ナチスが一個の政黨であり、その政黨が特に强かつた所以のものは、ここに立派な政綱が備はつてをり、然もその政綱の實現に當り、黨員が孰れも鐵の如き意思を以て之れに努力したといふ點にある。

と言へば極めて平凡で簡單なやうにも聞えるが、さういふ狀態になることは、實際容易なことではない。既に一政黨が良い政綱を持つといふことからして、なかなか難かしいものである。在來の政治的傳統のみを墨守した政黨とか、財力等を以て糾合した政黨とか、或は生きた政治の實相に觸れないでたゞ理論のみに基いた政黨などの如きは、いつでも非常な弱點を包藏してゐる。その弱點とは良い政綱が持てないといふ事だ。假令持つても觀念的な美辭麗句を竝べたり、單なる

理想を織込(おりこ)んだり、在つても無くてもいゝやうな政綱しか掲(か)げられないといふのが普通である。

だから當時のドイツに於ける大政黨たる社會民主黨でも、ドイツ國民黨でも、人民黨でも、中央黨でも實際は碌な政綱を持つてゐなかつた。彼等は單なる電氣業の國營論だとか、國際聯盟に對する態度だとかの、具體的なもの二つ三つを掲げ、それを人道論や、社會理念や、ドイツ國民の本性などといふ餘り當然過ぎる抽象論でゴマ化し、たゞそのギラ〳〵光る場當りの文句で、選擧戰に多數を獲得しようといふ方面にばかり利用してゐたものである。

それに較べるとナチスの政綱二十五條は、極めて平凡な具體的事實の羅列であつた。然もその平凡な一條と雖も、それが實現されない限り、全體の二十四條は總て毀れてしまふやうな性質のものなのだ。一條たりとも血を以て購(あがな)はなければナチスそのものが滅びる性質の政綱なのだ。

だから黨員はその最少政綱を、一條たりとも讓ることの出來ないといふ最大の努力を以て、政治戰の中に飛び込んでいつたのである。從つて政綱の實現が、ナチス自身の生命であり、黨員各自の運命を支配するものであつた。だからナチスそのものは世界觀と至誠とに基く感情の政黨であつたに拘らず——日本流に換言すれば神がかりの政黨であつたに拘らず——その政綱二十五條を見ると、これはまた極めて平凡な、具體的な、それでゐてその一つ〳〵に、大きな戰ひを要する性質のものであつたと言ひ得よう。

一九二〇年二月二十四日に決定された黨の政綱が、どんなものであつたかに就いては一々それを箇條書きにして擧げないことにする。今日世に發表されてゐるナチスに關する書物の中には大抵附錄として、その譯文が掲げられてあるやうだから、玆に條文そのものを羅列する必要はないと思ふ。たゞ然しその中にどんなものがあつたかを想ひ出すために基礎となるものを拔書きしてみると、その二十

五條は結局斯ういふことゝなる。

(一)大ドイツ國を造ること、(二)ヴェルサイユ條約を破棄すべきこと、(三)植民地を恢復すべきこと、(四——八)ユダヤ人排擊、(九)國家市民の權利義務平等、(十)權利義務觀のドイツ的たるべきこと、從つて權利義務觀が精神的肉體的の創造にあること、(十一)利子奴隷制の打破、(十二)戰時利得の國家への返還、(十三)トラストの國有化、(十四)大經營利潤への國家の參加、(十五)養老制度の確立、(十六)中小產階級の生活權擁護、(十七)農地及び農業制度の根本的改革、(十八)反國家的行爲及び職業に對する重刑罰主義、從つて死刑制度の復活、(十九)ローマ法の排擊、從つて法律觀念の根本的改竄、(二十)國民教育制度の改革、(二十一)母性、幼兒、少年勞働者を中心とする國民保健厚生運動、(二十二)大國民軍の創設、(二十三)新聞出版等文化創設に關する施設の根本的改革、(二十四)公益優先觀念の確立、(二十五)議會制度の改正。

以上の二十五條はナチスの時代となつて悉く實現を見た。たゞその第十七條の農地改革に於て沒收其他の過激な用語が文字通りに應用されないで、然もその條文が改竄された點は例外だが、その他は一九二六年の總會に於て大體ナチスの永久的鐵則となり、然もこの政綱は今日ではみんな殘らず實現されて了つた譯だ。

四、ミュンヘン一揆

さて斯樣な具體的行動政綱をそれではナチスはどういふ順序で實現したか？始めは地下潛行的なクーデター（一揆）の方法を選んだのである。選んだといふよりは、それより外に方法がなかつたかもしれない。

なぜなら當時ナチスが同志を集めて團結してゐたのは、ミュンヘン、ニュルンベルグ等の南獨に於ける極く偏した小地域なのである。彼等の最初の勢力はさうい

ふやうに地方的であるにも拘らず、彼等の政綱の彼岸に横はる理想と世界觀とは、全獨統一を目的とするものだ。そこに彼等の大きな矛盾と惱みとがあつた。

若しも彼等の運動が、例へば當時の議會的に有力であつたバヴリア人民黨の如き地方人士の利害休戚に關するものであつたと假定すれば、ナチスは寧ろ南獨一帶を中心として選擧の地盤を固めればよかつた筈だ。だが彼等の目標は全獨糾合にあるのだ。

全獨糾合を目標とする限り、どうしても中央の政治的心臟部に進出して、政治的な戰ひを試むるより外に途がない。だから共產黨の如き勞働者階級の結束を必要とする政黨は、ベルリン及びハンブルグ又は中獨等の全ドイツに號令し得る中心的な工業地帶に本據を据ゑて、政治戰に沒頭してゐた。そこでナチスも全獨に號令するやうな政黨を作らうと思ふなら、どうしても共和國の首府のベルリンに侵出して行く必要があつた。南獨的な選擧戰の動き方をしてゐると、それが强く

なればなるだけ、却つて國內分爭の『セパラチスト』的な政團に墮する傾向が多くなる。

所が中央の首府ベルリンは當時の社會民主黨、デモクラット、其他一切の自由主義勢力の政治的、經濟的、金融的、文化的な『高き城』なのである。否單にドイツの自由主義的堅壘であつたのみか、ヤング案や賠償（從つて戰債）問題やモルガン財閥の借款等の經緯を通じて、當時の大ベルリンは實に世界の自由主義的トーチカだつたのだ。

それに對して田舍臭いバヴリアの隅から出て來たナチス黨が、多數決の選擧戰を利用して中央に乘出すことは、木に據つて魚を求むるよりも難かしい。

この絕望的な事情に搗て加へて、ナチスの黨員は元來戰線兵士上りの、武力的爭鬪を怖れない血氣盛んな連中ばかりなのだ。ヒットラア自身もまたその時分は齡も若くて、充分な政治的老練さと經驗とを持つてゐなかつた。

そこでベルリン進撃による一揆の計畫を考へ出したのが、一九二三年十一月八日の、所謂『ミュンヘン一揆』であつた。これは然し慘めに失敗した。

ヒットラアはそれまで、一揆がそれほど困難なものとは、考へてゐなかつたやうである。軍隊の指揮に就いては、ザイサアのやうな專門家もゐるし、それに昨日まではドイツ全軍を手足の如く動かしてゐた名將軍のルーデンドルフもこれに參加してゐるのだから、驚天動地の大事業が、一擧に完成し得られるものゝ如く過信してゐたものだらう。

然るにいかに立派な名將軍や指揮者がゐても、その手足となる軍隊が烏合の衆で、軍事專門的訓練を缺き、且つ他方に於て斯樣な一揆の策動をなす參謀本部が、全然斯樣な武力的行爲に反對の意見を持つてゐたのだから、電光石火の如き敏速な行動を要する一揆行動が、成功する筈はなかつた。換言すればヒットラアと同じ態度で起ち上らうと約束してゐたバヴリア首相のフォン・カールは、たゞ

バヴリアの獨立運動を見詰めてをり、ヒットラアはベルリン進擊に非常な希望をつないでゐたのだ。

ミュンヘン一揆の失敗は、要するに目的を異にする兩政派の分裂に起因する。その次第は、要するにバヴリア獨立運動のため、フォン・カール一派が、一麥酒料理店の廣間に於て、示威的集會を催してゐたのを、ヒットラアは自分の部下の突擊隊員を以て之れを包圍し、自ら會場の中央に於てルーデンドルフ將軍を軍事總帥に、ヒットラア自身を政策指導者となす新政府の成立を發表し、そこに居合せたフォン・カールにも、之れを承認させた。

然るに翌日となつて、愈々ベルリン進軍の示威運動を始めようとした場合に、カールは警察と通謀して、この示威運動を包圍攻擊し、それがため示威運動側には十六名の死者を出し、ヒットラア、ルーデンドルフ以下の首領は捕はれて、獄に繫がるゝことゝなつたのである。

五、ナチスを支持する人々

裁判の結果ルーデンドルフは無罪の宣言を受けたが、ヒットラアは五ヶ年の禁錮刑を受けて、ランツベルグに囹圄の人となり、ナチス突擊隊は解散を命ぜられ、ルーデンドルフ其他の脫落分子は、ナチス黨を去つて離散し始めた。

これはナチス黨の發達史に於て、極めて手酷しい受難忍苦の經驗であつた。同時に獄舍の中に於けるヒットラア自身も亦、これによつて政治行動の、いかに複雜にして困難なものであるかの、痛切な教訓を得た。非合法的戰術はこの際、着眼點が小さくて僥倖的である。眞に全獨人の魂を把握するためには、僥倖や幸運による政治行動を避けなければならぬ。寧ろ國民全體が納得の往くやうな、正々堂々たる合法的議會爭鬪によつて、政權を獲得するのが、この際眞の政治家の使

命である……といふ方向へ、ヒットラアの氣持が變つていつたのもこの時だ。その邊の彼の心境の變化は、彼の有名な著作『マイン・カンプ』の中に、細かに縷述されてゐる。

一九二四年の暮、彼は假出獄の恩典に浴して、ランツベルグの刑務所から娑婆に出た。その時からナチス運動の第二段階期が始まる。

一九二五年二月二十七日、ナチスは黨として再建せられ、それ以來議會に於ける同志獲得の運動に一路邁進したが、これもその始めは中々困難であつた。二五年から二八年迄の五年間は、議會に於ても殆ど伸びようにも伸び得られなかつたのだ。それには理由が二つある。一つは當時のドイツが、先にも述べたやうに、經濟上の繁榮期に逢着し、大衆の一般は自由主義によつてドイツの荊棘の途が伐り開かれ得るものゝ如き考へに、酩酊してゐたものだから、まだヒットラアの叫ぶ愛國の熱情に、靜かな耳を傾ける餘裕が少なかつたこと、それから他の一つは

黨内に於ける過激分子の反對に逢うて、一致の結束が旨く行かなかつたことなのだ。黨内の反對派といふのはシュトラッサア一派と、シュテンネス一派とである。この兩派は孰れもヒットラアの行動を、穩和に過ぐるものとし、黨内に異を樹てて相爭つた。シュトラッサアは頭腦の透徹な理論家であつて、彼の獻策により、ナチスがそれを實際綱領として採用したものも尠くない。後の聯盟脱退の如きも、實はシュトラッサアの方式を、そのまゝ採用したものである。序でながらシュトラッサアは、其後ナチスの有名な『血の肅正』によつて、殺戮の憂目を見た。

又一方シュテンネスは、ベルリンに於て久しくヒットラアの意を受けて、ベルリンの採題となつたゲッベルスと抗爭し、遂にナチス黨を脱して、支那にまで流轉していつた。シュテンネスが蔣介石の軍事顧問として、久しく重慶にゐたことは、今日では誰でも知つてゐる事實だ。

斯くしてナチス黨は、議會主義を標榜して起つたものゝ、一九二八年までの成

果は、僅かに議會内に十二の議席を獲得したに過ぎなかつた。

所が一九二八年以降、世界恐慌の煽りを喰つて、ドイツに先づ最初の深酷な不況の波が押寄せて來ると同時に、今迄自由主義に狎れて、それに有頂天となつてゐた國民の心理も、次第に冷靜となり、今迄『人と世界』とをのみ眺めてゐたものが、今度は『家と國家』とを懷古反省するやうになつて來た。それと共にナチスは、驚異的な膨脹をなし始めたのである。ヤング案反對の人民投票、一九三〇年の總選擧、一九三二年の大統領選擧及び第二回の總選擧等を經過して、ナチスは押しも押されもせぬ第一黨に躍進した。

ナチス黨が一躍第一黨たるの地位を克ち獲たのは、單に當時のドイツに於ける右翼的分子の勝利を物語るものではない。なぜなら右翼的政黨に有利な傾向となつてゐた結果の現はれであるとするなら、ナチス黨のみならず、當時の純然たる右翼政黨たる數多の小さな國粹黨や、ドイツ國民黨其他鐵兜團（之れは政黨で

はないが純然たる右翼の愛國運動）なども、同時に大きくならなければならぬ筈であつた。然るに是等の右翼諸政黨は、殆んど大きくならないのに拘らず、ナチス黨のみは群を抜いて躍進(やくしん)していつたのだ。

それはナチス黨が單なる右翼の政黨ではなく、ドイツの覺醒した國民全體の支持を受けたが爲めである。一體右翼左翼といふ言葉は、階級爭鬪の範疇觀念(はんちうくわんねん)を前提とする。その意味に於て右翼といふものは到底大きくなるべき性質のものではない。數に於てはいつでも左翼の方が多いのは當然の結果だ。然るにナチスには右翼も左翼もなかつた。ドイツ民族（ユダヤ人を除く）の擧國的運動なのだ。だから今迄の右翼からも左翼からも、階級を超越した投票を集め得た譯である。

では一體ナチスを支持し始めた國民層は、先づどんな種類のものであつたらうか？

第一は中商工業者及び中產階級（官吏、知識階級、學生を含む）である。彼等

は經濟的恐慌に對する抵抗力が、極めて弱いに拘らず、古い傳統と社會的な特權とを持つてをり、從つて私有財產廢止のマルキシズムには、先天的反感を持つたものなのだ。是等の人々は先づ誰れよりも先に、ナチスの先行する鉤十字の傘下に聚まつてきた。

第二は農民層である。一般の農民層は、ブリュンニング內閣の大地主擁護政策と、海外食糧品輸入奬勵政策とで、當時非常に苦しい立場にゐた。ブリュンニング內閣は、或る意味に於て、勞働者には味方であつた。然しその農業政策では、大地主に媚を呈する方針だつたのだ。從つて所謂戰後繁榮時代を通じて、ドイツの農民ほど苦しみ惱んだ國民層はないだらう。彼等には勞働階級のやうに、ハッキリした階級意識及び組合組織の持合せがない。そして一般には、保守的なドイツ的傳統の擁護者である。それに對してナチスは、ゲルマニズムによる『血と土』の農本主義により、農民の地位を極端に擁護する立場に出たものだから、彼等の

口からは、一も二もなく『ハイル・ヒットラア！』が叫ばれるやうになつた。

第三には青年層だ。青年は始めから、ナチスの最も熱烈な崇拜者であつた。ナチスの掲ぐる愛國的な綱領は、曾ての輝かしいドイツ帝國の光榮に憧れ、祖國の悲慘なる現狀を痛憤する十七八歳より三十歳迄に至る若人の胸を、如何に鼓舞したか分らない程だ。彼等は自ら進んで突擊隊の最も精鋭なる分子たることを、非常なる名譽と心得、又特に歳の若いものは、『ヒットラア青年團』の中に編入せらるゝことに、無上の歡喜を見出し、常にナチス黨示威運動の先頭に立ち、或は共產黨員と戰つて斃るゝものがあつても、敢て意に介しなかつた。ナチス黨の黨歌（今日では國歌）たる『ホルスト・ヴェッセルの歌』の如きは、斯樣な純眞な殉教青年の遺作の詩なのである。

第四には又資本家のうちでも、特にナチス黨支持者を以て任ずる者が、尠くなかつた。例へばトュイセンの如き、フェーグラアの如き大鐵工業者は、その中に數

へらるべき人々だらう。ナチスは元來階級爭鬪を、反國家的思想の培養地なりと考へ、從つて熱烈なマルクス主義の排擊者であるから、共產黨を忌み嫌ふ資本家が、ナチスを支持するのは、別に不思議はないが、たゞ始めのうちは、ナチス政綱の國有國營的な部分に怖れをなし、敢て之れに近づかなかつたものだ。然るに熟爛せる資本主義が行詰つた結果、自然に企業聯合の傾向を生じて以來、彼等大資本家自身の運命が、結局ナチスの行くべき道と一致せることを覺り始めたものも多くなつて、それ等の人々は躊躇なくこの黨にはひつて、修正資本主義の新しい道（公益優先資本主義）を歩み始めたものだ。

以上の如くナチスの躍進は、種々の經濟的地盤の上に、大戰後の極端な國際的窮地と、ドイツ民族に固有な精神とが結び付いて——一見極めて驚異に値するが、よく調べてみると洵に當然すぎる經過を辿つて——遂に政治の中樞に坐り得ることゝなつた。

一九三三年一月三十日、ナチス黨は遂に待望の政權を掌握し、所謂國民革命（維新）なるものを斷行したのである！

六、全體主義的國家の新構築

尤もヒットラアが政權を掌握して、所謂ナチス內閣を組織した當座は、まだ純然たる言葉の意義に於けるナチス內閣ではなかつた。それはドイツ國民黨、鐵兜團、その他二三の有力者を加へた所謂擧國一致內閣であつた。

宰相はヒットラア、內相はフリック、無任所相はゲーリングと、ナチスの黨員は全內閣中の僅かに三名で、他の八名（副宰相パーペン、外相ノイラート、食糧農業及び經濟相フーゲンベルグ、勞働相ゼルテ、藏相クロジーク、交通相リューベナハ、法相キュルトナア、國防相ブロンベルグ）はナチス以外の畑の人々である。

然も當時のナチスは、國會に於ても第一黨とは言ふものゝ、なほフーゲンベルグの國民黨と聯合してさへ、過半數には遙かに及ばず、彼等の共同の敵たる社會民主黨及び共產黨は國會の內外に、なほ隱然たる勢力を張つてゐた。

そこでナチスの一番大きな仕事は、先づ國內の敵たる共產黨に對し、强力なる彈壓を加へることであつた。だから斯樣な聯合內閣を組織する場合でも、農業及び經濟相又は外相の如き重要な地位は、當分ナチス黨以外の人物にこれを任せて置いて、たゞ國內秩序の維持に、一番重大な役割を演ずる內相と無任所相との地位を、殊更にナチス黨員のものに振宛てたのである。

この有樣を見て、自分達の運命の旦夕に迫つたのを見て取つた共產黨は、ヒットラアに大統領よりの組閣大命が下つた晚に、もう結束してナチス突擊隊と衝突し、流血の慘事を敢てし、且つ時を移さず國內に總罷業の命令を發したのであるが、彼等の力はもう到底全國の勞働階級を動かすに足りなくなつてゐた。

一九三三年二月二日に、ナチス内閣は共産黨本部カール・リーブクネヒト館を占領して、黨の重要書類を全部押收し、以後共産黨は出版集會を禁ぜられ、主要なる共産主義者は續々投獄されることゝなつた。更に二月二十二日には、國會議事堂に火災事件が起つた。その放火犯人として一オランダ共産黨員が犯人として逮捕され、それに依つて共産黨が、暴動一揆を計畫してゐたことが暴露されたので、更に第二回目の共産主義者の大彈壓が起り、共産黨員數千名が珠數繋ぎに逮捕された。

斯樣な矢繼早やなる重壓にもかゝはらず、共産黨の勢力はなほ衰へず、三月五日に行はれた總選擧に於ては、ナチス二八八、社會民主黨一二〇、共産黨八一、中央黨七一、ドイツ國民黨五一といふ成績で、第三黨の地位を退かうとしなかつた。

それ故に政府は尙ほも彼等を追究する手を緩めず、選擧の翌日共産黨の大手入

があり、三月一日には共産黨議員全部の議會入場を禁止し、新たに共産黨彈壓者としてのゲッベルスを國民啓蒙及び宣傳相に任命し、共産黨及びユダヤの手に成る書籍を燒かせるやら、其他あらゆる手段で之れが撲殺を講ぜしめたので、さすがの共産黨も手も足も出なくなり、それ以後は漸次衰滅の一途を辿らざるを得なくなつたのである。

共産黨に對して以上の如き大彈壓の鐵槌を下し、之れを剿滅し得た後のナチスは、直ちに次の理想に向つて、大きな飛躍を試みた。換言すれば全體主義的國家の新構築なのである。

全體主義的國家なる理念は、ドイツ流の形式に直すと、結局一國＝一黨＝一指導者といふことになる。一指導者は既に備はつてゐる。言はずと知れたアドルフ・ヒットラアだ。それで全體主義的國家はヒットラアの名に於て、ナチス一黨のみを認め、他の政黨は全然認めない形にしなければならぬ。換言すれば全體主

義國家（日本流に言へば擧國一致國家）は、國家の上下を擧げての總合融和の性質のものではなくて、ナチス一黨が他の政治的政團を解消し、指導主義の原理に基いて、國民全體をナチス化する性質のものなのである。ナチス黨のみが國民の行くべき目標を指示し、國民一切の行動意思をその方角に向けしめ、若しも之れに向くことを肯(がへん)じない者がある場合、國家の權力を用ひて之れに彈壓を加ふる方法を言ふ。

從つてナチスの指導原理は、一切を集めたものでなくて、一が他を自分のものに變化させて行く過程なのである。靜的な融合を意味せずして動的な戰ひを意味する。

一つが他を自分のものに變化させて行く過程であるから、わが日本の今日の大政翼贊運動とは大體その趣きを異にする。その結果に於てはナチス運動も、大政翼贊運動も、孰れも同じ擧國一致的（全體主義的）なものではあらう。が然しそ

の行き方は、前者にありては上から下への力の感化によつて、下のものを自然に信頼させて行くにあるが、後者に於ては上の力と、下の力とが、始めから一致協同するのを出發點としてゐる。そのどつちの遣り方がいゝか惡いかは別問題とするも、尠くともわが日本では國體の性質が違ふので、ナチス同樣の行き方は眞似すべきでなく、又眞似し得らるべきものでもない。要するにナチスは、ドイツ民族に最も適當した制度なのだ。イタリアのムッソリーニが『ファッシズムは輸出品に非ず』と傲語し、ゲッベルスが『國民社會主義は關稅の障壁を以て擁護すべきドイツ品である』とアレゴリカルな皮肉を飛ばしたのは、その邊の消息を如實に物語るものであつて、わが國としても今發足の緒についた大政翼贊運動を、どうかして本當の日本獨特の——どこの國も眞似の出來ない——光榮ある力として集大成したいものである。

七、國憲の長期睡眠化

さてナチスは前にも言ふ通り、一つの力で他の一切を、自分のものへ變化させて行く方針で進んだのであるから、政敵に對する攻擊の手は、須臾も緩めないのみならず、味方の陣營內に於てさへ、純ナチスでないものには、出來るだけ速かに舊體の解消を迫つていつた。

彼等は議事堂火災の翌二十八日に、『共產黨の危險に對し人民及び國家を保護する爲めの緊急令』を發して、全國を戒嚴令の下におき、それから三月五日の總選擧が、ナチス側の大勝に歸したのをいゝ機會に、その日のうちにベルリンのみならず地方政廳を襲つて、これを黨の手に收め、ナチスでない政權は、どこにも存在し得ないことを、滿天下へ明かにした。

それから三月二十一日には、ベルリン郊外のポッダムで（議事堂が燒けて失くなつてゐた爲め）、新たに議會の開院式を行つたが、その時ヒットラアは起つて最初の大獅子吼を行ひ、次いで二十四日には、議會は三分の二の多數を以て、『國民及び國家の窮狀を打開する法令』を可決した。

この法令はドイツの政治に一大革命を與へたものであつて、俗に『ナチスの全權委任法』と稱せられてゐる。その內容は（一）一九三七年三月三十一日までの四年間國家一切の全權を悉く總統の手に委任する。（二）假令憲法に牴觸する法律と雖も之れを公布する權力を政府に賦與する。（三）是等の法律の制定及び外國との條約の締結に關し國家（一種の衆議院）並に聯邦參議院（一種の貴族院）が持つてゐる權限を解除す……といふ三つだ。

ヒットラアはミュンヘン一揆の失敗によつて、非合法的行爲の無意義なるを、經驗の上で痛感した。非合法で政權獲得に成功しても、軈ては他の非合法を以て復

讐されてゐるにきまつてゐる。それはスラヴ人やラテン人や又南米諸邦の革命騒ぎに繰返さるゝ厭ふべき現象だ。眞のゲルマン的な革命は、不秩序を秩序に直すことである。從つてその方法も亦、秩序に叶ふもの、卽ち合法的なものでなければならぬ。

そこでドイツには、それまでワイマア憲法なる國憲があつた。この國憲が支配する限り、ドイツ國內に本當の秩序が存在しないといふことを認識してをればこそ、ナチスなる政黨が出來たのであるが、然し秩序を尊ぶ政黨としては、その憲法を根本から毀して了ふことは出來ない。たゞ國民一致の意思によつて、その憲法の效力を實現せしめないやうにすることが出來るのみである。

だからナチスは、投票によつて克ち得た自分の政治力と、更に突擊隊其他警察力等の中へ組織された行政手續の力とを以て、憲法の保障によつてナチスに反對し得る諸政黨の力と、膝詰めの談判をやつた譯だ。喧嘩の相手に對し、實力を裏

面に包んで、政權の委任を强要したのだ。若しも相手が之れを聞かない場合は、或は實力を以て之れを打倒したかも知れない。然し初めから實力を、暴力の形で出すのではなく、まづこれを背後に匿し、又其の基礎によつて、相手に——日本流に言へば——『國讓り』を承知させたことになる。そこで相手は之れに反抗するの無意味なるを覺つて、國權の內容を悉くヒットラアに委任した。

この委任といふことが、ゲルマン流の指導者原理には、一番大切な點だと思ふ。ドイツの指導者は、自己の創意で活動する者に對する、人民の委任（精神的に言へば信賴）を、何よりの條件として出來上つてゐる。委任の範圍が尠ければ、之れに對する受任者の責任も少いが、然し全權の委任を受けた場合は、責任も亦無限といふことになる。だからドイツ流の獨裁は、專制君主の獨裁と、本質的に違つたものだ。ドイツ流の獨裁はその獨裁に無限の責任を引受け、從つて人民の信賴なしには成立しないのに反し、專制君主の獨裁は人民が承服しようがしなから

うが、獨裁者は自己の政治意思を徹底的に實現させる、そしてその場合に於ける結果の責任は別に條件とする必要がない、といふ譯である。

さういふ意味に於て、ナチスの採つた獨裁の形式は、英米流の國法學的解釋では、極めて無茶な專擅壓制のやうに考へられてゐるが、今日のドイツ國民自身にとりては合秩序であり合法性であると確信されてゐる。

だからどこの國でも大きな革命が成功した場合には、いつでも憲法は廢棄又は改竄され、政敵は一網打盡に殲滅されるのが普通である。が、ドイツに於けるナチスの革命は、憲法（從つてそれによりて保障されてゐる政敵）に對し議會に於ける普通の投票方法を用ひ、

『君、相濟まんが、こゝ四年間は睡眠劑を呑んで、長い間眠つてゐて貰ひたい！』

といふ提案を出したと同じことだ。すると相手は

『なる程それでは仕方がないから、長期間眠ることにしよう』と、投票で以て之

れに賛成し、みんなアダリンを呑んで眠つたといふことになる。

即ちドイツの憲法は、殺されたのではない。まだ生きてゐるのだ。生きてはゐるが、アダリンを澤山呑んで眠つてゐるのだから、當分目が醒めさうにもない。四ケ年間睡り通して、そして一九三七年の四ケ年後には、また之れを更新したのだから、結果としては、永遠に——藥が利きすぎて冥途まで——眠り續けることとなるだらう！

八、舊政黨解消の意義

ナチスの政府は、合法的に全權委任を受けたのであるから、その次の工作はもう極めて容易しい。

先づ自分の政府部内に於ける非ナチス的要素を掃除し、次に國内にある一切の

政黨政派的團體力を解消し、それで以て全國を、ナチスのイデオロギー一色に塗り潰してしまへばいゝ。

で、政府部內の工作に就いては、一九三三年四月十一日に、從來パーペンが兼任してゐたプロシア首相の地位を、ゲーリングに交替させ、次にドイツ國民黨の御用團體となつてゐた鐵兜團（シュタールヘルム）を、ナチス所屬の團體に編成替へしたものだから、ドイツ國民黨は、實力を失つてしまつた。從つてドイツ國民黨の黨首たりしフーゲンベルグは、閣內に居られなくなつて、農相、經濟相及び食糧相の重要な地位を退いてしまひ、そして國民黨そのものも、レーベントロー伯の一派の如く、ナチスに合流するか、さうでないものは、まるで雪達磨の消えるやうに、いつの間にか溶けて失くなつたのである。

ナチスと大體のイデオロギーを同じくする友黨でさへさうであつたから、今迄ナチスに多少でも敵意を示してゐた政黨の運命は知るべきのみ。そのうち一番意

氣地がなかつたのは、社會民主黨なのであつた。この黨はヒットラアに對して、積極的な反抗をする力がなく、それかとて歴史と傳統との關係から、急にナチスを禮讃するほどの、大飛躍的轉向も出來なかつたものだから、共産黨が彈壓を喰つてる間など、オロ〳〵して、常に傍觀の態度をとつてゐた。然るにヒットラアはそれに對して、少しも情け用捨を加へず、五月十日に、之れに向つて結黨禁止令を下し、その財産を沒收し、その機關紙の發行を一齊に禁止させ、幹部の一同を片つ端から投獄してしまつた。

さう言ふ有樣であつたから、中央黨、國家黨等その他の澤山な政黨政派も、遂に怖れをなし、みんな自發的に解黨を發表し、ナチスが政權をとつて半ケ年のうちに、ドイツ全體は、こゝに始めてナチス一色に變つた。換言すればヒットラアの理想とする一國＝一黨＝一指導者の形式が、玆に完成した譯である！

ドイツに於ける政黨は斯樣にして、孰れも洵にアッケなく消え失せた。その有

樣は今日わが國の、所謂舊政黨解消の姿とよく似てゐる。雙方ともに時代の進展に伴つて、沒落の過程は辿りつゝあつたものだ。然し元來政黨の力といふものは、どこの國でも政治の底力である。それによつてその國に、善い政治が行はれてゐるか居ないかは別問題とするも、尠くとも立憲主義の諸國に於ては、政黨の力は中々一朝一夕で失くなるものでない。例へばフランスなどに於ても、フランス革命當時に一世を支配してゐた自由解放の世界觀が、時代の移推につれて、フランスの諸政黨の中へいろ〳〵の形で流れ込み、時代が右轉を要する時は、その政黨群も之れと一緒に右轉し、左轉する時は右翼の政黨まで一緒に左へ寄るといふ工合に、一定の波をなして繼續してゐたものである。殊にドイツの如き、歷史的な傳統の世界觀を中心とする政黨組織の國に於ては、單なる暴力を以て之れを解散させることは、極めて難かしい。それは十九世紀末のドイツの諸政黨が、政府の如何なる彈壓を喰つても、地下に潜つたり形式を變へたりして、いつまでも

執拗く存續してゐた例によつても明かである。

由來政黨の力は、政治家を作る力なのだ。一國には政治家なるものがゐて、政治を動かすのだ。逆に言ふと眞の政治には、政治家が必要である。その意味に於て政黨は——その質がいゝにしろ惡いにしろ——斯樣な政治家を養成し保存し活躍せしむる施設であつた。だからさういふ政黨が、消極的に地下へ潜つたり、姿を變へてカモフラージするのでなく、自ら積極的に解消するといふことは、今迄の政治家の想像も出來ぬやうな、全然新しい政治態樣が生れ出た證據である。

わが國に於ても、舊政黨は今日みんな自發的に解消してゐる。是等の舊政黨も、今迄の歷史が示す通り、僅かばかりの外部の壓力で、消えてしまふほどの意氣地のない力ではなかつた筈だ。その舊政黨が自ら進んで、自然に雪の消えるやうに溶け去らなければならなかつたのは、一體どんな大きな力が、睨みを利かせて之れを慴伏させた爲めであらうか？

それは右翼の團體が威嚇した爲めか？　舊政黨はそれ位のことで潰れる性質のものではなかつたらう。それでは近衞公が横から睨み付けた爲めか？　さうでもないやうだ。なぜなら近衞公は舊政黨に新體制への協力參加は求めたが、政黨そのものを別に解消しろ、と要求した譯ではなかつた。それだのに既成政黨は自ら覺るものゝ如く、自分勝手に消えて了つた。

わが國に於て政黨を壞滅せしめた力は、國內的のものでなく、寧ろ國外的のものであつた。換言すれば歐洲の情勢が一變し、イギリスに對してドイツが餘りにも勝ち過ぎたので、その餘波が海嘯のやうに、わが極東の島に打寄せ、今迄の政黨政治其他國家の施政態樣の一切を（從つてそれに對する國民の政治的な考へ方を）一遍に變へてしまつたものだから、こゝに既成政黨による政治家を作る施設は、無用の長物となつたのである。それで今度は新しい體制に於て、どんな政治家が必要となつたか？　言ふ迄もなく國民全體が、何等かの意味に於て、政治家

たるの責任を引受けなければならぬことゝなつたのだ。今迄は選擧の制度と、爲政者の任命による官吏とが、大體國の政治に參加してゐた。國民は選擧權さへ行使すれば、あとは政治に參加する必要がなく、蒲團を被つて寢てゐてもよかつたものだ。それが今からは、假令選擧といふ舊來の方法を用ふるにせよ、政治家たるの主體は、これを行使する國民全體といふことになつた。政治の責任者が、國民自體なのである。名付けて『大政翼贊政治』といふ！

ドイツに於ても、大體それと同じ形式の順序を踏んで、舊政黨は既に一九三三年に、自發的に解消したものである。それまでのドイツに於ては、國の政治に携はる政治家が、全然政黨人であつた。それ以外にドイツの政治を執る者はなかつた。從つてそれが消滅して後に、之れに代る政治の擔當者は誰れであつたか？

矢張り之れもドイツ民族全體なのである。たゞドイツに於ては民族全體が、前にも述べたやうに自分達が政治すべき責任の一切を、自分の信賴する者に委任した

形となつた。その基礎に於てドイツには、上より下に向ふ支配力の系統が出來上つてゐる。之れを『指導者の原理』といふ。

九、指導者原理とは何ぞや

『指導者の原理』といふものも、之れ又ゲルマン民族獨特の世界觀なのである。

太古のゲルマン人には、指導者によれる民族の共同體なるものが出來てゐた。この共同體は、各人が隣人愛又は同胞感の基礎に於ては權利義務の上から一切平等のやうに見えるが、その實、祖先(神)の正しい血統を傳へてゐるか否かによつて、外觀(爵位、財產)によらざる差別、則ちそれ自身の存在(身柄の正しきこと、道義性の高きもの)による生れつきの差別があり、そして一旦緩急ある場合、例へば異民族が攻めて來たので之れを共同で防禦しようと言ふやうな場合に

は、必ず皆が兵隊となつて戰ふために、その中から一人の指揮者を選んだものである。選ばれて指揮者となつた者は、自分の創意によつて、自分を選んだ者に對し、嚴しい命令を與へ、之れを手足の如く使ひ、その代りさういふ指揮者は又一切の責任をとつたものだ。

ゲルマン民族の指導者原理といふのは、斯樣な昔ながらの國振りを基礎とした物の考へ方なのである。それ故にゲルマン的指導者原理は、一面極めて民主的と見ることも出來る。然しその民主的といふ意味は、後世の自由主義者やユダヤ人によつて慣用された自由民權的な民主々義とは、凡そ緣のないものである。その次第を、玆に一寸說明して置かう。

後世の民主々義の何たるかを知るためには、ローマ帝國の國家の作られ方を、考への發端としなければなるまい。一體ローマ帝國は、ゲルマン民族共同體の變な形に發達して、化けた姿なのである。ローマもその昔は、ゲルマンと同じやう

に、民族の共同體の制度をとり、民族相互の間には、血統と生れつきによる差別が存在してゐた。その時分の支配者は、必ず身分の正しい高貴な人間（パトリキウス）が選ばれて、他の人民を指導してゐた。

所がローマが後に帝制をとつて豪くなつてくると、地中海を中心にしたその當時の世界帝國の形相をとり、從つてその內部に於ける民族の複雜性と征服による國境の確定とによつて、今迄のやうに小規模な人民から選定された指導者が、全國を支配する譯には行かなくなつた。そこで上に立つ人間は、人民の委任を受けて政治するものでなく、神樣の意思により人民を統治する權利が與へられてあるかのやうに考へらるゝことゝなつた。それと同時に人民（國民）と、さういふ最高權威者との間の、民族同祖的な血の關係は絕えて了ひ、たゞ權威による服從支配の關係が、殘るのみとなつた譯だ。

それと共にこのローマ帝國へは、キリスト敎がはひつて來て、斯樣な形態を國

家觀的に規定づけた。卽ちインペラトールは絕對の權威者であつて、人民との間には無限の差別がある……だが人民そのものは、神の子として、どれもこれも神の前には無差別だ……といふやうな物の考へ方となつた。

だが然し後世になつてさう言ふ國家と敎會との結合したやうな世界觀に對し、之れに服從を拒むやうな大きな敵が現はれた。その一つは敎會に向つて攻擊の矢を放つた宗敎改革（プロテスタント）の力で、他は國家の絕對主義的な支配關係へ突貫し始めた民主々義（人權論）である。尤もこの兩者は楯の半面づゝを表はしてゐるだけで、敢て別のものではない。

それでは話をあとへ戻して、前に述べたローマ帝國主義と、反對の地位に立つて居たゲルマン民族共同體の形式は、一體どこへ消え去つたか？　或は又どう言ふ風に變化して、今日までそれが傳はつたか？

ゲルマンの民族共同體とローマ帝國組織とを比較すると、前者には明かに國家

組成上の長所がある。なぜなら後者は單に絶對主義と權威とを仲介としたもの、從つて國內的には極めて脆弱な組織であるに反し、前者は道義（尊敬、信賴、責任感、光榮）を中心としてゐる關係上、甚だ强固な組織だつたからである。ローマ帝國は機械的なバラ〳〵の寄せ集めだが、ゲルマン民族共同體は有機的に隙のない生物體なのだ。

所がゲルマンの指導者原理による共同體も、その後之れによりて大國家を建設しようと試みた。そして彼等が始めて國家らしい國家を作つたのは、カール大帝からオット大帝の覇業（はげふ）を蹈んで出來上つたドイツ帝國（神聖ローマ帝國）なのである。然しこれは其の名にも示す如く、全然ローマ帝國を小型にしたもの、若（もし）くはそれの單なる模倣であつた。そこには自主を中心とした民族共同體の理念、卽ち指導者原理などは藥にしたくも發見し得られなかつた。ナチスは之れを呼んで『第一國家（エテステス・ライヒ）』といふ！

それに對し、後にプロシア中興の祖フリードリヒ大王の作つた國家があつた。その國家はローマ流（教會流）の絶對主義を形式的には採用してはゐるが、君主と人民との內容的關係に至つては、人民委任によるゲルマニズムを加味したものである。この帝國は『半ゲルマニズムの國家』と言つても宜からう。然しゲルマンの精神から言へば、まだそれは極めて幼稚なもので、將來のドイツ民族の理想の型ではない。そしてこの帝國は歐洲大戰を轉機とし、カイゼル・ウィルヘルムの沒落と共に、根柢から覆滅してしまつた。ナチスは之れを呼んで『第二國家』と言つてゐる！

それでは純粹なるゲルマン式民族共同體の形式で、大きな國家が築造し得られるかといふに、それは極めて難かしい。なぜならそれには長所もあるが、大きな缺點もあるからだ。その長所といふのは、前にも述べた通りである。則ちゲルマンの共同體は、內に向つては道義的自主制を中心にして、水も洩らさぬやうな擧

國一致的築造であり、藝術品にも近い理想的な內部構成を持つてゐた點だ。然らばその缺點と言へば何であるかといふに、他でもない。ゲルマンの民族共同體が外に向ふと、殆ど國境線さへ漠然とした曖昧至極なものだといふ點だ。それでは堂々たる大きな國家は、出來やうがないのである。從つてゲルマン主義に據り然も缺點のない大國家を造り上げるためには、人間の『血』と、之れを國境的に結合する廣域の『土』とが必要になつてくる。卽ちゲルマンの民族共同體型で、本當の大國家を構成しようと思へば、第一に指導者原理の徹底してゐることを必要とすると共に、第二には『血と土』との觀念を基礎にしたものでなければならぬ！

一〇、第三國家への邁進

然らばそんな理想的な國家が、今迄ゲルマン人によりて作られたことがあるか、

といふにそんなものは未だ曾て無い。

だからこれからナチスが、ドイツの理想的大國家を建設するつもりなら、ローマの出來損ひみたいな第一國家を恢復してもだめ、又前の歐洲大戰で崩壞したゲルマン主義の半分しか現はれてない第二國家を建て直してみても、物にならぬ。どうしても一個の新しい第三國家（ドリッチス・ライヒ）を創設しなければならぬ……といふのが今日のナチスの僞らざる國家觀なのだ。

そこでさういふ意味での第三帝國（ドリッチス・ライヒ）には、左の三つの方向が指針されてゐる。

第一は純ゲルマン式な指導者國家だといふことである。指導者國家であるといふからには、對內的には自主を基礎とし、その中から人民より指導を委任された者（信賴を受けた者）が、指導者として、その支配に對する道義的な一切の責任を負ふ。指導されるものは、全體に對する部分としての分を守り、部分としての仕事に從事することが、一切を活かし得る『光榮且つ名譽の義務なり』と考へる

のである。斯様な考へは純ゲルマン式であつて、從つて純ゲルマンによつて樹立さるゝ第三國家は、さういふ建國の理念を持ち得ない異邦人（ユダヤ人）の國內的存在を絕對に許し得ない。そこに第三國家への第一の行動の面は、ユダヤ人排斥だ。ユダヤ人の排斥は、單なる經濟問題でも人種的嫉視でも何でもなく、建國の理念より出發する根本的な問題である、と見なければならぬ。

第二に第三國家は第一國家（ローマ帝國式）なものゝ中から敎會國家的權威を除く運動にならなければならぬ。ローマ帝國は、人民と支配者との間が神によつて規定された權威上の秩序であり、人民相互の間が神の子として平等なりと見てゐたために、そこから絕對主義も生れたらうし、又同時にさういふ差別的平等觀から階級爭鬪も起つた譯である。從つて第三國家は本質的には、非敎會的であり、又他の一面に於ては、階級爭鬪的（物質的）な共產主義、社會主義及び自由主義と、犬猿も啻ならぬ關係に立つ。

第三に第三國家は純ゲルマン式民族共同體をハッキリした國家の形式に直さうと努力するものだ。前にも述べたやうに、昔の民族共同體の缺陷は、外周に向ふ迫力の脆弱性にある。卽ち求心的な力は見事に備つてゐるが、遠心的な力がボヤけてゐたのだ。その意味で本當の國家の體をなさず、國境の如きも極めて曖昧なるを常とした。然るに將來の第三國家は、國內の整然たる秩序を、外に向つて擴充し、ゲルマン民族の生活を豐富にするやうな範圍の圓周を持たうとするのであるから、勢ひ既に確定した國境を更に擴大しようといふ努力となつて現はれる。換言すれば第三國家は古へのローマ帝國が、國內の民族を豐富に鞠養し得たやうな、同じ廣域の經濟を必須とする方向に傾いて行く。

右の如くにして、ナチスが今日努力してゐる所の『民族純血運動』『ユダヤ人排斥運動』『キリスト敎ナチス化運動』更に又『全體主義的諸統制の施設』『廣域經濟區獲得』『歐洲諸秩序の建設』等の諸現象は、決して頭の惡い人間が、想ひ着き

放題の出鱈目にやつてゐる題目ではなく、その國是に則した純理論的な基礎から割出したる結果であるから、その邊の關係は餘程注意して、之れを觀察しなければならぬと思ふ。

斯くして約半歳を經過したナチス黨は、所謂『國民高揚の革命』なるものを完成した。この革命はナチスが第三國家を理想的に實現し得る基礎をなすものである。

この基礎に於てナチスは、まづ一歩退いて內を整へ、國內の充實を待つて、更に國威を海外に宣揚しようとした。一歩退いて內を整へるといふ態度は、一九三四年二月一日に於ける、ヒットラアのラヂオを通じての獅子吼に要約されてゐる。要するにドイツは四ケ年計畫によつて、國の底力を養成しようといふのだ。

一一、藉すに四年の歳月を以てせよ！

ヒットラアは首相就任の直後全國民に對し彼の政綱の大要を發表した。

當時この發表は、ナチスの政綱二十五ケ條に、一大修正を加へたものゝ如く見られてゐたやうだが、實は決してさうでない。所謂二十五ケ條は、ナチスの理想的行動プログラムであるが、二月一日のヒットラアの演說に盛られた內容は、これを實現するための四ケ年間に爲すべき實行プログラムである。

この演說に於て、彼は先づ國民に對し、一九一八年十一月の革命に就いて、その意義を說明し、

『……この革命はわが純眞なドイツ民族が、外國の政治家及び國內の裏切者の雙方から、欺かれて勃發したもので、過去の光榮を忘れ、民族の名譽と自由とを放擲し、從つてドイツは、その持てるもの一切を失ふに至つた「不幸の日」なのである……それ以來今迄、實に十四箇年の間、ドイツは利己的な政治理論、貪婪飽くなき營利慾と利潤の追求、矛盾撞着した社會政策によつて、兄弟互ひに相鬩ぐ

の慘狀を呈した……聯合國はそれを利用して、ドイツの產業を荒廢せしめ、それが爲めわが國にはボリシェヴィズムの脅威が犇々と迫つてきた……』

『玆に於てか世界大戰の際、勇名を轟かしたわが國軍の耆宿ヒンデンブルグ元帥は、我々を召喚して、祖國を救濟すべき任務を授けて下さつたのである……そこで予は國民の指導者として、國民政府に割宛てられた天職を履行する決意をなし、この決意を神と、自分の良心と、國民全體とに對し、誠意を以て誓約するものである……』

と述べた。これによつて見ても分るやうに、ヒットラアの國權收穫の形式は、選擧を基調としたものでもなく、天意（天命）を受けたものでもなく、純ゲルマン流な形式、卽ち人民の意思により、指導者としての支配の委任を受けたことになつてゐる。

そこで彼は更に進んで、斯樣な意味に於ける彼の指導の大業に、國民全體の支

持を要請し、而して彼がこの委任を受けてゐる四箇年間に爲すべき具體的事業を、大體次のやうに說明した——

何よりも先づ國民は『精神的、政治的、文化的な個人主義的虛無化に對抗する爲め、協同と結合との精神を復活するやうな方針で、あらゆる機構の改革を斷行するであらう……國家の基調を離れないやうな、キリスト敎の敎會制を確立するであらう……社會的地位や階級の如何を問はず、國民的結合及び權利を伴はざる義務（光榮）の觀念を涵養するために、家族を重んずる諸般の制度を採用するであらう……

『……同時に政府は、今日荒廢せるドイツの產業、貿易及び商業の改善のため四箇年計畫の樹立に沒頭する。これが解決に、今後着手しようとする最初の方針は、（一）國民に食糧を供給すべきドイツ農民の救濟と、（二）ドイツ勤勞階級の沒落を防止するための失業の救濟とである。卽ち向ふ四箇年以內に、現に泥沼に轉

落せるドイツ農民を完全に救濟せざるべからず！　向ふ四箇年以内に、ドイツ國内を充滿させてゐる失業者の群れを、一人も殘らず清掃せざるべからず！』

と論じ、その爲めにはドイツ聯邦及び地方自治體を抱括（はうくわつ）するドイツ國全體の行政及び財政制度を根本的に改革し、その上に立つて次の諸政策の遂行を約束した――

『勞働義務制度と植民政策の遂行は、この際徹底的に實施されるであらう……生活必需品の保障は、老齡者及び病者に對する社會施設の義務と、併行して行はるべきものである……經濟施設に於ては、職業種類の增加が、農民保護、個人經營上の創意等を利用し、同時にインフレーションを惹起せしむる如き、通貨の膨脹を避くる最善の保障となすであらう』

それから對外政策に就いては、極く簡單に『政府は國民の自由を恢復し、外國に對して生存の權利を主張するのを怠らない積りである……畢竟國家は、平等の

權利の上に立たざるべからず』とのみ述べ、頻りに世界の平和を要望するものなることを强調した。

そして最後に彼は次の言句を以て、その有名な演說の結論としてゐる——

『我等は十四年間に、積り積つた破滅の狀態を、將來僅か四箇年間に一掃せんと決意してゐるのだ。マルキシズムの徒輩は、彼等の爲し能ふ業績を示すのに、十有四年の歲月を要し、然もその結果たるや破局への寸前であつた。今や予は全ドイツ國民に訴へて、藉すに四箇年の歲月を以てせよと要求し、然る後改めて予の仕事の批判を乞はんと欲するものである！』

この演說の中には、ナチス二十五箇條政綱中の『大ドイツ國建設』『ヴェルサイユ條約の破棄』『社會主義的政策の斷行』等の綱目には、殆んど觸れてゐないので、中にはヒットラアの政策が、二十五箇條の鐵則を修正して、餘程穩和なものになつたと論じたものも多かつた。然しそれは全然間違ひである。寧ろ二十五箇

條を完成せんがため、その準備として、先づ四箇年間身を屈めた姿勢をとつたものと、解釋すべきだと思ふ。

國內の體制を整ふるために、外國と事を構ふること、又國民に於て急激に不秩序なる混亂を惹起させないことが、何よりも必要であつたに違ひない。それは寧ろ實際政治家としての、ヒットラアの手腕及び貫祿を物語る以外の何物でもない。

一二、ナチス的選擧＝衆議統裁

斯ういふ鹽梅で、ナチス國家の基礎は大體出來上つた。それからはたゞ、積極的に仕事をする計りである。ヒットラアは、前にもその演說で述べたやうに、藉すに四年の歲月を以てせよ、そしてその成果を國民に判斷して貰はう、と確信を以て述べたのであるが、實際その後の四年間に、ナチスは大變な仕事をした。即

ち農民救濟と言ひ、失業救濟と言ひ、その四箇年の間に驚くべき成功を收めた。

そのことを說明する前に、一應ナチスと國民との間の信賴關係に就いて觀察しておかう。英米側の批評では、ナチスはなるほど思ひ切つた仕事はするだらう……然しそれは專制獨裁による橫紙破りの仕事だ……無理が通つて道理が引込む仕事なのだ……人民はその暴政の下に口を緘し、たゞ唯々諾々として之れに盲從するにすぎない……要するにナチス國家は、民主的な自由な國家から見れば、洵に可哀相な國だ、と見るのが常である。今迄のわが國に於てさへも、大體さういふやうな觀察や判斷が、一般に行はれてゐたやうだ。然しそれは正しいだらうか？

否、それは大變な間違ひである。なぜならドイツ國民は次第にヒットラアを信賴するやうになり、ナチスが政權を執つて四箇年の末頃になると、その信賴は殆んど絕對的のものとなつてゐたからである。ドイツ人は今、上下を擧げて、彼等

のヒットラア總統を、まるで神様の如く愛慕し尊崇し歎仰してゐるのだ！

その有様を計る尺度は、ナチスの投票制度であらう。先づ一九三三年十一月十二日に行はれた國會選擧及び政府信任の投票を見ると、その邊の消息がハッキリ分る。

その時の投票總數は、四千三百九十八萬であつた。そのうちナチス側に贊成したものは三千九百六十三萬人、非ナチス的投票は零（ゼロ）、無效投票は僅かに三百三十五萬人なのだ。從つてナチスは全投票數の實に九二％を占むるといふ大勝ぶりであつた。

勿論その際、國會議員の投票とは言へ、ナチス以外の政黨の立候補は全然許されず、又あらゆる手段によつて、ナチスの一方的宣傳（ナチスは之れを啓蒙運動と稱してゐた）の下に行はれたのであるから、國民全體の意思を正當に反映したものとは言ふことが出來ないかも知れぬ。然しそれでも政權を掌握して、まだ十

月そこその後の有様であるから、その場合國民の九二%の投票を獲得するといふのは、餘程の成績と見なければなるまい。

同時に政府は人民投票によつて、政府を信任するか否かを人民に問うて見た。政府を信任するか否かを問ふ意味は、當時ドイツは外交界に、始めて積極的な一石を投じ、國際聯盟及び軍縮會議より、斷然脱退する所謂爆彈宣言なるものを、發表しようとしてゐたので、之れを國民が支援してくれるか否かを、人民投票によつて訊いて見た譯である。

それに對しての人民投票の結果は、右の國會議員選擧の結果と、大體同樣であつた。卽ち投票總數四千三百四十四萬のうち、信任投票は四千五十九萬、反對投票二百十萬、無效投票八萬といふ壓倒的な成績であつた。

次に一九三四年八月十九日、大統領ヒンデンブルグの歿後、『總統兼首相』の名を以て、ドイツ國の元首となつたヒットラアに對し、大規模な信任投票が行はれ

た。その結果は、投票總數が四千五百四十七萬、信任が三千五百三十六萬、否定が四百二十九萬、無效八十七萬といふ好成績ぶりであつた。

尤もその當時は、否定と無效とを合計すると、五百萬を超え、投票總數の一割が、大體ヒットラア反對の形となつてゐるので、前の人民投票の成績よりは、聊か劣る感じもしないではない。然し丁度その當時は、後に述べる所謂清黨事件なるものが起つてから、僅か一箇月後の場合であり、突擊隊の內部に、やゝ動搖の色を現はしてゐたのである。それにも拘らず九〇%の信任投票を得たことは、ナチスが既に盤石の基礎の上に立つてゐる證據として、寧ろ世人を吃驚させた。

民主々義諸國はこの有樣を見て、一體ナチスの投票制度の如きは、一種の狂言だ……と冷笑するのが常であつた。卽ち背後に銃劍と威嚇とを以て、反對論者の見張りをしてゐる場合、誰れが進んで侃々諤々の反對を敢てするものがあらうか……從つてさう言ふ餘計な投票沙汰などは、してもしなくても同樣である……と

嘲つてゐたものである。

然しよく考へると、投票又は選擧制度は、本來ゲルマン民族固有の傳統的慣習であり、從つて選擧を離れて、ナチス的指導原理は成立しないのだ。後世の民主主義諸國は、この選擧制度を單に我が物顏に惡用し、分黨の多數決制によりて、選擧の本旨を履き違へてゐたものだ。だからさういふ履き違へた十九世紀式選擧精神から言ふと、ナチスの選擧の如きは、或は無意味であるかも知れない。だがナチスに於ける指導者が、人民の支持を得るため、卽ち下意の上達を計るため、選擧と投票とは彼等にとりてどうしても必要なのである。それに依つて人民の意嚮と要求とがハッキリ顯はれるので、指導者はそれによりて、責任ある政治に對する、非常な參考と反省との資材を得ることが出來る。尤もその場合、選擧及び投票そのものは目的でない。從つて多數決制度が、政治活動の積極的動機となるやうなことは有り得ない。

さう言ふ點から考へて、わが國の今度の新體制に於ても、決して選擧制度を廢止しようとしてゐないのも、當然のことゝ頷ける。選擧は依然として必要である。然し選擧によつて僅か一票でも數が多いといふ多數なることが、一切を決定する暴政者となるのではなく、それは單に下意上達の手段であり、從つて之れを最後決定するものは衆議統裁の實力ある指導者自身であるといふやうな思想が、わが國に於ても次第に肯定されるやうになつてきたことは、慥かに選擧制度上の一大進歩と見なければなるまい。

一三、總統への信頼

それから又、英米其他の民主々義國家側が、ドイツの選擧を無意義なりと笑ふのに就いての、大きな矛盾は他でもない。ドイツに於ける投票參加率の極めて高

度なる現象である。

若しも政府案に反對すれば、彈壓なり或は後の祟りが怖ろしいといふ氣持が、一般を支配してゐると假定すれば、投票棄權率が非常に多くなければならぬ筈だ。然るにナチス・ドイツに於ては、投票を棄權する者は、殆んど絶無と言つてもいゝ。大體英米や、もとのフランスの如き民主々義的な國家では、投票に參加する者は平均有權者の七割五分くらゐなものであつて、有權者の八割も投票に參加すれば、非常な好成績といふことになつてゐる。所がナチスになつて以來のドイツでは、人民投票と言へば前の數例でも分るやうに、いつでも九割以上の成績を收めてゐる。

勿論ナチス側は、その場合一方的宣傳（啓蒙）を、極めて大がかりにやる。だが選擧そのものは、ドイツに於ても矢張り祕密投票なのであるから、反對投票が絶對に危險だといふ譯のものでもなく、又選擧そのものに興味がないなら、全然

棄權して、知らぬ顔をしてゐても、別に法律上の罪にはならない。それにも拘らず棄權者もなければ、反對又は無效投票も殆ど言ふに足りないといふ譯で、總てが擧つてナチス肯定、ナチス支持の意思を表はさうと努力してゐる。卽ちナチス國家では、民主々義國家よりも、寧ろ國民の選擧投票による政治參加の行爲が、旺盛で濃厚だといふ結論となる。

その結論を裏付ける證明は、一九三五年一月十二日のザールに行はれた人民投票の結果であらう。ザール地方は、ヴェルサイユ條約によりて、向後十五年間國際聯盟の委任統治領（實はフランス領と同樣）に編入せられ、十五年後には佛領となるかドイツ領となるかを、人民投票によりて決定する規定となつてゐたものである。勿論ザール地方はその住民が僅か五十萬人しかないので、その投票を以てドイツ人一般の意嚮を知ることは出來ない。然しそのザール地方は、フランスの息のかゝつた獨立國であり、ドイツの彈壓の力の及ばない所であつた。それに

反ナチス運動のため、ドイツ本國を追放されて遁げて來てゐる社會民主黨の有力者も、隨分澤山移り住んでゐた。

從つてナチスの政權が、英米佛側の言ふ如く、本當に在來のドイツ人に嫌惡され、たゞドイツ國內では自由意思が束縛されてゐるので、已むを得ず追從してゐる狀態であるとするなら、ザール地方の如きナチス警察力の及ばない外國にゐるドイツ人は、必ず母國たるヒットラア政權のドイツを、離れ度い意思を表はさなければならなかつた筈である。

然るに、その投票の結果は意外であつた。有權者總數五十三萬九千五百四十一人中、投票者數五十二萬八千五人、內現狀維持を欲する者四萬六千五百十三人、フランス歸屬を望む者僅かに二千百十二人、ドイツ歸屬を望む者實に四十七萬七千百十九人、無效二千二百四十九人といふ割合であつた。

卽ち投票者は九割七分以上で、棄權者の如きは言ふに足らず、然も投票者中ナ

チス側は實に九割の超絶對數を占め得た譯だ。

斯樣なナチスが、國民（及び國外居住ドイツ人）から、絶對の信賴を受けるやうになる傾向は、歳と共に上昇した。從つてヒットラアが、業績を擧げるのを見てゐて吳れと公約した四年間も終りを告げようとする頃の投票狀態は、實際驚異的であつたと言へる。一九三六年三月二十九日、ヒットラアは最後の意を決して、ロカルノ條約の破棄及びラインランド進駐の爆裂的宣言を中外に發表し、さてその勢で國會の總選擧をやつて見たが、その時には有權者總數四千五百四十萬人中、投票總數四千四百九十三萬人、內政府派は四千四百三十九萬人、反對派（無效）は五十四萬人であつた。卽ちナチスの得票は實に全投票の九九％を占めた譯である。

斯樣な結果をジッと見詰めてゐると、私達にとりても、非常に大きな敎訓を受けざるを得ない。その當時の民主々義的諸外國に於ては、ナチスの評判が益々惡

くなる一方であつた。單に嘲笑と嫉視の意味で惡い評判を立てるといふだけならまだいゝが、彼等はドイツの勃興しつゝある底力を理論的に、又學問的に、正しく測定することが出來なかつた。彼等の判斷によると、ドイツといふ專制國は、單に表面だけ體裁の整つた宣傳一方の國であつて、その裏面はまるで缺點だらけであるから、本當に擧國的な戰爭をする元氣などある筈はない……假令その專制者に欺かれて戰爭を起すやうなことがあつても、實はその國に底力がないのだから、決して長續きはしないだらう……長期戰となるとそれは英米佛側の專賣特許に違ひない……などゝ輕率な考へを起すやうになつたのは、民主々義國家群の大變な失敗であつたと言へる。

ドイツはそれ等の諸外國に嫌はれゝば嫌はれるだけ、內に向つては國內の充實と、政府が國民より受ける信賴とを、日に次ぎ月に增して强化しつゝあつたのである。

一四、血腥い清黨事件

だが斯樣なナチス權力の絶大な强化確立は、決してさう簡單に成就したものではない。

ヒットラアは政權獲得後、これから四箇年間に、諸君の期待を裏切らないやうな、立派な仕事の成績を擧げて見せると傲語して、然も實際その公約に嘘がなかつた。全くそれは神業の如く見える。然しヒットラア自身、決して神樣ではない。匹夫から身を起して十五年の間、幾度か生死の巷を潜り、血の出るやうな奮鬪と努力の結果、その政權を克ち得たと同樣に、國權の把握者としての最初の四箇年間も亦、荊棘多き苦難の途を惱み進んだものである。喰ふか喰はれるか、或は相手を斃すか相手に斃されるか、といふやうな危い瀨戸際を幾度となく潜つて、自

分の理想とする道筋を喘ぎ歩んだといふことも出來る。

何しろ一九三三年に、光榮ある國民革命が完成されたとは言ふものゝ、矢張りその當時は、國內の敵が隨所に發見された。從つて共產黨なり社會民主黨なり、或は反ナチスの自由主義者ユダヤ人の徒は、表面では當分口を噤んで薄氣味の惡い沈默を續けてゐるものゝ、何かヒットラアに失敗があれば、又それをきつかけに表面に出ようと、虎視眈々たる有樣である。

そこでナチス政府は、是等の人々を追放又は拘禁するのに、殆ど寧日がなかつた。然し是等の人々に對し、別に罪狀の證據もないのに、法律上の手を下しやうがない。本來ナチス國家は、非個人主義的且つ國家本位的に組立てられてゐるものであつて、從來の自由主義的法律の特色であつた個人の基本權の概念は、全く排除され、個人は國家に對して義務のみを持ち、國家に對する有要性に應じてのみ價値を持つ、と觀てゐる。從つて國家の保安に任ずる祕密警察は、絕對の權威

を持ち、普通の法律や裁判上の拘束を受けない。

そこで普通の刑法の適用なく、裁判に附する罪狀なき人間でも、祕密警察(ゲシユターポ)の眼から見ると、用捨しておけない國家の敵が、國民の中に不平分子として、鳴りを靜めてゐる譯である。所が祕密警察(ゲシユターポ)が、それ等の人々を捕へて來ても、之れを拘禁することも出來なければ、裁判によりて刑罰を加ふることも出來ないやうな始末では困るからといふので、新たに集中收容所(コンツエントラチオンスラーガア)なるものを各所に設けて、怪しい人間や既に反ナチス的に金箔の附いた者を、ドシ〳〵そこに逮捕監禁することゝした。集中收容所(コンツエントラチオンスラーガア)は要するに、普通の刑法で取扱ひ得ない政治犯罪人の、隔離と悔悛とを目的とする一種の懲治監なのである。

集中收容所(コンツエントラチオンスラーガア)は、そのうち是等の政治犯罪者を以て、充ち溢(あふ)れてきた。それはフランス大革命時代の革命裁判所のやうに、一種の恐怖政治的な威嚇を與ふるものであるから、脛に疵持つ人々は、次第に安き心とてはなく、それを中心に國

境附近には、流言蜚語が頻りに行はれ、その當時ヒットラア暗殺未遂說の如きは、何回となく流布されたものである。同時にそれを契機として、ソ聯やイギリス又はフランスの軍部、警察及び外務省等は、ドイツ國內不平の徒を買收し、反ヒットラア的一揆の計畫を企てゝゐるといふやうな噂も、隨所に傳へられてゐた。今日の狀態から判斷すると、是等の噂も、全然根の無い所に立つたものとは、考へられない節もある。

さういふ蒼白く薄氣味の惡い雰圍氣の中から、パッと表面化して世人の耳目を聳動させたのは、ナチス黨內に於ける反ヒットラア陰謀の發覺から、電光石火の如く行はれた一九三四年六月の、所謂『淸黨事件』なるものである。その次第は斯うだ。

六月三十日の朝まだき、ナチス親衞隊及び警官隊の一部は、疾風迅雷の如くベルリン、ミュンヘン及び各地の突擊隊本部を襲擊し、多數の突擊隊幹部の人々を

捕縛した。その中にはミュンヘンに於ける突擊隊の總司令で、ナチス黨內では飛ぶ鳥をさへ落すと考へられてゐたレーム大尉の如き、或はベルリンに於ける突擊隊の探題エルンストの如き人々の名前さへ發表された。それと同時に黨內の反ヒットラア派と目されてゐたグレゴール・シュトラッサアや、政界の大立物たりしシュライヘル將軍等が、親衞隊員の手で射殺された。(シュライヘル將軍はベルリン西郊の別莊に於て夫人と共に暗殺されたといふ。)其日突擊隊長の中で、反抗を敢てした爲めに、其場で殺されたもの七名、更に翌七月一日、黨の卽決裁判で死刑に處せられた者十名、といふことになつてゐる。(最後の十名の中には突擊隊總司令レームの名前も載つてゐたが、一說にはレームはその前日、既にミュンヘンの突擊隊本部に於て、突然その場所へ現はれたヒットラア總統自身の拳銃によつて、血煙りをあげて打斃されたものであるともいふ。)

この淸黨工作は、思つたよりも犧牲者の類も尠く、それ以上擴大しないで無事

に濟みはした。何しろヒットラア、ゲーリング、ヒンムラア等が機先を制して一切を敏活にやつたものだから、其他突擊隊(エスエー)本部員が一時全部收監されたのと、ベルリン市内には戒嚴令が布かれて、物々しい光景を示したのは事實だが、事件は幸にも、それ以上擴大しないで落着し、國民の動搖も、割合少なかつたのである。大騷ぎをしたのは、寧ろナチス嫌ひの外國の輿論であつた！

一五、雨降つて地固まる……

一體このレーム大尉を中心とした、淸黨事件なるものゝ原因は何であつたか？それは今日でも、まだよくハッキリしてゐないのである。

當時の當局の發表では、レーム以下の突擊隊(エスエー)の幹部が、某外國と款(くわん)を通じて、ヒットラアを亡きものとせんと謀つてゐたとある。某外國とは、臆測ではソ聯だ

らう、と言ふものもあつた。否フランスだらう、と推定する者もあつた。中にはイギリスを持ち出すものもないではなかつた。そしてその賣國行爲をなしたものは、レーム以下の突擊隊幹部となつてはゐたが、例へば實際フランスと近い關係を持つてゐたのはシュライヘル將軍であるから、外國との通謀者があつたとすれば、それは突擊隊（エス・エー）の人々であるよりも、寧ろ其の傍杖的（そばづゑてき）に殺されたシュライヘル將軍か、或はグレゴール・シュトラッサアあたりに違ひないとの說が、最も有力だつたのである。

次に又この淸黨事件に直接の原因をなしたものは、突擊隊（エス・エー）と鐵兜團（シュタールヘルム）との衝突だと見る者もある。鐵兜團（シュタールヘルム）は、その前年に解黨したドイツ國民黨の機關團體たるの資格を失つて、形式上はナチスに直屬してゐたが、その隊員の數も五萬を超えた組織體であるから、爾來（じらい）突擊隊とは、依然として仲がよくなかつた。そこで突擊隊總司令レームは、我慢が出來なくなつて、斷然ヒットラアに鐵兜團の解散

を要求したが、容れられなかつた。だからレームはヒットラアの意に反し、獨斷で鐵兜團を襲擊しようと計畫した。それを察知したゲーリングは憤然として、そんな態度では黨首ヒットラアの威令は地に墜ちるだらう……そんな黨の統率を紊る如き人物は、假令黨のために功績のあつた古い同志と雖も、そのまゝに放置しておく譯には往かぬといふので、遂に右のやうな血腥い私刑の處置となつたといふ。

又曰く、突擊隊は國防軍へ編入せらるゝことを要求したが、國防軍側で之れを拒否してきたので、レームは大に憤慨して、陰謀を計畫することゝなつた、と主張するものもある。ドイツ國防軍は、本來プロシア國軍の延長であり、特別な傳統精神に生きたものであつて、如何に訓練がよく出來てゐたにしても、突擊隊の如き政治團體と一緒になるやうでは、國軍としての價値の低下を來すので、之れを拒否したのは或は當然であつたかも知れない。然し當時の突擊隊の中には、單

に示威運動の行進だけやる政治團體たるの域を脱し、正規の軍隊としても恥しからぬ訓練を受けてゐた部分もないではなかつた。マルク・ブランデンブルグの支部の如きは、ヒットラアが武器の携帶を許してくれないのに不滿を抱き、その支部隊長の如きは一切の私財を投じてスエーデンより機關銃、戰車、野戰砲の如き武器さへ祕密に購入し、隊員は政治集會を廢して、たゞ朝から晩まで軍事教練ばかりやつてゐたといふ。それが當の國軍側から編入を斷つて來たものだから、彼等はナチス幹部殊にヒットラアの腰の弱いのを不滿に思つて、之れに反抗する意思を持つに至つたと傳へられてゐる。

更に又一說によると、レーム以下の突擊隊は、ナチスが元來ミュンヘンに於て結束した當時の思想、卽ち急進社會主義的な思想から離れることが出來ないで、依然としてフェーダアの綱領二十五箇條の文字通りな卽時實行を要求してゐたものだが、それに對してヒットラアを繞る一派が、例へば大百貨店の公有化、大ト

ラストの國營等に對し、漸進主義を採用するのを見て腑甲斐ないことゝ感じ、その不平が次第に嵩じて來たものだとも言ふ。

さういふやうにこの事件の眞相は洵に曖昧であるが、それは單純な眞相の問題ではなく、以上の諸原因や動機が、複雜に絡んだ結果であつたに違ひない。

前にも言ふ通り祕密警察の方法、從つて集中收容所の制度の如きも、普通の法律で處分し得ない人間を、純政治上の國家的秩序の立場から、取締る建前になつてゐる。それと同じやうに、レーム一派を剿滅した經緯も、たゞレーム一派に斯く〳〵の惡い行爲があつたからと言ふのではなく、種々の微妙な關係で、其のまゝに放つて置いては、ナチスの黨自體が、崩壞するか否かの重大な危機に立つたものだから、ヒットラアとしても生死を賭して、之れに斷乎たる掃蕩の手段に出たものゝ如くである。

然しこれくらゐ思ひ切つたことを、斷行するだけの勇氣があつたればこそ、雨

降つて地固まるの譬への如く、之れによつて黨内の異分子は姿を消し、併せてシュテイヘル將軍のやうな、ヒットラアに對する一敵國の觀ありし危險分子も、全然失くなつてしまつたのだ。それと同時に、フーゲンベルグ一派の帝政復活派も、ナチス陣營から退去せざるを得ざることゝなり、副首相のパーペンの如きも、その地位を退いて、オーストリアの公使に左遷されることゝなつた。帝政復活派が退陣した結果、オランダに蟄居してゐたカイゼルの歸國も、亦望みがなくなつたのだ。もしもカイゼルが復辟するやうなことがあれば、ホーエンツォレルン王家の再興、即ちプロシアを中心とする小ドイツ主義帝國（第二國家）の再建といふことになつたであらうが、その望みがなくなつたと言ふことは、言ひ換へると、ナチス・ドイツが小ドイツ帝國主義の復古的態度を捨て、寧ろヒットラアの理想とする大ドイツ主義（第三國家）の廣域標準へ、躍進し得ることゝなつた譯である。

一六、ドイツの底力は地方にあり

今私は小ドイツ主義と大ドイツ主義といふ對蹠的な、二つの言葉を擧げた。ヒットラアの目標として、その實現に邁進してゐるのは、大ドイツ主義であつて、それはプロシアとかオーストリア等の特殊の一國を覇者とする聯邦組織を採用せず、苟もドイツ民族の居住する區域なら、總て之れを打つて一丸とし、ドイツ民族全體の『生きる爭鬪』のために、之れを中心として周圍へ經濟的な從屬の輪を着けようとする考へなのである。今日ドイツが主張する歐洲新體制なるものは、結局この大ドイツ主義の完成された姿を言ふ。

然るにカイゼル時代のドイツ帝國は、所謂小ドイツ主義であつた。在來のドイツ聯邦帝國は、五十有餘の小さな獨立國に分立して居り、外交軍事其他の共通し

た重要事項に對しては、その中の代表となるべき、プロシアとか、オーストリア等の、比較的な大國が、假りにそのドイツ帝國全體を支配する形式の印綬を帶びて、覇業的な受任政治をやつてゐたのである。そしてカイゼルのドイツ帝國は、プロシアがその任に當り、覇權に對する競爭相手たるオーストリアは、プロシア中心のドイツ聯邦から閉め出しを喰はしてあつたものだ。

然るにヒットラアの時代となつて、さう言ふ意味の聯邦的な小ドイツ主義は、將來の偉大なるドイツを創設し得る國家觀でないことが、分つてきたのである。そこでゲルマン特有の昔に歸つて、再び大ドイツ主義を採用することゝなつたが、それはたゞ口先きの上での、則ち精神的な意義に於ける『大ドイツ國』であつてはならぬ……在來の小國が分裂對立したやうな狀態を聯邦的に纏めるのではなくて、全然中央集權的な一單位に直さなければならぬ、との議論が非常に強く起つて來たのである。

そこでナチスは、着々として國家組織の改革を斷行し、ドイツ多年の癌であつた聯邦制度を、忽ちの間に廢止してしまつた。元來この聯邦制度は、實に歴史的な遺物であつて、強力な現代國家を創設するには、極めて不合理なることは誰れも知つてゐたが、それかと言つてカイゼルのドイツ帝國も、その不合理を修正することが出來ず、大戰後のドイツ共和國と雖も、地方の分立を統合するだけの力がなかつた。

然るにヒットラアは、宰相就任以來屢々法令を出して、聯邦諸國の政府及び議會を解消し、今までの各國は單なる行政及び經濟の地方又は地區として、中央政府の任命する官吏によつて治めさせることゝした。即ち一九三四年の國會再建令によつて、聯邦制度は正式に姿を消し、全體を大ドイツ國として、單一統合の一元的なものに變つてしまつた。換言すればフランスやイギリスが、既に十六世紀頃に完成したこと、又わが日本の如きその點ではずつと後れてはゐるが、それで

も、明治維新の廢藩置縣によつて、今から八十年ほど前に成就したことを、ナチス・ドイツはやつと二十世紀の最近になつて、之れをやり遂げたことゝなる。

然しナチス・ドイツがさう言ふ意味の中央集權制を、漸く最近に於て始めて完成したといふことは、今日のドイツのために決して不利な狀態ではないのである。何故ならドイツが最近まで、地方分權的な一種の封建國であつたといふ事實ば、今日のドイツの底力を現はすものなのだ。

その意味は他でもない。ドイツは最近まで國內に小獨立國が存在してゐたおかげで、地方々々にはそれぞれの經濟的な獨立性と、特色ある文化の發達とを持つてゐる。それが互ひに蝸牛殼上の角の突き合せでは勿論弊害もあつたらう。然し地方經濟と文化との獨自の發達をそのまゝに生かして、之れを統合した結果は、現在ではそれが大ドイツ國組成分子の底力となつて殘つてゐる譯である。

だから今日のドイツは、例へばフランスみたいに、餘りにも中央集權を大昔か

らやり過ぎて、遂に首府のパリ一つ叩かれると、すぐ參つてしまふやうな國家ではない。又同じくイギリスのやうに、ロンドン一つ潰されて了ふと、イギリスの國力の六割が沒落するやうな片輪の國でもない。殘念ながらわが日本の如きも、明治時代からの惡中央集權が祟り過ぎて、國の力が東海道線から山陽線、北九州の一筋に片よりすぎ、その筋を離れた地方へ行くと、まるで特有の政治がないのみか、經濟も文化も著しく劣つてゐる現狀の如きは、尠くとも再檢討を要する眞面目な問題だと考へる。

それに較べると今日のドイツは、國の力が中央に偏在せずして、東プロシアとか、シレジアとか、北海海岸とか、ラインランドの邊境とかいふやうに、國境の隅々に、よく分布されてゐる。ドイツの政治や經濟や文化は、海岸や山間や國境附近の隅々にあるのだ。それが今日のドイツの底力なのである。

從つてナチス・ドイツの爲政者も、その邊の消息をよく知つてゐるものだか

ら、假令右に述べた國家再建令によつて、他の西歐諸國なみに中央集權制の形式は整へたものゝ、國力が首府のベルリン附近にのみ集中しないやうに、大きな政治的集會は大體ミュンヘン、ニュルンベルグ、ゴーデスベルグ、ケルン等の地方都市で開催するのを常とし、又ヒットラアの外交上の折衝などは、バヴリアの田舍にあるベアヒテスガーデンの山莊に於て之れを行ふ場合が多い。其他地方小都市にある大學や、歌劇々場等には、特に中央より一流の學者や音樂家を定住せしむることを忘れず、同時に地方々々の方言や、傳統や、民謠や、服裝や、其他風土誌の出版なども、極力之れを保護又は保存せしむるやうに、鋭意これ努めてゐる。

一七、全國食糧團

以上述べた所で、大體ナチスが第三國家（ドリッテスライヒ）へ躍進し得るための、基礎工作に就い

ての內容が分つた譯だから、これから一歩進んで、國內の經濟問題に對し、ナチス政權がどんな仕事をしたかを一瞥しよう。

普通今迄の政治家的な觀方には、『政治と經濟とは車の兩輪の如く……』といふやうな表現の仕方が行はれてゐる。然しそんな物の考へ方では、ナチスの經濟政策の全貌を摑むことが不可能である。經濟と政治とは、車の兩輪の如く對立したものではなくて、經濟と文化とは、政治によりて如何やうとも支配され得るものであり、その又政治は、國家至上主義（全體主義）の倫理によつて、動機づけられてゐるものだ。從つて倫理が一切の根元であり、それが支配の形式に現はれた面を政治と稱し、その政治の內容をなす組成分子が、外交であり、內治であり、經濟であり、又文化であるといふのが、ナチス的な物の考へ方なのである。

その意味に於てナチス國家は、ソ聯の行き方と、大變な相違點を持つてゐる。ソ聯に於ては、國家そのものが、一個の有機的な經濟の主體なのだ。だから個人

企業を全廢し、飽く迄も生產配給等を國家自身の手でやらうとする。從つてソ聯に在りて、私有財產的な資本主義制は、原則としては許さるべきでない。

然るにナチス・ドイツに於ては、公益優先といふ國家倫理の根本が確立する以上、企業の形式が私有財產制であらうが個人企業であらうが、そんな形式はどうでもいい。各人は在來の形式を維持しながら、國家によりて示された公益優先の指導目標に向ひ、各人の出來る丈けな創意を働かして、これに參加する姿勢をとるのである。だからソ聯は、國家が國民の物を支配する『物質國家』であり、ナチス・ドイツは、國家が國民の魂を支配する『倫理國家』なりと言ふことが出來よう。

さういふ觀點から、先づナチス・ドイツの農業政策を檢討してみよう。農業政策を何より先に論ずる所以は、ナチスが政權をとつて、まづ先鞭をつけたのが農業政策だつたからである。前にも述べたやうに二月一日に發表されたヒットラア

の四箇年計畫の演說の中でも、その經濟的な計畫は失業者救濟と農業政策との二つであつた。然るに失業者救濟はそれ自身に目的を持つた經濟政策の一つではなく、失業者を無くする手段によつて商工業及び貿易を繁榮ならしめんとする條件たるに過ぎなかつた。然るにナチスの農業政策はそれ自身に目的を以つたナチス獨特の經濟政策なのだからである。

ナチスの農業政策は、(1)食糧の自給自足(アウタルキー)、(2)『血と土』(ブルート・ウンド・ボーデン)の倫理思想に基く農民層の創設、を實現しようといふのである。これがためにナチス政府は、三つの有名な法律を發布した。

(1) 一九三三年九月の世襲農圃法(エアブホーフスレヒト)

(2) 一九三三年十二月の『全國食糧團(ライヒス・ネーアシュタンド)』制

(3) 一九三三年七月及び九月の都市住民の農村移住を奬勵する法

右のうち(2)と(3)とを先づ說明しておいて、(1)を一番あとに觀察することゝする。

全國食糧團（ライヒスネーアシュタンド）といふのは、日本で言ふなら産業報國會を農業に利用したやうな組織である。然しそれに就いて、觀念上少し異つてゐる點は、ナチス・ドイツでは今日農業といふものを、全然經濟現象として取扱はない點だ。行政的に言ふと經濟現象のうち、商工業だの運輸業だの手工業だの銀行保險業などといふものは、立派な經濟現象となつて現はれるものだから經濟省に於て執行される。

然るに食糧を生産し配給し消費する現象は、經濟の範疇（はんちう）には入らないで、倫理の範疇に入るものである。だから食糧問題は教育問題と同じく經濟省では管轄されないで、寧ろ文部省みたいなもので統括（とうくわつ）される建前だ。それを自主的に統制するためにこの全國食糧團（ライヒスネーアシュタンド）といふものが組織された。

全國食糧團は、ドイツが食糧を自給自足し得るための、あらゆる方法を講ずる組織であつて、同時に農産物の價格統制のためにも利用されてゐる。之れを組成してゐる分子は、直接間接に農業に從事する國民であつて、その全體の指導者に

はワルタア・ダレエが就任してゐる。換言すればこの團體は、農業の身分(職能)を、全體的に統合したものだ。

この組織の機能は生産、配給、販賣の統制にあるので同一食糧品の生産者、加工者、販賣者、消費者等相互間、及び異種類の食糧品相互間の有機的聯絡が留意されてゐる。同時に又この組織によつて農産物市場は完全に統制され、その價格は時々の必要に應じて決定されるのである。この統制を破る者があつた場合には『國民食糧に對する叛逆罪』として死刑若くは終身徒刑の嚴罰に處せられる。

ナチス政府が今回の歐洲大戰の始まる既に七年も前から、この食糧團制を設けてゐたことは、極めて先見の明があつたと言はねばならぬ。これによつて七箇年間ドイツは、國民食糧方面の底力を培養し、今回の戰爭となつても、殆ど少しも慌てないのだ。前の大戰に於ては、ドイツ帝國はあれ程勇敢に戰つたに拘らず、兼々から食糧備蓄(自給經濟)をやつてをらず、又戰爭となつて急に俄造りの統

制を行つた爲めに、五年間戰つたうちの第一ヶ年目の末には、もう饑饉狀態を現出してゐた。その苦い經驗には、餘程懲々したものと見えて、今度はナチスが政權をとるや否や、もう其年から食糧經濟の『戰時體制』を採用したのである。然るに今回の大戰が始まる當時、英佛側は依然としてドイツの食糧持久力を、單なる毎年の收穫と海外よりの輸入數量とで計算し、ドイツは英國の海上封鎖さへ受けると、半歲も經たぬうちに參つて了ふだらう……などと推斷してゐたのは、大變な誤算であつた。

斯くして今日のドイツ國民は、食糧團の一絲亂れざる統制の下にあつて、少しも不平を言ふものがない。不平を言はうにも、食糧團は天降り的官僚の統制手段ではなく、農業關係者が自らの身分を、協力によつて構成する彼等自身の自主體なのだからである。斯う言ふ組織の無かつた以前に——例へば前歐洲大戰の一箇年後の狀態、或はソ聯の新經濟政策時代などに——單に上からの統制を實行して

ゐた場合には、農民は隨分陰に匿れて盛んに『闇取引』を行つたものだ。『闇取引』は、敢て現下の日本のみに發生した現象ではない。それは嘗てのソ聯にも、又ヒットラア政權以前のドイツにも盛んに行はれたものだ。たゞソ聯では之れを『闇』と言はないで『黑い市場』と呼び、ドイツでは又『土龍商賣』と名付けて、日本のとは鳥渡言葉が違ふが、結局は同じ暗い商ひをやつてゐた譯である。

然るにドイツに食糧團が結成せられ、農業關係者自身が總て自主的に責任を以て、自分で統制をやり始めて以來、闇の取引をしようにも相手がなくなつた。若しもそんなことをすれば、お互ひ同志の間の裏切り行爲なのである。從つて死刑以下の嚴罰が待つてゐることを承知の上でなければならぬ。

一八、大都市人口膨脹の制限

次に一九三三年七月及び九月に發布された都市住民の農業移住奬勵法も亦、劃期的なものである。

これは後に述べる世襲農圃制と共に、國内へ健全な農民を創設することゝ、他面に又都市に溢れた失業者の減少を目的としたものであつた。

その方法としては、東プロシアの人口の餘り稠密でない地方に、都會から多數の移住民を送つて農業に從事せしめ、更に大都會の周圍に、多くの小農業區を設けて、勞働者乃至季節勞働者を住はせ、彼等の需要する馬鈴薯、野菜、果樹等を耕作培養せしむることゝした。同時に又都會に於ける男女青年勤勞奉仕團は、必ず一度農村に赴いて六箇月間『農村助手』として農家に居住し、農業生活を體驗

する制度の如きも、この法律の發布と同時に實行され始めたものである。

要するにナチスの農民政策は、全國の津々浦々に萬遍なく健全な農民を作るといふことであるが、それを反對に觀察するなら、農民人口の都會集中を極端に嫌惡する方針だといふことになる。

都會集中の傾向は、二十世紀の始めに於ける、ドイツ國勢上の癌であつた。二十世紀に入つて、ドイツの都會人口の膨脹は、餘りにも極端であつた。殊に前の大戰直後に於けるドイツは、農民生活の犧牲に於て、不釣合な大都會が水ぶくれの如く大きくなり、ドイツ產業と言へば、ドイツ都會の商工業、ドイツ文化と言へば、大都市の不健全なる輕佻浮薄な生活態樣のみを指すことゝなつてゐたのである。

この點に留意したナチスの爲政者は、國家の底力を培養するために、農民人口の增殖に努力し、反對に大都會の人口を極端に制限することゝした。從つて今日

では、例へばベルリンの人口の如きも四百萬人に達して以來、それ以上極力膨脹させないやうに之れを制限し、生業なきものゝ都會居住を許さず、地方青年男女にして上京するものには、一定の居住期限を附して之れを許可する等の制度を採用してゐる。從つて將來と雖もナチス・ドイツ國には、ロンドンだのニューヨークだの、上海だの、東京だのといふ人間の塊りだけを掃き集めたやうな馬鹿げた都市は發達しないであらう。

大都市の極端に膨脹するのは、その國に國家的統制の行き亙つてゐない、從つて自由主義が依然として横行濶歩してゐる證據なのである。統制には物の統制と人間の統制とが竝用されてゐなければならぬ。いくら馬鈴薯や石炭の如き物の數量や價格や移動が統制されても、肝腎の人間が私心によつて勝手に移動し得る狀態になつてゐる限り、完全な統制は望み得べくもない。

その意味でナチスの統制は、物の統制よりも人間の統制の方を主としてゐると

いふ點で、現下のわが國にとりても、慥かに他山の石以上の示唆を與ふるものであらうと思ふ。

なぜなら配給機構の問題一つをとつて考へて見ても、わが國では米や木炭の配給機構は將來とも或は整備されて行く望みは多いが、然し人間の配給機構、人物の配給機構に至つては、今の所まだ何一つこれを圓滑(ゑんくわつ)にする方法がついてゐないからである！

一九、血と土と……

人物の配給機構で想ひ出されるのは、前に述べた食糧團の指導者たるワルタア・ダレエの如きが、ヒットラアに見出されて一躍重要な地位に拔擢されたことなどであらう。

ダレエはアルゼンチンで羊飼ひをしてゐた青年である。前の歐洲大戰の際祖國の難を救ふがため西部戰線に從軍し、名譽の負傷を受けた。その後ナチスの黨員となつて、ナチスが政權をとる三年前に『ドイツ農民の源泉としての北方人種』及び『血と土による新貴族』なる二冊の書物を書き上げた。ヒットラアはこの兩書の中に、ナチス農民政策の指導原理たるべきものが輝いてゐるのを發見し、この青年を拔擢して、農相の椅子を與へた。當時農相にダレエなる人間の名前が發表せられた時、ドイツ國民はこの人間が、どこに生れ又どんな經歷の持主であるか、誰れ一人知つた者がなかつたといふ。

そのワルタア・ダレエが、ヒットラア總統の囑望を受けて一躍大臣となり、その著書『血と土』の思想體系を、そのまゝに法律化したものが、所謂『世襲農圃法』なるものである。

世襲農圃法は公民權を有する一切のドイツ農民に、一家族を養ふに足りる土地、

即ち今日日本でも喧しく言はれてゐる『適正農地』（約百二十五ヘクタール）を世襲農圃として保證し、その賣買抵當を禁じ、從つて彼等が債務のために土地を追はるゝ事を防いだものである。

而して一個以上の世襲農圃を所有することは禁止され、且つこれは嚴格な長子相續によつて、世々代々繼承せられることゝなる。その點は全然わが日本の長子相續制に髣髴たるものがある。ダレエ自身も『長子相續制は古ゲルマンの遺習であるが、自分は更にそれに日本の家族制度を加味して之れを作り上げた』と公言してゐる。だから世襲農圃を子孫に讓る場合は、西歐諸國の普通の慣習となつてゐるやうに、それを數子の間に分割することを許されないのである。又この世襲農圃に關する權利は、國法によりて保護され、之れに關する爭議は、そのために特に設けられた世襲農圃裁判所に於て裁かれることになつてゐる。

この法律が出來てから、ドイツには約百萬ヘクタールの土地が、世襲農圃と決

定された。その他今日ではまだ自由に賣買抵當をなし得る普通の土地も殘つてはゐる。元來世襲農圃は長子だけが之れを相續し、次子以下は父祖の土地に於て農業に從事する資格がないので、若しも次子以下の者が依然農民として身を立てたい場合は、他の地域に於て土地を買求め、そこへ新たに世襲農圃を設定しなければならぬ。さう言ふ狀態が續いてゐる限り、今にドイツ國內には自由に買求めらるゝ土地は次第に無くなつて了ふことだらう。從つて將來ドイツが海外に植民地を必要とし、又今日既に廣域の經濟地帶を要求してゐる意味も、そこから生れて來る。

それから世襲農圃制度に就いて、自由主義經濟諸國の輿論に現はるゝ多くの批評は、根本的に間違つてゐる。それ等の批評によると、『世襲農圃といふ名前は立派だが、要するにそれは賣買も抵當も禁止されてゐるのだから——卽ち個人の自由に處分が出來ないのだから——大體ロシアの土地國有と同樣だ。卽ち世襲農

圃はソ聯のコルホーズの亞流である』と言ふのだ。

だがそれは飛んでもない見當違ひである。世襲農圃は決して國有でも公有でもなく純然たる私有土地なのである。ナチス・ドイツに於て私有財產制及び私有資本制の認められてゐることは、前にも一應述べておいた。たゞドイツの私有財產制及び私有資本制は、公益優先原則の範圍に於てのみ認められてゐる。その點に就いて世襲農圃制の如きは、土地私有の寧ろ純粹なものだといふことが出來よう。

祖先傳來の土地、祖先の墳墓のある鄕里、自分の血潮を子孫に繼承せしむべき田畑を、貨幣經濟の勘定によつて勝手に之れを處分したり、或は之れを賣拂つて逐電(ちくてん)することが出來るやうな自由主義の制度の如きは、まだ本當の『私有』ではない。それは私有の擬體(フイクシオン)である。例へば正宗の如き傳家の寶刀があるとする。それは他人のものではなく純然たる私有だ。然し尊い寶としての私有であればこそ、他人には決して讓り渡せないのである。『その値段は幾らか』と、訊(たづ)ねられる

なら、その人は『その値段は無限である』と、即座に返事することが出來るであらう。

さう言ふ價値の無限にして他人には決して讓渡し能はないやうな、純然たる『私有』の土地を設定したものが、ナチス・ドイツの所謂『世襲農圃』の制度なのである！

二〇、商工業への施設

農業に對する統制を檢討したから、次に商工業の部面に移らう。

ナチスが商工業に對する經濟政策として、眞先に手を着けたのはカルテル（トラスト）の强制的擴充强化であつた。それには一九三三年七月に、二つの企業合同法が發布されてゐる。この法律によると、一方に於て國家がカルテルに對する

監視の態度を嚴重にしたと同時に、他方に於ては未だカルテルの組織なき產業には、强制的に之れを作らせることゝなつた。

强制カルテルの制度は、ドイツよりも既にソ聯の方が、ずつと早くから實施したものである。尤もソ聯に於ては國營企業の國有カルテル（ゴストレスト）を實行したものだが、ドイツの方では國家がその促進に乘出すまでもなく、既に民間に於て大概の企業には、カルテル制度が行はれてゐたものである。例へば鐵工業とか石炭業とか化學工業等には、二重にも三重にも、複雜な企業の聯合が存在してゐた。ドイツは實に米國と共に、トラスト、カルテルの模範國の如き觀さへあつた。

然しドイツに存在した民間カルテルは、勿論無益な自由競爭による不況を打開するために出來てゐたものであつたから、生產の割宛、價格の統制などは、そこで立派に行はれてゐたに拘らず、一方企業者が利潤低下を避ける手段として組織

したものであるだけに、公益優先倫理の眼から見る時は、寧ろ有害無爲の存在だつたのである。例へば價格の統制と言つても、國民生活確保のための低物價に則したものではなく、いつでもその價格は、彼等の規定した最高價格に落着く傾向を有し、換言すればカルテルの手段で物價はいつでも騰貴の現象を示してゐたものだ。

そこでナチス政府は法律の力を以て、國家のために生産擴充と低物價政策とを目標とするやうなカルテルの編制替へを行はしめた。則ち既成カルテルの形式を利用し、その魂を全然入れ替へさせることに努力した。

次にナチスが手入れをしたのは、貿易の部面である。ナチスは元來自給自足主義を建前とするので、極端な保護貿易主義を採用したが、それかとて外國の物資輸入を制限することは、到底事情が許されなかつた。何故なら一方に於て六百萬に餘る失業者を救濟するために、自動車工業、建築土木工業（例へば自動車道路

の建設）等の新しい企業をドシ〳〵擴大していつたので、それがためには原料資材の輸入が不可避だつたからである。換言すれば自給自足の過程に進めば進む程、出超が逆に入超に轉じて來た。その有樣は生產力の擴充に力を入れゝば入れる丈け、第三國との貿易、殊に入超の傾向が强くなつて來た日本の現狀と、大體同じ筋道であつたと言へる。

そこで、一九三四年の秋以來、新たに經濟相の地位に就いたシャハト博士は、『新計畫』なるものを發表し、全面的に貿易を管理し、輸入額を輸出額の範圍とするために、物々交換制、請算取引制等を確立した。このシャハトの新計畫は、今日自由貿易制の行詰つた後に於ける、世界各國の貿易政策にとつて、殆ど標準的又は模範的な遣り方となつてゐる。わが日本の貿易管理の趨勢も、まだ〳〵そこまでは行つてゐないが、部分的にはこのシャハトの新計畫に準據して、之れに倣つてゐる方面も極めて多い。

それから國內商工業の運營に關しては、これ又自由主義經濟の理念を離れ、一切を國家自體に奉仕させるために、一九三四年二月に、『ドイツ經濟の有機的建設の準備のための法令』なるものゝ發布を見た。これに依つて出來上つた全國的な大組織が、『全國經濟會議』(ライヒス・ウイルトシヤフツカンマア)制である。現今わが國の新體制に於て、大政翼賛運動の一翼をなす『經濟會議』なるものも、目下の所まだハッキリ決(きま)つた形にはなつてゐないやうだが、將來は大體このドイツに於ける全國經濟會議制に似たものとなるだらうと想像される。さてこの經濟會議なるものは、ドイツ全國を幾つかの經濟的地區(地域別的)に分け、更に全國一切の商工業をその種類によつて、『工業會議』(これは更に工業別によつて細分される)、『商業會議』、『手工業會議』等に分類し(產業別的)、その兩者を巧みに組合はせて、有機的に中央へ集中したものである。そしてこの會議に包括せらるゝ分子は、是等商工業に携はる一切の人々だ。換言すれば全國經濟會議は、全國に於ける商工業關係者一切の

職能の利害を代表する團體であつて、恰も農業關係者を網羅する『全國食糧團』の存在に匹敵すべきものであると思ふ。

二、信任者會議と勞働者問題

その次にナチス政府が、その經濟政策として最も力を盡したのは、勤勞者に對する獨特の施政である。これは俗にナチスの勞働者統制と呼ばるゝものだ。

ナチス・ドイツは前にも述べたやうに、先以て國家倫理的な見地に立つて、優秀なる農民を、立國の基礎分子と定めた。然し何と言つても現代のドイツは、經濟活動の事實的な觀點に立つて判斷するかぎり、勞働者人口の壓倒的に多い國である。商工業が異常に發達してゐるため、その人口の三分の一は、純粹な勞働者によつて占められてゐる。それを悉く農民に變へようとしたつて出來るものでは

ない。且つ理想的な農民を作るための適正農地は、前に世襲農圃制の場合に說明しておいたやうに、農民一人あたり百二十五ヘクタール、日本の町に直すと一人が百三十町に近い耕地を必要とする。日本の一農家の適正農地は一町三反くらゐだと假定すると、ドイツ農民は日本の農民の百倍くらゐの土地が必要となる譯だ。

尤もドイツに於ける、さう言ふ世襲農圃的農民の設置は、そこから國家の指導者を養成し、將來の國民文化及び政治力の中樞(ちうすう)としようとの考へから出發したものであつて、單に純經濟上の人口緩和(くわんわ)問題から出發したものではない。換言すればドイツの農民に、純經濟的な立場からそんな廣域(くわうゐき)な適正農地を與へる方針をとつたとするなら、ドイツは土地がいくら有つても足りない勘定となるだらう。

從つて純經濟的な國勢の上から考へると、ドイツは依然として、商工業を中心とした勤勞者の國家といふことになる。所がその勤勞者を、在來の自由主義のままに放任しておけば、今迄の經驗から考へて、どうしても階級爭鬪的な色彩(しきさい)を表

はさゞるを得ない。それはナチスの國本と根本的に戻る譯だ。

そこでナチスとしては、今迄とは全然新しいイデオロギーの觀點に立つて、(1)被傭者と雇傭者との間に精神的協調合作の組織を作らせ、(2)企業者側に指導性を持たせ、(3)勞働關係に對する國家の嚴重な統制を强調することにした。

被傭者と雇傭者との間に、自主的な立場から、協調合作の關係を保たせ、且つ企業者に指導性を持たせるためには、新たに信任者會議(フエアトラウエンスレーテ)なるものが作られた。尤も嘗て自由主義時代に在りても、ワイマア憲法によつて勞働者會議なるものが作られたが、間もなく有名無實の組織に變つてしまつてゐたのである。だからナチス政府の新しく設置した信任者會議は、もとの勞働者會議を、理想的に改組したものだと見ることも出來る。さてこの會議を內容的にいふと、要するに工業の經營者がその工場內のナチス黨員と相談した上、『信任者』となるべき候補者のリストを作り、それを工場の一般勞働者が、祕密に選擧して成立させた會議體なの

である。然しもしも勞働者がこれを承認し得ないやうな係爭問題が起れば、『信任者』の決定は國家任命の官吏たる『勞働受託者』によつて指名されることゝなり、そしてその指名に對しては企業者も勞働者も一切喙を容るゝ餘地がない。だから信任者會議は、要するに公益優先の原則を、實現しようと決心した經營者の諮問機關だ。從つてさう言ふ諮問機關を持つて、創意的に行動しようとする經營者は、全然國家の公益の一部分を擔當する指導者の積りでゐなければならない。換言すれば企業者は主人であつて、一般勞働者及び從業者は從者又は家來の地位に立ち、相互信賴と理解と友誼との關係を保つて、國家奉仕の事業に携はることゝなる。

そこで今日のドイツに於ては、資本家と勞働者の對立關係は、もうどこにも存在しないことゝなつた。産業に携はるもの一切が、何等かの形に於ける『直接の國家奉仕者』であつて、私益を通して自分の自由裁量による『間接の國家奉仕者』

なるものは認められないのだ。資本家は一定の利潤（利子）で保證された資本を提出することによりて國家に奉仕し、企業家は經營技術の創意的活躍により報酬を受けて國家に奉仕し、技術者は技術的創意を應用することにより、又從業者勞働者はそれ〴〵頭腦及び筋肉勞働の提出により、俸給賃銀を受けていづれも國家に奉仕することゝなる。

然しながら前にも述べたやうに、企業者は指導者であり主人であり、其他の從業者以下は之れに指導さるゝ家來である以上、國家自身としては、横合からその主人の專斷放肆を監督し、同時にその家來の怠惰及び不服從をも監督するやうな、一種のお目附役をおいて置く必要がある。それを前にも一寸述べておいた勞働の受託者といふ。

受託者は全國の各區に亙つて、國家から直接に任命された官吏であつて、その數が十三名となつてゐる。そしてこの受託者の目的は、社會平和の維持であるか

ら、專らその地方々々に於ける勞働問題の紛爭を取扱ふ。企業者（傭主）が自分の創意だからと言つても、例へば勞働者を大量に解雇馘首する場合とか、或は賃銀や時間の決定をなす場合には、一々この國家の大目附役たる受託者の許可を受けなければならぬ。

二三、勞働戰線と「歡喜による力」

斯う言ふ制度になつた以上、勿論在來の階級對立を基礎とした勞働組合組織は、全然無意味な存在となつて了つた。

從つて實際又ナチスは、政權獲得の直後、社會主義的及びキリスト教的な勞働組合組織を全部禁止し、幹部を投獄し、その財產を沒收するといふ風に酷く之れに彈壓を加へた。だが元來ドイツは世界に於ける勞働組合組織の祖國と言はれた

程あつて、勞働者にして組合組織化されてゐない者は殆ど一人もないといふ有樣であつたから、この尨大なる組合を、一朝にして解散せしむることは、殆ど不可能と言つてもいゝ位だつた。

又實際ナチスとしても、勞働者そのものに、何等敵意を挾むものではなく、寧ろ國家の忠良な臣民として、益々勤勞的能率の高い奉仕をして貰はねばならぬ、との建前を持つてゐたものだから、在來の勞働組合は禁止するとは言ふものゝ、その形體はこれを利用し、たゞその魂を入れ替へるといふ風に、根本的な改組(かいそ)をなすことの必要を痛感したものである。

そこで在來の組合を改組させるために、全國勞働の指導者として、さういふ方面に組織能力のある黨員ローベルト・ライをして、作らせたものが『獨逸勞働戰線(ドイチエ・アルバイタフロント)』なのである。

この勞働戰線は、今日では全然ナチス黨の指揮の下に服從してゐる。そして、

在來の組合それ自身の主要目的であつた團體交渉權其他の階級的な權利は、全然抹殺されることゝなつた。又その組成分子も、今迄のやうに勞働者計りではなく、更に傭主も、自由職業家も、商人も之れに加はつて、其の組織されたものゝ數は全國で二千五六百萬人に達した。從つてこの勞働戰線の全國的な地位とその存在の理由とは、一方農業界に食糧團があり、商工業の經濟面に全國商工會議があると同樣に、勤勞を建前とする世界にこの勞働戰線がある、といふやうに見ればいい。換言すれば勞働戰線は、勤勞を以て國家に奉仕する國民の、身分及び職能を一切合財包括した大きな意味の等族體なのである。たゞ以上の三つの團體に就いては、多少その重點上のニュアンスの異つた點がないでもない。三つの團體は何れも全國的な等族體ではあるが、食糧團はそれに倫理的な色彩が餘計に着いてゐるし、全國商工會議はそれ以上に經濟的な意義が加はつてゐるし、又勞働戰線の方は寧ろ社會的な傾向を強く出してゐると考へてもいゝ。

社會的な傾向に重點がある結果、この勞働戰線が之れに附屬する組織として利用してゐる『歡喜による力』の團體の活動の如きは、勞働戰線の存在に重大な理由を與ふるものである。言ひ換へると、勞働戰線は勤勞身分層の國家的厚生運動だ。即ち勞働戰線により勤勞身分の生活保證といふやうな、消極的な意味による、社會政策一切の施設が考慮されると共に、更に『歡喜による力』によつて、積極的にスポーツや娯樂(芝居、音樂等)に關する肉體及び精神生活を豐富にし、又勤勞者がサナトリウム、溫泉場、避暑地等の高級な社會生活に均霑し得ることとなるのである。

二三、勞働奉仕制の國民教育目的

勞働戰線のことを言へば、必ず勞働奉仕の存在を想ひ出す。そして勞働奉仕

制のことに關しては、もうわが國に於ても、その內容が細大洩らさず紹介されてゐる。だから玆では、勞働奉仕制の細かな點に就いて、更に紹介的な紀述をなすことは避けよう。たゞこの勞働奉仕制の、ナチス・ドイツに於ける存在の意義を、少しばかり考へておく必要があると思ふ。

勞働奉仕制は人も知る如く、內務省の直轄に屬し、ヒール大佐を團長として全國に四十萬の團員を有する團體で、あらゆる青年男子（後には女子も亦）は、軍隊に入る前の數ヶ月間、國家のために勞働の奉仕をなすものであつて、嚴格な軍隊的訓練の下に、荒廢地の開拓や道路堤防の構築（こうちく）等に從事するものだ。

この制度の目的は、純然たる國民教育の手段たるに在る。始めヒットラア政權が立つ以前にも、ブリュンニング內閣及びシュライヘル內閣が、この制度に近いものを採用したが、それは全然失業對策を目的とするものであつて、從つて經濟的な理由を基礎とし、それにいくらか國民厚生的な意味を持たせたものに過ぎなか

つた。

そして又この制度自身も、必ずしもドイツ人の創意といふことは出來ない。或はこれに近い制度が、却つてブルガリアの小國などに存在してゐたのではないかとさへ思はれる。一體ドイツは創意的天才的な能力が、比較的に少い民族である。ドイツで大成した大事業のオリヂナリティは、必ずどこかの外國人の手によつたものであるといふのが普通だ。

勿論さう言つたからとて、ドイツ人が必ずしも天才的でなく、又創意的に劣つた民族だといふことは出來ない。たゞ其點ではドイツ人のみが、イギリス人やフランス人以上に、特に優秀な民族だとは言へないと言ふ譯だ。たゞ然し、例へば外國の天才が發明又は創意したものをドイツへ持つて來て、それを徹底的に研究し組織し大成化することに就いては、ドイツ民族は明かに異常な能力を持つてゐる。勞働奉仕制の如きも、假令その發祥はブルガリアの如き小國の片隅にあつた

のかも知れぬが、ドイツ人はこれを自國に採用し、國家全體の大事業として、之れを國家制度化した所に、その偉大さが窺はれる。

勞働奉仕制を地方的に又は部分的に實行するといふことは、どこの國でもやつてゐる。之れを一つの國家が、國民義務教育制や徴兵制と同じ形式で、全國的に實施するといふことは、餘程國家によく統制がとれて、國民に自覺の出來た所でなければ、斷行の出來るものでない。それをナチスは斷行したのだ！

それから今一つ、この勞働奉仕制の目的が、失業對策其他の經濟的理由からでなく、又厚生運動の一つの現はれでもなく、更に又軍隊の補助機關でもなく、國民を教育する手段であるといふ主張に對しても、私達は特に注意を拂ふ必要がある。勞働奉仕は教育機關なのだ！

教育に關するナチスの基礎觀念は、實に革命的である。ナチスの理論から言ふと、學校教育の如きは、國民教育中の極く一小部分にしか當らない。國民は各自

母の胎内に居る時から、少年、青年、壯年、老人の各時代を經て墓場に入るまでの、一生を通ずる國民生活期の一切をいふ。從つて教育なるものは人種學や優生學の目的となる範圍から始まつて、智能技術の習得から、軍隊生活に移り、公民として職業生活をなすに至るまで、連續した時の間に不斷に行はれる。子供が學校に行くことも教育の一部なら、それと共に壯年が、八百屋や肴屋の商賣にいそしむ生活も亦教育の一斷面だ。その間に國民教育上の杜絶える斷層があつてはならぬ。則ち子供が義務教育を受けて、次に軍隊教育に入るまでの大切な間に、國民教育上の無駄な間隙があつては大變だからといふので、勞働奉仕といふ國民教育の一時期を挿入した譯である。

斯様な教育不斷の原則は、ナチスの指導者原理から、論理の當然の歸結として生れたものだと思ふ。各國民は指導する者であると共に、指導せらるゝ者だ。先生であると共に、常に生徒だ。家長であり主人であると共に、子供であり又家來

である。だから誰れでも上の者から敎へられ、目標が示され、指導されて、國民生活を完成して行く……

ナチスの敎育といふのはさう言ふ意味のものである。從つて勞働奉仕は若き國民を、眞に責任ある國民に培養し養成して行くための、『敎育手段』だといふことになる。

二四、新計畫による輸出入制度

以上で大體ナチスの經濟政策及び社會政策を、主觀的又は施設的方面から說明した積りであるが、それを今一步進んで、客觀的又は成果的方面から觀察して見よう。

一體ナチスは斯ういふ風な大きな施設をやつて、隨分大變な金がかゝつたであ

らうが、一體それをどうして賄つたか？　國家の財政はどう言ふ風にして運用されたか？

それに關し、自由主義經濟の國家なら、國內に公經濟と私經濟とがハッキリ分離してをり、私經濟の力が公經濟を賄つて行く形、卽ち監督して行く形になつてゐるのであるから、私經濟に携はつて租稅を拂つたり、公債に應募したりする國民は、公經濟の內容を知悉する必要がある。だからそんな國では、議會が重要な役割を勤め、そして國家財政の協贊權は、議會の一番大切な權利といふことになつてゐる。

所がナチス・ドイツの如く、さう言ふやうな意味の私經濟と公經濟との區別がなくなり、國民は國家生活及び國力發展上の仕事を、一切政府に委任してあるやうな國家では、議會の財政協贊權などといふそんな餘計なものが有る譯がない。國家の豫算は、全然外部に發表されないのだ。だから一切は祕密である。それで

も政府は、どこからか財源を見付け出して、その公經濟と私經濟の一部分とを一緒にしたやうな、尨大な金を支出してゐたに違ひない。

例へばナチスの政府にとつて、最初の大きな課題は、失業者の救濟であつた。失業者にたゞ救濟金を渡してをれば、非常に金がかゝつて、到底やつて行けない。そこで是等の失業者に職業を與へて、何か生產的な仕事をさせるなら、將來は必ずそれが國富となつて、國家の收入の形で返つてくる。然し失業者は、產業界の不況により、是等の勞力を必要としないために、工場の外へ放り出された群れであるから、さういふ失業者に職業を與へるためには、政府が別に資金を出して、新しい仕事を作つてやらなければならぬ。

そのためにナチス・ドイツは、先づ土木工事を起し、新しい自動車道を作り始めた。それから有らゆる方面に亙つての軍需工業、航空基地、ジーグフリード線を築構するために、それに必要なる機械、化學、電氣、建築、土木等の產業一切

に亙つて、是等の失業者を利用し始めた。その手段によりドイツには六百萬の失業者が、一九三七年頃には殆ど一人も居なくなつた。同時に一九三五年以降の再軍備着手による軍需工業の勃興は、實に驚くべきものがあつた。製鐵は忽ち世界の第三位に躍進し、石炭の毎年の使用量は、米國に次いで約二億五千噸、といふ活氣振りを示した。

勿論それには貧乏なドイツが、隨分苦しい遣り繰りをしてゐたことが窺はれる。その算段をした人物が、當時の經濟相のシャハトと、今日の經濟相のフンクとである。

一體金を中心とした經濟では、ドイツは洵に貧弱な國であつた。ナチスが政權をとる直前の恐慌時代には、ドイツの財政が極端に惡化して、金の流出は止まる所を知らず、一九三一年の金融恐慌に際しては、辛うじて債權諸國との間に短期外債引上休止の協定を結んで、やつと破產を免れた程度であつた。然もナチス

の時代となつても、財政の惡化は一段と昂進し、マルク貨暴落の危險が目睫の間に迫つてきてゐたものだが、シャハトが再び國立銀行の總裁となるに及んで、直ちに諸外國との長期借款の償却金及び利子を、約半分（後には三割）に切下げることによつて、極力金資本の流出を防止した。その後シャハトは經濟相となつて、逆に外貨の吸收に一所懸命となつて働いた。

先づそれには輸入を極端に統制した。則ち許可なくして、外國から原料資材を輸入することは嚴禁され、輸出入は『新計畫』によつて、殆ど政府の獨占に歸した。ドイツとその債權國及び入超國との間には、物々交換制が行はれ、又清算協定が締結された。それと同時に輸出は極端に奬勵せられて、所謂スクリップ制度なるものが採用された。スクリップ制度といふのはドイツ輸出業者が、輸出に對する代金として、外國本位貨の代りに、ドイツ國内に於ける外國人所有の債權を、約半分に減價した金額、卽ち登錄マルクなるものを受取り得る制度で、これ

によつてドイツ輸出高は、海外に於てダンピング的な進出をなし、同時にドイツ國内の外國に對する債務は、半減されるといふ誠に巧妙な方法なのである。

二五、金貨準備なき貿易と生産擴充

然しこのやうな方法で、海外の貿易を整へ、資材原料の輸入を確保することは出來たが、なほそれだけで以つて、金貨の吸收をなすには足りない。金貨がなければ折角確保した原料や資材を、國内でうまく消化して行くことが出來ないのである。

何故なら是等の海外からの原料資材を、國内で消化するには、非常な流通資金が要る。殊に軍需工業が盛んになつて以來は、大體政府及び公共團體が、生産品の註文主であつて、民間の工場に對しては、莫大な支拂ひをしなければならぬ。

民間工場は又政府からの貸出しがない限り、尨大な勞働者に賃銀を拂つて、彼等に働かせることが不可能である。

然るに金貨の準備もなくして、政府が矢鱈に不換紙幣の發行でも續けてゐようものなら、それこそ再び大インフレーションだ。ドイツはもう大戰直後の大インフレで懲々してゐる。『インフレ』と言ふ言葉を耳にした丈けでも、ドイツ人の心理は憂鬱になるのだ！

そこで金貨の準備なしに、どし〳〵貨幣の發行が出來る方法がないかと、頭をひねつた結果、考へ出したのが、勞働による融通手形の發行であつた。財政的にはずゐぶん苦しい難關を切拔けて來たシャハトの經驗では、惡性インフレの進行は、結局國家信用の薄弱といふことに歸着する。從つて國家の信用（卽ち絕大なる權力）を基礎として、國家が臨時に融通の出來る手形を發行し、それに貨幣と同じ價格を保たしめて、政府及び工場相互の割引に利用させる、といふ方法を採

つた。

それに依つて先づ始めに勞働者は、一箇年間の賃銀が保證される。勞働者が一箇年間賃銀だけ貰つて勞働する限り、一箇年後には、生産はそれ丈け擴充されるであらう。その擴充された價値部分が、又その次の手形の保障となつて、次の手形が發行され得る譯である。

この手形の通用期間は、普通三箇月であるが、實際上は五箇年間之れを更新し得るのである。而してこの手形の發行者は、政府でなくて、企業家自身なのだ。即ち企業家がその註文先を支拂人とする發行者となり、政府はそれに對し、恰も約束手形の保證人の形であり、そして政府の信用は、その時の勞働者の就業量によつて確定される。又この手形を割引する者は、政府の依託を受けた銀行業者其他の信用機關であるが、是等の銀行業者及び信用機關は、更にこれを國立銀行に提出して、再割引を受けることが出來る。

國立銀行は又政府の保障する部分と、租税收入（これは普通の營業税のみならず、ナチス獨特の無利子の租税前納額を含む。尤も租税前納制はその後一時廢止せられた）を引きあてとして、手形支拂ひのための公債を發行し、この公債は五年以内に償却することゝなる。

斯様な政府—銀行—企業者—勞働者と、一絲亂れざる統制の圏内に、國家財政の操作が行はれてゐるのだから、その中に立つて金融業者及び企業家だけが、私利に走ることは許されないのみか、事實上出來ないのである。銀行に對しては、信用統制局によりて、政府は嚴重な業務監査を行ひ、又企業者に對しては、一九三四年十二月の法律によつて、利益配當六分以上を許可せざる利潤制限が强行されてゐる。

斯くの如き手段によつて、ナスチ・ドイツは、金貨なくして貿易を殷盛ならしめ、又金貨準備なくしてインフレーションを起さゞる國内資本を潤澤に捻出する

方法を發見した。英米諸國はナチス・ドイツが金貨を所有せざるがために、產業上の發展性がないと安心してゐるうちに、ドイツはいつの間にか、世界第一の商工業殷盛國となり、又僅か七箇年の間に、殆どゼロに近い狀態から一躍して世界第一の大國防國家に邁進(まいしん)し得たのだ。

今日の經濟相フンクが、歐洲新體制の完成の曉には、將來黃金は閉め出されて窒息(ちつそく)するであらうと傲語し、世界の黃金を山の如く積んでゐる米國企業家金融業者の心膽を寒からしめてゐる所以のものも、決して架空の漫言ではない。

そんな時代は、極めて近い將來に屹度來るだらう！

燃料部　かい、かこ、かこ

有機部　ゴム・ガス

無機部　肥料、塩素

二六、ナチスの文化統制

ナチス經濟の一般を覗いた以上、一應はナチス文化方面の施設を述べぬ譯には

往かぬ。

なぜなら文化や思想に關する方面は、別に政治、經濟と分離した部面をなすものでなく、廣い意味のナチス政治（從つて國家倫理）の基調をなすものだからである。

だがナチスは政權をとると同時に、一番早く施設として着手したのは、文化の方面であつた。今でこそどこの國家でも、啓蒙宣傳に關しては、國家の重大事として大童となつてゐるから、別に珍しいことではないが、尠くとも文化の宣傳、啓蒙、指導、統制に關し、特に國家が內治や外交や經濟の部面と同等同格の資格で、『宣傳省』なる行政最高部を設けたのは、世界弘しと雖もナチス・ドイツが一番最初であり、ファッショのイタリアが之れに次いだ。

ナチスが政權をとれば、必ず宣傳省が出來るだらうといふことは、ヒットラアの『わが爭鬪』を讀めば、誰れにも首肯が出來る。ヒットラア自身、既に政權獲

得と同時に、あらゆる手段を講じて、ナチスのイデオロギーを國民に鼓吹するために、斯樣な施設を作つてやらうと始めから豫定してゐたものである。

案の定ナチスが起つたと共に、ゲッベルスを大臣とする『文化啓蒙及び宣傳省』なる一省ができた。この省の內部機構は、宣傳局、新聞局、映畫局、防諜局、文藝局、ラヂオ局、音樂及び美術等に分れ、各自その專門の事項に就いて、ナチス思想の宣傳及びナチス思想の排擠に努力してゐる。そのうち最も重要なのは宣傳局であり、それは他の部門と緊密な關係をもつて、內外に於けるあらゆる宣傳事業を統措し、附帶事業として展覽會、表彰、勞働者冬季救濟、講習等を指導してゐる。

宣傳省が特に力を入れてゐるのは、新聞の指導統制である。在來のドイツ新聞界は、僅少の例外を除き尠くとも大新聞と名の附くものは、大體自由主義乃至社會主義の傾向が著しかつたが、ナチス新聞政策は全然これと異なる態度を執り、

ナチス的文化創造事業に關與せざる新聞の編輯は、一切これを禁止することゝした。然もそれは紙の不足とか、一地方には、一新聞紙しか要らないといふやうな形式や體裁の問題からではなく、重點を人的要素に置いて、ナチス文化に參加する編輯者及び新聞人は、飽迄も之れを擁護し、その主旨に卽應せざるものは斷然これを解雇せしめ、若しも責任者自身がその人的條件に叶はざる時は、用捨なく之れに廢刊を命ずることゝした。

卽ち一九三三年十月に發布された「編輯人法」は、新聞の編輯人を明かにして、責任回避の途を防ぎ、且つ編輯記者にユダヤ人及び自由主義的傾向を有する者は、全然之れを使用せしめざることゝなつてゐる。そして重要ニュースは、一切を擧げて國家の管理するドイツ情報局の供給する所である。

藝術も亦ナチス統制の深刻に行はれた分野だ。一九三三年、政府は先づプロシアの藝術アカデミーに干涉して、多くのユダヤ人及び自由主義者を追放したが、

その中にはトマス・マン、ヤーコブ・ワッサアマン、フランツ・ウェルフェル、ゲオルグ・カイザア等の代表的な非ドイツ的藝術家も含まれてゐた。更に一九三六年十一月、宣傳相ゲッベルスは、批評統制法なるものを發布し、以後は藝術の批評を禁じ鑑賞を許すこと、藝術家の匿名評論を嚴禁すること、新聞社の文藝藝術記者は宣傳省の許可を受けたる者に限る等の事項を規定した。

然し、ナチスの文化工作は指導統制である。消極的な統制をなすばかりではなく、積極的な指導卽ち新文化の創造に特別な力を致してゐる。從つて國策映畫や演劇を發表して、國民文學の發達を計り、文筆業者を登錄制度として、有能なるもの天才あるものに對しては職業的地位の向上を計り、また優秀文學作品の保護奬勵、圖書出版事業の助成擁護等、出來るだけの世話はしてゐるのである。その上全國文化會議（ライヒスクルツーアカンマア）なる文化に關與せる人々の身分職能團體を作らしめ、映畫、音樂、演劇、美術、新聞、著作の各部門に（各々それ〴〵の會議（カンマア）を有す）從事する專門

人を殘らず加盟せしめて、政府の文化政策を横合から助けさせてゐる。

是等のナチス・ドイツに行はれてゐる諸工作は、わが國新體制に基く大政翼贊運動の將來にとりて、殊にその豫定されてゐる全國文化會議の具體化に就いて、多大の示唆を與ふる點があるだらうと思ふ。

第三編

復興より躍進へ

—(ナチス治下のドイツ)—

一、まづ聯盟と軍縮會議の脱退から

今迄はナチス・ドイツの對内的な國策の經緯を見て來たが、これから以下にはその對外政策の成行きを述べることゝしよう。結局問題はそこから直接に、今日歐洲に於て展開されてゐる大戰、即ち全體主義國と民主々義國との血みどろの爭覇戰に落ちて行く次第を述べる譯である。

前にも屢々言つたやうに、ドイツの復興はコンピエーニュの森に於ける休戰條約當時の決心、即ち『ドイツは戰爭にまだ負けてゐない……戰爭はまだ經驗してゐる』との國民心理から出發してゐるのである。從つてドイツの對外政策は、ドイツの最後の『戰敗』を烙印したヴェルサイユ條約及びその體制を、徹底的に排除する所から出發しなければならなかつた。それには暫く恨みを呑んで國内體制を

根本的に建て直し、新しい底力を作つておいて、武力に於ても經濟力に於ても、外交的な實力に於ても、また俯仰天地に恥ぢざる國際的正義觀に於ても、ドイツの敵を叩き伏せるだけの資格を獲得した上で、之れを實行しようと計畫したものである。從つてナチスが政權を握つて、稍々國內の秩序と實行とを持つに至つた瞬間から、愈々ナチス流の外交が始まるのである。その出發的は勿論、ヴェルサイユ條約の破棄行爲からであつた。

然しヴェルサイユ條約の破棄と、一ト口には言ふものゝ、そこまで到達するのには、中々一筋縄では往かなかつた。まづ自國の國力に應じ、一歩々々づゝ理詰めで前進したのである。由來ナチスの外交は、英佛側では之れを爆彈宣言と稱し、その横紙破りなることを酷く嫌つたものだ。だがナチスがその爆彈宣言を行つた瞬間は、決して世人が言ふやうな横紙破りではなく、それに應ずるだけの論理的理由と、罷り違へば何時でも實力を行使し得べき、鐵の如き國民的決意とが伴つ

てゐたのである。

ナチスが政權掌握以後、稍々自信が出來たと見えて、最初に放つた外交的爆彈は、國際聯盟及び軍縮會議からの脫退であつた。一九三三年の十月、ナチス・ドイツの代表は、先づ國際聯盟の軍縮會議に於て、

『ヴェルサイユ條約で、ドイツの軍備を縮少させることを規定したのは、列國がドイツの先例に倣つて、一般軍縮を實行する前提であつた筈だ。然るに列國は毫も軍縮に對する眞面目な意思を持つて居らず、從つてドイツ國も亦、當然列國なみの軍事平等權を要求する權利がある……』

との提案を行つた。所が列國側は、假令ドイツの言ふことに一理があるにしても、今迄の成行から考へて、到底その要求に應ずる譯に往かなかつた。そこでドイツは十月十四日、斷然國際聯盟と軍縮會議とに脫退の通告をなし、更に前にも述べたやうに人民投票を行つて、これが單なるナチス政府のみの突飛な要求では

なく、國民全體の總意なることを世界に告示した。

ドイツの聯盟脱退は、わが日本と同じ脱退の例に倣つたものである。聯盟は既に日本の脱退のために、著しく鼎の輕重を問はれてゐた場合のことだから、ドイツのこの擧によつて、更に一層の弱點を暴露し、之れに對し何等積極的な行動さへ執る元氣がなかつたのである。

然しながらドイツは聯盟を脱退して、軍事不平等に挑戰し、最初の試金石に成功したとは言ふものゝ、まだ進んでヴェルサイユの條約を破棄するまでの機には熟してゐなかつた。從つて最後にその機會が到來するまで、先づ國內の改革と同時に、對外的にはナチスのイデオロギーに則應した大ドイツ國の建設工作に一切の努力をさゝげ、その目標の最初の行程として、先づ(一)オーストリアを合併すること、それが旨く行けば(二)ポーランドの廻廊及びメーメルの復歸に努力し、(三)又ザール地方を人民投票によつて、再びドイツ領に編入した上で、(四)フラ

ンスを怒らせないためにその新國境へ保障を與へる方針を定め、着々その實行の準備に取りかゝつた。

二、獨波不可侵條約

だがいくら準備に取掛つてみた所で、さう言ふ大問題が、一朝一夕に解決出來るものでない。總てが力の問題である。力といふのは單なる武裝力ばかりではなく、經濟も文化も世界觀的正義も、總てを一緒にした總計の國力なのだ。その國力が充分にある限り、國家の意思の通らぬことはない。反對にその國力が充分でないと、相手に虛を突かれて、何をやつても成功しないのだ。

その意味に於てナチスのポーランド廻廊の回收と、オーストリア合併への努力は、思ふやうに行かなかつた。要するに最初の試みは失敗したのだ。その經驗に

よつてナチスは、自分の國力に省みて、多くのことを學び得た。

ポーランド問題に就いては、ドイツが廻廊及びダンチヒの回收に努力しようと決心した矢先、ポーランド側に先手を打たれて、却つて一時大讓歩をしなければならぬことゝなつた。換言すれば一九三四年一月二十六日、ドイツは暫く廻廊問題以下を不問に附して、ポーランドと不可侵條約を結ばざるを得なかつたのである。その內容は兩國政府が、

『相互の關係に就いては、如何なる問題に拘らず直接協議し合ふことゝし、協議が旨く纏らなければ、双方の合意により、仲裁々判により解決を求むべく、どんな場合にも武力を行使しないこと』

を約束し合ひ、然もその期限を十箇年と定めたのである。これはドイツがこゝ暫くは、大ドイツ國建設のための東方進出を斷念したことゝなるので、勿論ドイツ側の大讓歩だ。然しこの讓歩は、當時のドイツにとりて、已むを得ざる處置で

あつて、必ずしもドイツ外交の失敗と見ることは出來ない。何故ならこの不可侵條約によりて、大ドイツ國建設に關するドイツの外交は、二つの方面に、却つて都合よく進展したからである。

その一つはこれによつて、ソ聯からの脅威から免れたことだ。當時のソ聯は、ナチス・ドイツにとりて不俱戴天の敵であつた。そはナチスのイデオロギーの問題でもあると同時に、ナチスの對外方針は東歐よりソ聯のウクライナに進出したい意思があつたためである。その場合に廻廊及びダンチヒをドイツに取り上げらるゝ恐怖から、若しもポーランドがソ聯と款を通ずるやうなことがあれば、獨ソ間に戰爭が起つた場合、ドイツとしては非常な苦境に立たねばならぬことゝなる。そこでこの際一時廻廊及びダンチヒ問題の鋒を收めて、ポーランドから暫定平和を購ひ、それによつて東境からのソ聯の不意打を避けることが出來たのだ。

その二は東方に於いてポーランドと仲直りをして、後顧の心配をなくして置け

ば、ドイツとしては專ら勢力をオーストリアに伸ばし、同地方を合併することも比較的容易だと考へたからである。

そこでポーランドと十箇年間不可侵條約を結んで置いて、そのまゝ鋒を南に轉じオーストリアを合併しようとしたが、これもまた旨く往かなかつた。寧ろそれは非常な失敗でさへあつた。

ヒットラアはその以前に、オーストリアの合併には、どうしてもイタリアの諒解を必要とすることを痛切に感じたので、一九三三年六月にはゲーリングをしてローマを訪問させ、三四年六月にはヒットラア自身ヴェネチアに出ていつてムッソリーニと會談を行つた。この會談の內容は不明であるが、結果から見てムッソリーニは、ナチスがオーストリアに侵出する件に就いては、まだハッキリした諒解を與へるまでに至つてゐなかつたやうである。

然るにその會談からまだ一ケ月も經たぬ七月二十五日に、オーストリアのナチ

スはミュンヘンのナチスと聯絡をとつて、ウィーンに於いてクーデターを斷行し、首相ドルフスを暗殺して了つた。それに對してムッソリーニは、直ちに三箇軍團を國境に集中させ、若しもドイツがオーストリアのナチスを救援するために兵を動かすなら、イタリアも同國内に侵出する用意がある旨を通告した。そこでナチス・ドイツは、そんな意味でイタリアと事を構ふるの不利なるを感じ、オーストリア合併を一時斷念し、却つてその暴動の首謀者を處罰して、その事件を一應丸く收めたのである。

然しながらムッソリーニの威力によつて、合併から免れ得たオーストリアは、その事件によつて、自國が結局は母國ドイツと合併しなければならぬ運命にあることを自覺しなかつた。國民の多數は之れを希望してゐたに拘らず、オーストリアの獨裁的政府がこれを聞かなかつたのだ。ドルフスのあとに獨裁者の地位に就いた首相シュシュニッグは、ドルフスの遺志を嗣ぐと言ふよりも、寧ろ一層復讐的

な心理から、ナチスの擡頭を憎み、不必要な彈壓を之れに加ふる政策を續けたものだから、若しも近き將來に於て、ヒットラアがムッソリーニと本當に手を握つた場合、オーストリアの運命はもう知るべきのみとなつてゐたのである。

三、ザール地方の歸屬戰

それは兎も角として、ナチスのオーストリアを合併しようとする最初の試みは、見事失敗に歸したと言へる。

ポーランドの廻廊を得んと欲して、藪蛇のやうに不可侵條約を締結させられ、更に南に伸びんとして合併問題に手を燒いたナチス・ドイツは、然し最後のザール復歸問題に於いて、始めて華々しい成功を收めたものである。

その當時ドイツは、對外問題で何をやつても旨く往かないので、對內的な面目

もあり、政府としても多少腐つてゐた傾きがあるが、ザール問題の大成功によつて、その愁眉はやつと開かれた。否それによつて大に元氣づけられ、それから先は何をやつても、トン〳〵拍子で成功するのだ。げにザールの成功は、ナチス外交開運の第一歩として、緣起祝ひをしなければならぬ記念すべき出來事であつたと言へよう。

ザールの問題に就いては、ナチスの選擧投票の說明をした時、いくらか述べて置いたから、更に繰返して絮說する必要はあるまいが、順序として一應の經緯だけを說明しておくと、要するにザール地方といふのは、獨佛兩國境に跨る面積約二千方粁の小さな地域で、良質の石炭を產出するので有名な場所である。前の大戰でドイツからアルサス・ローレンを割讓せしめたフランスは、是非ともこのザール地方も一緒に自分のものにしたかつた。なぜならローレン地方は、鐵鑛石の豐富な產出地であるが、その鐵鑛石を以て製鐵事業を起すには、ザールの石炭が

どうしても必要だつたからである。

ヴェルサイユ條約はそれに對し、ザール地方を十五箇年間國際聯盟の監理下に置き、その後人民投票によつて、ドイツなりフランスなり或は現狀維持なりの歸屬をきめることにした次第は、前にも述べた通りだ。その間にドイツのシュトレーゼマン外相は、フランスのブリアン外相と協調外交を行ひ、ザール炭をフランスに提供する等の諒解の下に、ザール地域を獨領とするやうな、ある程度までの諒解がついてゐたものゝ如くである。

然るにドイツにナチス政權が立つて以來、フランス政府は急に硬化し、ザール地方はどうしてもドイツには渡せない、といふやうな態度を漸次濃厚にしてきた。この地方は元來炭鑛地域であるから勞働者が多く、從つて住民は大體ドイツ種であるとは言ひ條、反ナチス的な社會民主黨や共產黨の勢力も相當に根を張つてゐた。それに住民はカトリック教徒で、ユダヤ人の落武者も澤山集つてゐると言ふ

譯であつて、一九三五年一月の人民投票を前にして、俄然ドイツ合併反對論がその地方に擡頭してきたものである。

そこで聯盟も事態を憂慮し、英、伊、スエーデン、オランダの四國より成る國際軍隊を派遣し、選擧を監理することゝなし、一方ドイツ側も、ドイツ反對投票者を迫害しない公約を與へた。

斯くして一月十三日に、人民投票は先づ公平に行はれたのであるが、その結果は前にも述べた通り、ドイツ側の豫期以上の大勝利を占め、フランス側はこれ亦豫期を裏切ること夥しい大慘敗であつた。

この選擧の結果國際聯盟も已むなく、ザール全部がドイツの主權に屬せることを公式に承認したのである。これがヴェルサイユ條約の直後のことであつたなら、假令ドイツ側が投票で勝つてゐても、何とかかとかの理窟をつけて、ザールをフランスに歸屬せしむるなり、或はこれを獨佛兩國間に分割するなりの方法を採つ

たものだらうが（その適例は上シレジアの投票）、然しその時は聯盟もおとなしくドイツの言ふなりになつた。それだけドイツの國力が物を言ひ、又それだけ聯盟の力が凋落しつゝあつた趨勢を物語るものだ。

四、再軍備の爆彈宣言

ザールの爭奪戰に大成功を收めたドイツは、その油が乘つた勢に乘じ、二箇月後には、ドイツ再軍備宣言を斷行した。愈々ヴェルサイユ條約破壞の本格的な爆彈外交が始められたのだ。

一九三五年三月十一日、陸軍の再軍備宣言を手始めとし、十五日にはゲーリング空相の名に於て、空軍の復活が宣言せられ、更に十六日にはゲッベルスの名に於て、陸海空一般に亙る再軍備が、既に出來上つた旨の說明が、ラヂオを通じて

行はれた。ベルリンの蒼空には、いつの間に完成したか知らぬ六百の飛行隊が、爆音を立てゝ飛び交うた。英佛の新聞記者は蒼くなつて、航空省にゲーリング空相を訪問した。

『一體ドイツは、この再軍備を發表する前から、祕密に軍事飛行機を匿してあつたんですか？　どこか郊外の森の中へでも？』

ゲーリング空相は、その便々たる腹を波打たせながら、破顔一笑して答へる——

『冗談言つちや困る。みんな宣言後に新しく作つたのだ……』

『だつて六百の飛行機を、十日やそこらで新造するのは不可能でせう？』

『君達はドイツ工業の運河制度なるものを知らんかね？　運河を掘るのに、河の水を引きながら漸次に掘り進むなんて、そんな馬鹿なことはせんだらう。先づ水と水との乾地へ、運河を掘つておいて、さて愈々落成式の時には、兩端の堰を切つて一度にドッと水を流し込むだらう。それと同樣にドイツ空軍の飛行機は、そ

の部分品が國土計畫に從つて、全國へ系統的に分布してあつたのだ。一、二、三ッ……といふ瞬間にそれを組立てりや宜かつたんだ。今までのドイツの工業潜勢力が、九分九厘九毛バラ〳〵に作り上げておいたものを、さア再軍備だ……といふ瞬間に、その殘りの一毛で、組立てたのがあの戰鬪機の六百さ。分つたかね？』

『それぢやドイツの平和工業の尨大な躍進は、結局軍需工業への乘替へのためだつたんですか？』

『知れたことさ。これから將來の戰爭は、擧國一致の戰爭だ。人間が女でも子供でも戰士として立てるやうに、ドイツの物の生産は、總て戰爭に役立つやうに動員し得るのだ。ドイツには平和工業などと言ふものは無い。戰爭の時に役に立たぬ平和工業なんてものは、わが國に於てはその存在が許されぬ。戰はぬ時は平和工業さ。戰ふ時はそのまゝ軍需工業さ！』

斯くしてナチス・ドイツは、『即時義務兵役制を復活す』と言ふ極く簡單な宣言

と徴兵令とを發して、ヴェルサイユ條約第五編のドイツ軍備制限の規定を、極くあつさり破棄して了つた。

その徴兵令の内容は、一九一四年生れの男子は、四月一日を以て徴集の上兵役に編入され、二十歳より二十五歳に至る男子は補充兵、二十五歳より三十歳の男子は豫備兵役に編入さるべきことを規定したものである。その結果ドイツの平時軍隊は十二箇軍團、三十六箇師、兵數五十萬と發表したが、それから五箇年の今日では、その常備軍だけでもその數が倍加してをり、ついこの間まで僅か十萬の軍備しかなかつた貧弱なドイツが、今日では世界の一流軍備國に躍進した。

斯樣にドイツは聯盟の脱退から僅かに一ヶ年半の間に、多少の失敗はあつたとしても、兎も角もザールの奪回と、再軍備實施とによつて、意氣揚々たる將來が約束された觀があつたが、然しその間には、さう言ふドイツの傍若無人を憤慨する諸列强の嫉視と、ドイツの勃興に脅威を感ずる諸小邦の恐怖心とによつて、ド

イツは世界の憎まれ者となつた。國際的には全然孤立の地位に立たされて、隨分酷い苦汁を嘗めさせられた。それはドイツ外交にとつては、いゝ試練であつたに違ひないが、その當時のヒットラアもその八方塞がりな闇の中に立つて、相當に惱み苦しんだものである。

何よりも一番あてにしてゐたイタリアが、ドルフス暗殺事件以來ソッポを向いて了つた。ソ聯はドイツの對ポーランド不可侵條約の締結と、同聯邦の提案にかかるバルト諸邦不可侵條約提議を、ドイツが贊成しなかつたことゝに依つて徹底的に反獨的となつて了つた。

フランスはと言へば、これはもうドイツの正面の敵だ。一九三四年二月、新たに佛國外相となつたバルトゥーは、東歐ロカルノ體制がドイツの反對に逢つて毀れたのを憤慨し、今度は本當にドイツを包圍する外交策を講じ始めた。彼は先づ同年九月、ソ聯を誘つて之れを聯盟に加入せしめ、その後英伊を誘つて反獨陣を

結成することに努力してゐたが、業半ばにしてマルセイユで非業の最期を遂げた。然るに彼の遺業を嗣いで立つたラヴァルは、三五年一月イタリアとローマ親善協約を結んで、イタリアにエチオピア攻略の默認を與へ、更に英國と防空援助條約を締結した。斯くてドイツが右に述べたやうに再軍備の爆彈宣言を行ふや、ラヴァルは時を移さず英伊を誘うてストレーザに會し、東方ロカルノを協議した上、オーストリアの獨立保障に關し、條約違反者の制裁方法を決議した。

從つて英佛の意を受けた聯盟は、四月十九日對獨經濟制裁案を可決し、ドイツをして重圍の裡に陷らしめた。尤もこの制裁案は形式だけで、實施の方法がなかつたのであるが、それよりもドイツの一番困つたのは、フランスが更に執拗にドイツを難關に立たせるため、同年五月二日、ソ聯との間に相互援助條約を締結して、東西よりドイツ挾擊の態勢をとり、更にソ聯とチェコスロヴァキア間にも、同樣の條約が成立したので、ドイツは文字通り四面楚歌の重圍の中に沈吟せざる

を得なくなつた。

五、ラインの進駐とロカルノの破棄

その苦境の中に鍛錬を經たドイツの外交も、そのうち相當に上手になつて來たのである。敵が一手を打てば、必ず之れが逆手を返すだけの素養が出來たことだ。

由來フリードリヒ大王やビスマルク時代はいざ知らず、それ以後のドイツの宣傳と外交術とは、拙劣の標本の如く一般から看做されてゐたものであるが、ナチスが政權を握つてから三四年を經つて後のヒットラアの外交は、極めて鮮かであつて、殆ど往く所可ならざるなき、成功振りを示すやうになつた。

國際的苦境と重圍の中に立つたヒットラアは、これが打開のため再び身を屈し、五月二十一日の國會に於て、驚く可く協調的な外交演說を行つた。世間ではそれ

がヒットラアの口先だけの平和論だと批評してゐると、一九三五年六月十八日には、一氣呵成の間に、英國と海軍協定を結んで、英國に大變な花を持たせた。この協定でドイツは對英三割五分の海軍力しか保有する意思のないことを、英國に向つて公約したのである。

ヒットラアはそれにより、歐洲の反獨武裝諸國に氣拔けの感を與へ、彼等相互の間に肚の探り合ひや、嫉視反目その他どんな作用が起るかを暫く靜視し、好機を摑んで之れを切崩さうと考へたのだ。同時にヴェルサイユ條約破棄に最後まで不承知の英國に對し、一〇對三・五の明かに英國に有利な海軍協定を押しつけ、有耶無耶の間に軍事條項破棄の合法性を、英國に認めさせようとしたのである。その狙つた的には見事に的中した。

佛伊は英國のこの態度を見て大に狼狽し、その裏切的行爲を難詰し始めたのみか、佛伊自體の間にも間隙が出來た。老獪なる英國もこの有樣を見て多少面目な

いと感じたものか、自分が完全にドイツの味方となつてゐるのではない、との證據を見せるためと、佛伊の仲を直させるために、ドイツの積極行動を抑へるとの口實によつて、東歐ロカルノ條約の締結を慫慂し始めた。その理由とする所は『ドイツの現狀打破的態度は、歐洲列强の等しく許すべからざる所である……歐洲列强は、嚴正なる現狀維持を必要とする』といふのである。

ヒットラアは北叟笑んだ。萬事が想ふ壺に嵌つて來たのだ。イタリアが現狀維持に滿足してゐないことは、ヒットラアのよく知つてゐる所である。『然り、イタリアをしてエチオピア攻略に向はせるやうにしよう！　さうすれば西歐は明かに現狀の維持と打破との二つの陣營に分裂する……』

一九三五年十月三日を以て、イタリアは愈々エチオピア戰爭に乘出した。この戰爭によつてストレーザ會議の盟友であつたイギリスは、イタリアの正面の敵であることが分つた。同時にイタリアに對し、暗默のうちにエチオピア攻略を諒解

してくれてゐるフランスが、案外煮え切らず、寧ろイギリスの味方であることが明瞭となつた。斯くしてイタリアは、折角擧國的決意を以て、植民地獲得戰に乘出したに拘らず、一切の盟邦から捨てられて、孤立の地位に立つてゐることを覺り得た。

『それ見たことか、言はぬ事ぢやない。現狀打破國が現狀維持國と手を握つて策動してゐたことが、始めから間違つてゐる……』と計りにヒットラアは、イタリアのエチオピア戰に對し、陰ながらの援助を送つて、ムッソリーニの成功を祈つた。その時ほどムッソリーニが、ヒットラアに感謝の心持を懷いた時はない。尠くともムッソリーニとしては、『ドイツは結局イタリアの唯一の友である。イタリアがドイツのオーストリア併合(アンシュルス)に反對したのは相濟まなかつた！』といふ氣にならざるを得なかつた。

歐洲列强はイタリアの横紙破りな行動に腹を立て、その緊張した神經を地中海

の南方に集中し始めた。北の方は全然お留守である。時分はよしとヒットラアは、一九三六年三月七日、ラインランドの進駐とロカルノ條約の破棄といふ殆ど劇的に近い爆彈宣言を斷行したのである。

新しい徵兵令によつて物々しく機械化されたナチスの若き武夫たちが、重砲牽引車と重戰車の爆音物凄く、堂々としてライン河橋を西に渡つた瞬間に、ヴェルサイユ條約の一切が墓場の中に葬り去られたのである！

六、日獨伊防共協定へ……

一九三六年七月を以て始まる悲慘極まるスペインの內亂は、歐洲政局のコンスタレーションを、益々明瞭なものとした。エチオピア攻略戰を契機として結ばれた獨伊の因緣は、この內亂によつて、スペイン國民革命軍のフランコ將軍を共同

で援助することゝなつた。

スペイン政府軍は、現狀維持を建前とする。國民革命軍は、勿論反共產主義的な現狀打破に向つて進む。然るに獨伊がその後者を援助し始めたのであるから、ソ聯は躍起となつて政府軍を援助し、英佛も亦ソ聯に倣つて政府軍に物的人的の聲援を與ふることゝなつた。斯の如くしてスペインの內亂を契機として、歐洲大陸は完全に現狀維持と現狀打破の兩陣營に分裂した。

と言つて現狀打破を國是とするドイツとイタリアとが、エチオピア戰、スペイン內亂の原因で、急激に堅い握手をしたのではない。單なる世界情勢的な事件をキツカケとして、示威的に行はるゝ急激な握手は、割合早く毀れやすいものだ。所詮は二つの國家が、その將來の共通した運命を見定めて、相手の立場をよく諒解し合ふ所に、本當の握手があり本當の提携がある。獨伊兩國が肝膽相照の間柄になつたのも、矢張りその正當な順序を踏んでゐる。

獨伊兩國の接近を具體的且つ意識的にしたものは、三六年七月十一日の獨墺政治協定であつた。これはムッソリーニ首相の斡旋に基いたもので、獨墺兩國は相互にその獨立を保障し、且つ經濟的親善關係に入らしむる協定であつたから、表面から見るとドイツにとつて、有難迷惑な束縛のやうに見えたが、實は中々さうでない。要するに今迄オーストリアに實權を握つてゐたイタリアが、全然同國から手を退いて、その覇權を全部ドイツに讓つてやつたことゝなる。それがために獨墺合併は、却つて可能となり、然もイタリアが合併後の獨墺の背後にあつて、之を援助する形で控へてゐると言ふ形勢となつたので、ドイツの國際的地位は、實に盤石の重味を加へた譯である。

そこで始めて視野の擴大された聰明なるヒットラアの眼光は、東方の曠野に向けられた。そこには共產主義のメッカたる、赤都のモスコウがある。このモスコウの指令によつて、十數年間ドイツ民族の魂は蝕まれた。新たなる友邦のイタリ

ア民族も亦、その有毒思想に反撥心を起して、ファッシズムを樹立した。然もその共産主義者は『ヤヌスの面』の如く、コンミンテルンとソ聯外交なる表裏二元の面を持ち、政治思想戰と武力戰との使ひ分けをして、或はドイツの東疆背後を威嚇し、或は自らの敵たる自由主義國及び聯盟と結んで、世界の外交界からドイツを放逐せんとし、或はその魔手を遠くスペインの內亂にまで延ばして、人民戰線思想の普及に力め、世界の民族的覺醒に更生せんとする國家の扼殺を謀つてゐる……

斯くして一九三六年九月、ニュルンベルグのナチス黨大會に於て、ヒットラアは全世界に向つて、平時の國際關係では殆ど見られないやうな痛烈な惡罵を以て、ソ聯攻擊の大演說を敢てした。ソ聯は新しく立つた民族覺醒の諸國より成る十字軍を以て粉碎されざるべからず、といふのが彼の主旨だ。然らばこのソ聯を粉碎するに足りる威力——卽ち武裝力に於ても、精神力に於ても、共に優秀なる實力

――を持つた國家はどこにゐるか？　ドイツは自ら起つであらう。而してこれに呼應して立ち得る國は……極東の島帝國日本あるのみ！　然り、ソ聯は世界二大雄國たるドイツと日本との東西挾撃により、北氷洋の極北へ追放して了はなければならぬ！

斯くの如くして出來上つたものが、一九三六年十一月二十五日に成立した日獨防共協定なのである。この協定は約一箇年の後、イタリアを加へて、日獨伊防共協定の形式となつた。勿論これはまだ、軍事協定的な性質を持つたものではなく、純然たるコンミンテルン排撃の國際倫理的文化的な取極めであり、然もその後それが本當の三國同盟の形式を執るに至るまでは、三箇年半の迂廻と難航（なんかう）とを續けたものであるが、然し尠くともこの防共協定によつて、ドイツの西歐に於ける復興戰は、一躍世界政策の舞臺面に上り、同時に單に『極東を護る』點に國是の基調を堅持してゐたわが日本帝國も亦、現狀打破の一面を通して、世界政策に魂の

使命を感ずることゝなつたのである。

七、ベルリン＝ローマ樞軸

日獨防共協定に、イタリアが參加するまでの間には、多少の波瀾曲折はあつた。何しろ日獨防共協定は、文化協定であるとは言ひ條、ソ聯にとつては餘りにも相手が惡い。文化協定であるなどとジワリ〳〵と締め付けられゝば締め付けられる程薄氣味が惡く、その東西からの二大强國の挾擊を避けるためには、益々英佛に依存せざるを得なくなつた。何よりイタリアを、ドイツ側から引離すに限る……

さう言ふ關係で一九三七年の冒頭に於て、ソ聯大使マイスキーの耳打ちによつて頷いた英國は、片手に黄金の音をガチャ付かせながら、辭を低うしてイタリアと、地中海現狀維持の協定を取極めてしまつた。イタリアはそれによつてドイツ

を離れ、或はイギリスと接近するのではないか、とさへ思はれたのである。それはイタリアがスペイン革命軍を助けて意の如くならず、一方軍備擴張とエチオピア戰の傷痍とで、財政的にも不如意となつてゐた爲め、暫時の息つきを必要とした結果であらう。

その邊の消息を察したヒットラアは、誰れにも賴まれもしないのに、義勇軍と稱する正規兵の多數をスペインに送り、又袖珍戰鬪艦を地中海に游弋せしめて、スペイン革命軍に參加せるイタリア軍を鼓舞勇躍せしめ、同時にソ聯のスペイン政府軍に對する、軍需輸送船を威嚇する態度を示した。然も五月三日には、外相ノイラートをムッソリーニの許に送り、

「今イタリアが中途半端で疲れてはいけない……イタリアの運命はドイツの運命である……今後獨伊は不干涉委員會に於て協同の動作をとり、相手に通告しない單獨外交は決してやらぬこと……われ等の共同の敵は、ソ聯と英國とフランスと

である……われ等は車の兩輪を結ぶ樞軸の如き聯絡を持つ必要があるだらう！』

と說かしめて、遂にムッソリーニの感激的贊成を得、茲にベルリン＝ローマ樞軸なる世界政局內に鐵鎖が出來上つた。それが一方の日獨防共協定と一脈の關係を以て、兩々相對しつゝ、世界に於ける現狀打破國家群を、總括的に吸引するマグネットの役割を果すことゝなつた。

スペイン內亂を契機とするベルリン＝ローマの樞軸と、日獨防共協定との威力は全體主義（現狀打破主義）國家を敵視する民主主義（現狀維持主義）國家の足並みを酷く亂した。彼等の間には、相互に相互の肚の中を探るやうな利己的な自分を擁護する算段と、自分はなるべく勞せずして、他の友邦に火中の栗を拾はせぬやうな責任轉嫁とにのみ汲々としてゐる。ベルリン＝ローマの樞軸が出來て以來、之れに對抗するために、ロンドン＝パリ樞軸、パリ＝モスコウ樞軸などゝ呼ぶ新聞紙の報道を賑はせるやうな關係の下に、政治家の往來と文書の交換とは頻繁に

行はれたが、彼等の間にはハッキリした共同の目標と言ふものがなかつた。又これに携はつた英佛の諸政治家の如きも、一方油の乘つたヒットラアやムッソリーニ、其他ナチスやファッショの諸外交官たちに較べると、まるで見劣りがして、第三流以下の人物のやうな氣がした。相手に虛を衝かれると腰を拔かすか、無爲にして沈默を守るかの孰れかであり、鋼鐵の意思を以つて決然たる態度を執り得るやうな人物が、情ないかな一人も居なかつた。それは前の歐洲大戰に勝つた所謂『聯合國』側のデカダンを示す以外の何物でもない。

八、チェコスロヴァキアの死

敵の虛を衝くことの妙味を感得したヒットラアは、一九三八年三月十一日、不意にオーストリア政府に對し最後の通牒を發して獨墺の合併を要求し、シュシュ

ニッグ墺首相が之れを拒絶するや否や、大軍を發して怒濤の如くウィーンに進駐せしめた。シュシュニッグ政府は否應なしに潰れて了つた。すると四月十日には人民投票を行つて、合併が人民の壓倒的な意思であることを中外に宣言した。それでドイツ民族統合の巨歩は踏み出されたのである。

獨墺合併は大ドイツ國實現の重要なる部分であり、ナチス政權獲得以前からの、兩國の切實な願望でもあつたのだ。否オーストリアはドイツ民族の母國であり、同時にヒットラア總統の故國でもある。從つてこれをドイツ國から分離獨立させておくだけの歴史的理由と、ヴェルサイユ條約の保障とがなくなつた瞬間に於ては、到底阻止することの出來ない趨勢であつたことを理解しなければならぬ。

オーストリアの併合は、當然チェコスロヴァキアといふ無理に捏ち上げられたヴェルサイユ條約の人造國家の崩壞を、豫想しない譯に往かぬ。

それは單に獨墺合併によりて、チェコ自體がドイツ民族から環狀に包圍される

有様となつたので、其の存在が不便且つ無意味になつたと言ふばかりではない。寧ろ積極的にドイツ側の生死の問題として、その存在が一日も許されぬことゝなつたのだ。なぜならば地理的にその頭をドイツの心臓部に突込んだチェコの地位は、その同盟國たるソ聯の空軍の基地となり、又聯合國のドイツ侵入にとりて、一番都合よき場所に變じて來たからである。然もその國内には、純然たるドイツ民族たるズデーテン人が、國際ユダヤ化したチェコスロヴァキアの人民戰線的政府から、酷く虐待を受け始めたのである。

そこでヒットラアは、ズデーテン人たるヘンラインによつて代表さるゝナチス黨員に指令を發し、ズデーテン地方のドイツ國への合併を謀らしめ、之れに反抗せんとするチェコ政府の機先を制して、一九三八年九月、ズデーテン全部の地域の割讓を要求した。

それはオーストリアの併合以來、まだ間もないことであつた丈けに、英佛側と

しても實に呆氣にとられたのである。時は恰も英佛雙方の間に意思の疏通が不充分であり、然もフランス自身は人民戰線問題を中心として、國内で盛んに相剋が行はれてゐた場合であるから、ヒットラアは巧みにその機會を捉へたものゝ如くである。

そこで英國首相チェンバレンは、兎も角もヒットラアの『餘りにも積極行動』を遠慮させるがため、二回に亙つて單身ドイツにやつて來たが、ヒットラアの決意を動かすことの不可能なるを覺つた。第二回目にドイツのゴーデスブルグに於て、ヒットラア總統と會見した時は、英獨の意見が正面から衝突して、大體平和が決裂するかの如き狀勢を示した。そこでムッソリーニ伊首相がその間にはひつて、調停的役割を引受け、その結果同年九月に、英（チェンバレン）佛（ダラディエ）、伊（ムッソリーニ）獨（ヒットラア）の四首腦者はミュンヘンに會合し、歐洲の暫定平和方式を協議した。斯くしてズデーテン地方は正式にドイツの主權内

に編入さるゝことが確認され、チェコスロヴァキアはその領土が削られたまゝ、犠牲となつて泣寝入りの形に放置されざるを得なくなつた。

然しチェコスロヴァキアとしても、ズデーテンをドイツに引渡した以上、もう當分はナチス・ドイツの『積極的進出』がないものと信じてゐたであらう。なぜならミュンヘン會議の決議は、英佛がドイツに對し許容し得る最後の限界を示したものである。だから一般には、若しドイツがその限界を超えて、チェコ自身に手入れをするやうなことがあれば、英國が默つてゐないのみか、今度は軍事同盟の相手方たるソ聯とフランスとが、東西からドイツを挾撃してくれるだらうと、極く淺薄に考へてゐた。從つてズデーテンをドイツに引渡した後のチェコには、到る所に反ナチス的の空氣が漲り渡つた。

だがヒットラアは既にミュンヘン會議の空氣から推して、聯合國側の歩調が全然揃つてゐないこと、チェンバレンの鎮撫政策の背後には、實力を以てドイツに

當らうといふ決心のついてゐないこと、又ドイツの側にはムッソリーニといふ有力な聲援者の居ることを確信してゐたものだから、辛うじて生き殘つたチェコスロヴァキアの思ひ上つた反ナチス的態度を、そのまゝ放置して見てゐる筈がなかつた。

ミュンヘン會談が終つて約半歲の後、ヒットラア總統は、チェコスロヴァキア共和國内に自治を許されたスロヴァキアの中に、ナチス的傾向ある政黨を結成せしめ、その勢力を扶けてスロヴァキアを獨立させる計略をたてた。その情勢を見てとつたチェコスロヴァキアの大統領ハーハも、遂に萬事は休すと見て取つた。スロヴァキアにナチス化され、然もそれがドイツの御用を勤めるやうになつては、チェコだけ孤立してやつて行かれる筈がない。然も周圍の形勢から判斷するに、英、佛、ソ聯の何れも、一切の責任をとつて、チェコのためにドイツを押へ付けようとの、冒險を敢てしさうにも見えないのである。

斯くしてハーハ大統領は、三月十五日ヒットラア總統と會見し、チェコスロヴァキア共和國一切の處置を、ヒットラア總統に委せた。そこで同日ドイツ軍は、チェコの領内へ喊聲を擧げて進駐し、其の結果ボヘミア、モラヴィアはドイツの保護州となり、スロヴァキアは自治を許された保護國、ルテニアはハンガリー領と言ふ工合に、一瞬の間に之れを分割し整理して了つた。要するにヴェルサイユ條約の副産物として、聯合國によつてドイツ民族復興阻止のために創立されたチェコスロヴァキア共和國は、二十一歳齡をまだ畢らぬうちに、この地上から冷たく死滅したのである。

九、獨蘇不可侵條約

ヒットラアは息をもつかなかつた。オーストリアからズデーテンに、ズデーテ

ンからチェコにとまで進んで、恢復すべき殘る失地は、たゞリトアニアに併合されてゐるメーメル地方と、ポーランド領となつてゐるダンチヒ（形式上は獨立地域）及び廻廊地帶とである。

チェコ全體の無血併合が完成した後、まだ一週間も經たないうちに、ドイツ政府は『メーメル地方のドイツ人が、同地方のドイツ本國への復歸を、自發的に希望して來てゐるから、これは棄てゝ置けない』といふ發表をしたと同時に、これ又メーメルの主權國たる弱小のリトアニア共和國などには四の五の言はせず、そのまゝ大ドイツ國の圏内へ編入してしまつた。

そして一方ドイツ政府は又、大ドイツ國のヒンタアランドを確保するため、ルーマニアと有利な經濟協定を締結し、軍事上の特權を獲得しておいた上、今度はポーランドに向き直つて、先づダンチヒの返還と、それから東プロシアの離れ地とドイツ本國とを結ぶ鐵道の建設權とを要求したのである。

それまで英佛側は殆ど呆然自失したまゝ、たゞ口を開いて見てゐるばかりであつた。それに對して實力を行使しようにも、そんな隙もなければ考へる餘裕もないのだ。然しその火の手が今やポーランドにまで擧つてくると、さすがのチェンバレンも肚に据ゑ兼ねたと見えて、漸くドイツの歐洲制覇を阻止するため、本氣になつて對獨包圍陣を結成する決意の臍を固めた。

即ち英佛兩國は、即時ポーランドと相互援助の軍事同盟を結び、遠くギリシア、ルーマニアに對する獨立の保障を確約し、更にトルコと、これ亦相互援助の諒解を遂げ、最後にソ聯に對し、反獨軍事同盟の締結を交渉し始めた。

これに對抗するため獨伊兩國は、一九三九年五月に、本格的な攻守軍事同盟を締結し、また更に日獨伊樞軸の强化を計つて、英佛ソの共同戰線結成を阻止する工作を續けたのである。その間英ソの對獨政策に關する交渉は、數箇月にわたつても、中々意見が一致しなかつた。英國はソ聯が共產黨の敵なるファッショの國

家群を敵として戰つてくれるなら、資材でも兵器でも金でも、擧げてソ聯を援助しようとの申出であつたのに對し、ソ聯は英佛のために對獨戰爭に捲込まれるよりも、寧ろドイツの東に向ふ鋒先を西に向けさせて、英佛と直接に戰爭をさせた方が、身の安全だと考へたからである。

なぜかと言ふと英佛ソが、獨伊と戰爭を始めたなら、一番犧牲が多くて手痛き目に逢はされるのはソ聯である。戰爭が始まると共に、英國は海軍を以て海上封鎖を斷行し、ドイツを食糧攻めにするだらうから、ドイツは死物狂ひになつて、東の方ソ聯の中へ殺到してくるだらう。即ち西部戰線に於けるフランス陸軍はイタリアに任せ置き、又フランスのドイツ國内への侵入は、之を新しく築構したジーグフリード線で堰き止め得るだらうから、ドイツ軍は西の方へ僅かの守備を置いたまゝ、一切の精英を集中して、ウクライナ穀倉地の攻略を敢行するに違ひない。さうすると歐洲大戰の血腥い戰亂の巷は、ソ聯領土内に展開されることにな

る。加之、東の方から、日本が侵出して來るやうなことがあつたら、ソ聯は一溜りもなく資本主義侵略戰の血祭りに上げらるゝことゝなる……

さう言ふ見解からクレムリンに於けるスターリンは、一方英佛側と同盟締結の折衝を續けながら、知らぬ顏でソッと左手をさし伸べて、今迄不俱戴天の敵であつた筈のナチス・ドイツにウィンクした。その時はもうヒットラア總統と雖も絕體絕命の瞬間である。若しもそのウィンクを拒絕すれば、ソ聯はそのまゝ英佛と聯合し、東西からドイツを挾擊するであらう。その情勢は、全然前の歐洲大戰を髣髴させるものがある。若しもそれでも構はず交戰狀態に入れば、自分の味方にはイタリアがゐるかも知れぬ。然しイタリアがドイツの味方となつてくれるのは有難いが、イタリアは資源の貧弱な國家で、國內には工業原料も石油も何一つ持つてゐない。さう言ふ狀態でイタリアが參戰すれば、その戰線の擴大により、ドイツは却つて餘計な兵力と資材とを割いて、イタリアを助けなければならぬであ

らう。日本はどうしてくれるか？　日本は支那事變に深入りして身動きもならぬことになつてゐるし、從つてその平沼内閣は、ドイツと軍事同盟を締結することに關し、七十何回の閣議ばかり開きながら、眞に去就を決し兼ねてゐる次第で、之れこそ本當にあてにならぬ……

と考へあぐんだ結果のドイツ政府は、よしッ、愈々英佛を敵に廻しての戰爭だ！それには背に腹は替へられぬ……ソ聯の穀物と石油との確保によつて、罷り違へばバリを屠り、ロンドンを灰燼にしよう、と最後の肚をきめてしまつた。

その結果が一九三九年八月二十三日の獨ソ不可侵略條約となつて現はれた。

これに依つて世界政局の均衡はグラ〳〵と傾いた。今度はイタリアが呆氣にとられたのだ。勿論モスコウに於ける英佛ソ軍事同盟の交渉など、その一瞬時にフッ飛んでしまつた。傍杖を喰つたわが平沼内閣も『これは複雜怪奇の至り……』と、腕拱いて考へ込みながら、崩壞してしまつたのである。

然しこれは複雜でも怪奇でもない。情勢はたゞ極めて單純で明瞭な、一本の筋道へ突進んだのだ。曰く、戰爭！

一〇、ポーランド殲滅戰

その時獨波兩國間の關係は、極端に惡化してゐたのである。

前にも述べた通り、ドイツはメーメル地方を併合したと同時に、矢繼早やにポーランドに對し、ダンチヒの返還及び廻廊內へ鐵道を布設する權利を要求したのであるが、ポーランドは斷然之れを拒絕した。それはイギリスがポーランドに對し、若しもドイツが要求貫徹のため武力を行使するやうなことがあれば、英國は斷然ドイツ膺懲の戰爭を宣言し、ポーランドを援けてやる、との約束になつてゐたものだから、ポーランドの鼻先も豫想以上に荒かつた譯だ。

そこでポーランドとドイツとの、武力的衝突は不可避となつた。所謂ヒットラア總統の無血外交もポーランドまでの成功であり、それ以上は孫子に所謂『善の善なるもの』の方針が、適用されなくなつたのだ。そこでドイツにとりては、獨波不可侵條約に基く武力回避の約束など、ドイツの『生死の闘ひ』の前に、もう三文の價値もない。なぜならポーランドがドイツの要求を一蹴したのに怖れをなし、そのまゝ沈默して了ふ場合は、ドイツをして英佛と抗爭せしむるために、ドイツの後楯となつた筈のソ聯を失望させ、今度は本當の對獨包圍陣が、大變な勢ひを以て再び結成されるであらう。今のところではチェンバレンは、まだ表面に強いことを言つてゐるが、心の中ではなほ依然として、出來るだけの戰爭回避策を考へてゐる。そして今といふ今の瞬間なら、また英佛兩國の再軍備體制も、ドイツに較べて遙かに未完成狀態である。從つてドイツがポーランドに進擊したのを理由で、假令英佛がいや〳〵ながら起ち上つたとした所で、すぐドイツの背後

に決定戰を豫想するやうな大戰爭は起り得まい。それにドイツのカイテル將軍によつて計畫されてゐる電擊作戰を以てすれば、ポーランドがいくら威張つて見たところで、一箇月もすれば全面的な壞滅狀態となるにきまつてゐる。だから戰ふなら、時は今だ……

所が他の一方ポーランドの方は、さうは考へてゐなかつた。假令ドイツがいくら豪いことを言つても、英國により飢餓封鎖を斷行される場合、ドイツは一溜りもなく參つて了ふだらう。ポーランドとしてはその邊の消息を、ドイツの東方の勝手口の裏から、常に觀察してゐるので、他の國よりも一番よく知つてゐる。だからポーランドの武力が假りに不充分であるとしても、半年間以上ドイツ軍の進擊を喰止めてゐさへすれば、英佛は屹度ドイツの心臟部たるラインランドを占領し、北海の海岸を封鎖してくれるだらう。その機に乘じポーランドが最後の反擊を加ふる限り、形勢は玆に逆轉し、寧ろ今度はこつちからベルリン進擊に轉ずる

ことが出來るだらう。その場合ナチス・ドイツは全面的の崩壞だ。そして新しいヴェルサイユ條約が出來て、東プロシアとブランデンブルクの全部が、大ポーランド國の版圖の中へ轉がつてくる……

『だつて英佛は本當に救けてくれるでせうか？　チェコスロヴァキアの場合などは、洵に不吉な例ぢやないですか？』――不安な顏をしたあるポーセン市の一新聞記者がさう訊いてみた。

『冗談ぢやない。チェコとポーランドとは事態が異ふ。チェコを救けようと公約してゐたのは、フランスとソ聯とだつた。孰れもまさかの場合には、本當にドイツと戰ふだけの意思がなかつたものだから、あの通りの見殺しになつたのさ。然しわが國に對しては、イギリスが保障してゐる。滅多なことには物に動ぜず、又今迄は戰爭回避に汲々としてゐたチェンバレンが、今度は本腰を据ゑてドイツを膺懲するのだ！』――と參謀總長のルッツ・スミグリ元帥は悠揚として答へた。

だが九月一日になつて、最後通牒の期限が切れ、ドイツの機械化大部隊と、天を覆ふ銀翼の空軍とは、折重なつてプロシア及びシレジアの國境を東に越えた。するとドイツ側の豫想は測定器で計つたやうに的中し、ポーランド側の豫想は淡き夢の如く頼りないものであつた。

アッと言ふ間に、全ポーランドの航空基地が叩き毀された。各戰線の聯絡は旬日を出でざるに、完全に斷絶させられた。クロトッシンの役——グラウデンツの役——オストロレンカの役。孰れもポーランド側の慘めな敗戰だ。ナチスの若者たちは鉤十字の鐵兜の顎紐をギッと締めて、重機砲の火を吐く戰車の、物凄い鋼鐵の波を漲らせながら、息をもつかず殺到してくる。ポーランドの主軍は忽ちクートノの曠野に於て、嘗て帝政ロシア軍がタンネンベルグに鏖殺されたよりも、もつと物凄い『螺旋狀大包圍陣』の渦卷の中へ吸ひ寄せられ、呆然として開いた口が閉がらぬうちに、みじめにも捕虜となつて了つた。もうさうなると政府も參

謀本部も、首府ワルシャワを放つて置いて、東ポーランドの沼澤地方か、それともソ聯の國境内へ遁げ込むより外に途はなくなつた。

するとドイツ軍が餘りにも急激に東侵してくるのを氣に病んだソ聯の、ポロック及びミンスクの機械化軍隊は、誰れに挨拶もしないで、ポーランドの東疆一帶へ闖入し、勝手にその邊の村落や町々を占領して、一々赤旗を立てゝ廻り始めた。

ポーランドは總崩れである。僅かに十八日間にして首府ワルシャワが陷落し、一箇月にして二十二箇年間の獨立を保つたポーランド共和國が、この地上から姿を消した。その間九月二十二日には、獨ソ兩軍はブレストリトウスクに交驩し、分割協定を作つて、みる〳〵うちに全ポーランドを兩國で分け取りしてしまつた！

一一、宣戰された平和

ドイツの對ポーランド戰の開始と時を同じくして、卽ち九月一日を以て、英佛はさすがにドイツに向つて、宣戰布告を敢行した。それと共に愈々第二次歐洲大戰は勃發したことゝなる。從つてポーランドの悲劇戰は正式の意味に於ける歐洲大戰の第一幕を旣に構成してゐた譯だ。

然るに英佛は宣戰だけは布告したものゝ、肝腎のポーランドへは、軍事的に何等の援助をも送らなかつた。ポーランドのルッツ・スミグリ元帥や首相ベックは、餘りにも賴りない西歐政治家の口先を過信したのだ。彼等は『そんな筈ぢやなかつたが……』と、ルーマニアへ遁げ込んで臍を嚙みながら憤慨してみたが、もう後の祭りで何にもならぬ。その時はもう國が無いのだ！

或は英佛としても、折角約束通り宣戰を布告したのであるから、ポーランドの苦しむのを見ては、助けてやりたいのは山々であつたが、策戰上之れを助ける方法がなかつたのかも知れぬ。それとも助けようと用意してゐるうち、ドイツの行

動が餘りにも電光石火の如く速かつたので、手出しをする暇がなかつたのかも知れぬ。

孰れにしてもポーランド戰を完全に勝ち畢つたヒットラア總統は、これで一段落ついたと見きはめたものだから、十月の始め英佛兩國に對して、和平を提唱したのである。

和平の理由は他でもない。

ポーランド戰によつてドイツ民族生活圏は確保された……あとはたゞ植民地の問題が殘つてゐるのみだ……英佛は自分の生命線でもない餘計な東歐や中歐の問題に口を出すことをやめて、歐洲全體の幸福と共榮のために、ドイツと協力してはどうか……それならドイツとしても、これから更に積極的に賣喧嘩を買つて、無辜の若い人間の血は流したくないのだが……といふのだ。

英佛は勿論之れを拒絶した。そんなことをすればドイツの歐洲制覇を認める譯

である。『ヒットラア主義がこの地上から拂拭されない限り、和平交渉は問題にならぬ！』――といふのがその理由であつた。

だからと言つて英佛は、別にドイツを積極的に攻撃するのでもない。直接にドイツ侵出を企てるのでもない。侵出しようにもドイツの北海海岸の警備は嚴重であり、又西部戰線のジーグフリード堡壘線は難攻不落であつて、此方から攻勢に出る方法がないのだ。

それぢやドイツ軍が、逆に西侵して來やしないだらうか？　否そんなことは全然考へられぬ。獨佛國境の西に築いたマジノ要塞線の突破は、人間業では到底不可能だ。その僅かな一據點だけを切り崩すだけでも、百萬のドイツ兵が三箇月かかつて五十萬の血潮を犧牲にしても、突破が出來るか出來ないか分らない程度の堅牢さである。マジノ線がそこに控へてゐる限り、ロンドンやパリの生活は、平常と變る必要がない。それよりもドイツの一番厭がる長期戰に喰ひ下り、海上封

鎖によりてドイツの女や子供を渇し殺すに限る……さうすればドイツは第一次歐洲大戰の例に從つて、否、あれよりもずつと早く國内の擾亂から、兜を脱いで陣門に降ることだらう……

といふ割合呑氣な、且つ神經の鈍い考へ方で、英佛の爲政者は所謂『宣戰された平和』を持續する態度で居た。だがその間にドイツは、暫くもヂッとしてゐなかつた。着々として對英佛の決戰を準備し、同時に英國封鎖に對しては、ソ聯とのポーランド分割協定に續いて、獨ソ經濟協力の取極めを行ひ、海上封鎖をしてまるで袋の底の破れたやうな封鎖狀態として了つた。それと共にソ聯がバルト諸邦への工作又はフィンランド戰に乘出した場合には、英米佛がソ聯の行動を痛く非難したのとは反對に、寧ろソ聯の成功を祈り、或はこれに援助を送つたことさへある。ソ聯がフィンランド攻擊戰に案外手間どり、思ふやうに成功しないのを見てとるや、ドイツは一九四〇年の二月に、數多の技師と參謀の將校とをソ聯に

送つてやり、難攻不落を以て有名だつたフィンランドのウィボルグ要塞の突擊を助けさせた。このドイツ側の協力によつて、ウィボルグ要塞は僅かに數日にして陷落した。元來ウィボルグ要塞は、ベルギーのレオポルト線やフランスのマジノ線の要塞と同性質のものだつたので、ドイツとしても將來レオポルト線やマジノ線を突破するためには、ウィボルグ要塞の構造や堅牢さを、よく研究して置きたかつたのであらう。然るにこの種の要塞は、ドイツ軍にとりて難攻不落ではないといふことがよく分つたので、ドイツ側にとりては非常に得る所が多かつた。それと共に一箇年もかゝつて陷落させることの出來なかつたものを、ドイツ軍との協力で、忽ち破壞し得たソ聯側も、まるで助かつたとでも言ふやうに、その元氣を以て、自國に有利なる對フィンランド平和條約を結ぶことが出來た。

ソ聯に恩を賣つたドイツは、又一方のイタリアとも、友情を更新しておく必要を感じたので、一九四〇年三月、ヒットラア總統はムッソリーニ首相とブレンネ

ル會議を行つて、イタリアの絶對的支持を得ることゝなつた。

イタリアの絶對的支持といふのは、ソ聯のそれと同時に、當分好意的中立を保つてゐて貰ふことであつた。ヒットラアは寧ろイタリアの即時參戰を希望しなかつた。何故なら、若しもイタリアがドイツ側に立つて、時期尚早の參戰をすれば、『宣戰された平和』の對峙狀態は忽ち崩れ、フランスの陸軍はドイツを放つて置いて、全部イタリア攻擊に集中し、イギリスの海軍も忽ち地中海を中心として、イタリアを苦しめることゝなるだらう。さうするとドイツはその擴大された戰線のために、餘程有力な援兵をイタリアに送つて、之れを助けなければならぬことゝなる。

それはドイツにとりて寧ろ不利益だ。寧ろドイツは英佛の軍事的勢力を、その本國へ釘付けにしておいて、ドイツ丈けの獨力で以て、各個にその脊椎を粉碎し、その虛に乘じて始めてイタリアに起つて貰ふなら、獨伊共にそれ〴〵の戰勝を博

することが出來る……と言ふやうな取極めをしたのが、そのブレンネル會談の內容であつた。

だからドイツ側の決心は、誰の力をも藉らず、先づ自分だけの獨力で以て、或る程度まで英佛の主腦軍を叩き伏せて了はう、といふ建前になつてゐたのである。

一二、北歐の電擊戰

ブレンネル會談のあつた翌月、卽ち一九四〇年四月九日、ドイツはイギリスが突然中立國ノルウェー海岸を封鎖した事實を探知し——とドイツ側では主張してゐるが——好機來れりとばかりに、先づ一氣呵成にデンマークを席捲しノルウェー海岸の各要港を押へてしまつた。それと共に四月十六日には、ノルウェー全土占領のために、英國の封鎖を突破し、飛行機と輸送船とを以てカテガット海峽を

押通り、意外な大軍をオスローに進駐させた。それで一應『宣戰なき平和』の平靜は破られたのである。

このノルウェー爭奪戰も亦、ドイツ流の電擊戰の代表的なものであつた。南方からはノルウェー軍の抵抗を排除しながら、グブランズダールの峽河を溯上し、中部ノルウェーのトロントハイムに上陸させた占領軍との聯絡を保たせ、一方ナムソスに上陸した英佛軍を、ステンキェール其他の隘路に粉碎して、その南下を不可能ならしめ、且つ北ノルウェーのナルヴィックを占領したドイツ軍は、寡兵よく英國海軍の攻擊に堪へて、其の地を死守し通した。從つてノルウェー軍及び英佛救援軍は戰ふ毎に敗戰の憂目を見たものだから、英佛側もノルウェー救援の無意味なるを覺り、遂に同地の海岸を捨てゝ、全部本國に引上げざるを得なかつた。それでドイツの勢力圈は更にデンマーク、ノルウェー全土に擴大された譯である。

斯樣な北歐地域の爭奪について、ドイツとしては(一)スエーデン鐵鑛を確保し、

(二)スカンヂナヴィア諸國の英國に對する貿易依存を、ドイツ側へ振り向け、(三)來るべき英國本土攻擊に際しての空軍基地を獲得することの目的を持つてゐた。而してその目的の孰れもが、極めて短日月のうちに達成されたのだ。

この樣に英獨のノルウェー爭奪戰は、虛實の外交戰を交へて、ドイツの絕對的な優勢裡に進行したが、舞臺はやがて北歐を離れ、世界の視線はその後暫らくバルカン地方に集中された。卽ちバルカンの外交的爭覇戰が俄かに活氣を帶び、同時に戰雲が地中海に漲つて來たのである。大體武力戰では英佛側の、意外に弱いことが實證せられ、反對にドイツ側は、前のポーランド戰と言ひ又ノルウェー電擊戰の樣子と言ひ、明かに强いことが明瞭となつてきたが、さて、然らば複雜微妙なバルカン及び地中海を繞る外交戰に於て、英佛とドイツとは一體どつちに步があるであらうか?

戰爭を一ト先づ外交戰の形にして、その舞臺をバルカンへ持つてきた創意者は

イギリスである。イギリスはこれによつて、(一)對獨海上封鎖の效力を更に確實にし、今ドイツの後背地(ヒンタ・ランド)となつてゐるバルカンのドイツ的に息のかゝつた經濟を攪亂(かくらん)させること、(二)バルカン諸國が强國の板挾みになつてゐるのに乘じ、更にその中へイタリア及びソ聯を政治的經濟的に進出せしめ、それによつて獨、伊、ソの相互の仲を疎隔させること、(三)ドイツがバルカン諸邦を自國陣營に引入れるために武力を用ふるやうな形勢を作り、海軍力尠きドイツの戰線を、スカンヂナヴィアと地中海方面とに擴大し、それによつてドイツを奔命に疲らせること、(四)從つて當分ドイツが西部戰線に勢力を集中する暇なからしむること、等の目論見を持つてゐたものである。

一三、コンピエーニュからコンピエーニュへ!

然るにドイツはその手には乗らなかつた。

一方英佛がバルカンを搔き亂し、ルーマニアやトルコやギリシアに反獨的氣分を煽つて、戰線を東南に擴大させ、自分は祕かにベルギーとオランダを籠絡して、ベルリン空襲の航空基地を作りさうな心構へでゐるのを探知したものだから、それをそのまゝ放任して置く譯に往かなかつた。時恰もロンドンではチェンバレン首相に對する不信任の空氣が漲り、パリでもガムラン將軍とウェイガン將軍との間が旨く往つてゐない有樣が見えたものだから、ドイツはこの時だとばかり、いきなりオランダとベルギーの國境を突破して、三軍を西に進擊させた。

時恰も五月十日。歐洲大戰は愈々決定的な、そして本格的な爭鬪の形相を現はして來たのである。

この戰況に關してはまだ事件が生々しい丈けに、讀者諸君もなほ記憶の新しいものがあるであらう、餘り細かい說明を加ふるまでもない。要するにドイツの第

一軍は、先づ一擧にしてオランダ全土を蹂躙した。その豫期された洪水戰術の阻止などは何のその、精英なる飛行機と機械化部隊とを以て、先づオランダの航空基地を抑へ、オランダ軍とベルギー軍との聯絡を不可能としておいて、一部はフリースランドを南下し、一部はライン河を下流に下つて行つた。オランダ軍は手も足も出なかつたのである。ウィルヘルミナ女王は英國に蒙塵し、降伏を肯じなかつたロッテルダム市は廢址同然に叩き毀された。元首を失つたオランダ軍は、英佛側の何等の救援をも受くる能はずして、遂に獨軍に降伏して了つた。

隣接のベルギーとても同樣の運命を辿らざるを得なかつた。

何しろ獨軍はオランダ、ベルギー、フランス、イギリスと、聯合軍に聯合の態勢をとらせないで、その各自を孤立させながら、一々を虱潰しに殲滅させる策戰をとつてゐたものだから、六十萬を擁するドイツ第二軍の精鋭が、マースリヒトの鐵橋を押渡ると、その一部はハッセルの要塞を血祭に上げて西進し、アルベー

ル運河に沿うてブリュッセル及びアントワープを包圍する態勢をとり、他の一部はナミュール河に沿うてマジノ要塞の始點に突擊した。斯くしてベルギーの大半が占領された頃、アルベール國王は到底この防禦戰に勝味のないこと　無益の抵抗はロッテルダムの悲劇を國内の隨所に作るだけの結果に畢ること、更に救援に來た筈の英佛兩軍が、たゞ自己の安心に遁げられる地方へのみ偏在し、一番犧牲の多い第一線にベルギー軍を立たせようと策動してゐる事情を洞察し、遂に決心をきめて獨軍の陣門に降つてしまつた。

そのうち獨軍第一軍と、ミューズ河を南下した第二軍の一部とは、一擧にしてバリを衝くと見せかけておいて、急に方向を西北に轉じフランス軍の抵抗を排除しつゝ、ソンム河を下流へ下流へと下つていつた。それと共にこの本隊と、フリッセル、アントワープを屠つた第二軍の別働隊とは、アルトアとフランダースの海岸平野に於て聯絡をとり、ポーランド戰に於けるクートノの鏖殺戰に酷似した

驚くべく尨大な包圍陣形で以て、その中にゐる英佛の大軍をまるで袋の鼠の如く追ひ込んでしまつた。然も刻一刻とその圓周をだん〳〵縮めて、到る所で巧妙無類な捕捉殲滅の工作にかゝつたのである。そこで佛軍の一部は、命から〴〵ルーベーの圍(かこ)みを脱れて本國に逃げ延び、他の一部は英國救援軍十五萬と共に、武器を捨て戰車を捨て、極めて慘めな敗殘の姿で、大陸からイギリスの本土へ、命から〴〵飛び込んだ。要するに英佛聯合軍はフランダースの殲滅戰で決定的に叩きのめされたのである！

これによつて佛軍の意氣は全く阻喪した。最早や反擊の意思はない。その間に金城鐵壁と賴んだマジノ線は、易々として突破される。フランダース戰役に北進した獨軍は息をもつかず、ソンム河畔のウェイガン線を押破つて、雲霞の如くマルヌ河畔に、オアーズ河畔に迫つてくる。パリはもう指呼(しこ)の間(かん)に見える。レイノー內閣は遽てふためいて首府を遁げ出し、前のポーランド政府と同樣に國內をツ

ールへ、ボルドーへと轉々として彷徨せざるを得なくなつた。

フランス共和國の全面的敗衂である。ドイツ軍は西部戰線に行動を起してより、僅か一箇月と四日といふ六月十四日、早くもパリに入城し、エトアールの凱旋門上に鉤十字(ハーケンクロイツ)の旗を飜へした。それと共にドイツの盟邦イタリアも亦、ドイツ側に立つて愈々英佛兩國に宣戰を布告した。

斯くして六月十七日、ボルドーに於けるペタン佛國新首相によつて、對獨降伏が決定された。フランスとしても口惜しかつたであらうが、久しく人民戰線的な思想に憑(つ)かれて、國民の眞の魂を喪失してゐた今更ながらの悔悟と、イギリスの不信に對する失望とが、フランス人を驅つて此の擧に出ざるを得ざらしめたのだ。

翌十八日ヒットラア總統はムッソリーニ首相とミュンヘンに會合し、對佛媾和條件を前以て議した後、一九四〇年九月二十二日、コンピエーニュの森に於て佛國代表アンジェ將軍以下の委員を引見し、光榮ある獨佛休戰條約に署名を與へた。

その會見の場所は嘗てドイツ自身が前の大戰に敗れ、涙を呑んでフォッシュ元帥の前に屈辱的休戰條約を押付けられた、同じ展望車の中であつたのだ。

歴史のコンピエーニュが一回轉したのである！

一四、アルビオン島の運命

北はノルウェーから、南はフランスの海岸をビスカヤ灣に到るまで歐洲大陸の西海岸線全體を、その掌中に收め得たナチス・ドイツは、今や歐洲大陸から見離されて僅かに一孤島に顚落したイギリスを前にし、おもむろにその上陸策戰を練つてゐる。

空には大爆擊機が大編隊を組んで、ロンドン其他の大都市や要塞地帶に現はれ、毎日のやうに爆彈、燒夷彈の雨を降らせてゐる今日この頃ではある。海峽には快

速艇E・ボートが待機の姿勢をとつて、アルビオンの島影に突入するのを、指折り數へて待つてゐる。

イギリスも然しなほ執拗な反抗を繼續し、時としては同じくその爆擊機を遠く歐洲大陸の空に飛ばせて、フランダースに於けるドイツ軍の基地や、或はベルリン、ラインランド、北海々岸地方に、報復の空擊を反覆してゐるのだ。

イギリスはまだフランスのやうに、ドイツの陣門に降つてゐるのではない。或はこゝ暫くはイギリス流の粘り强い底力を出して、頑張れる所までは頑張るのかも知れない。或は將に來らんとするドイツの英本土上陸を機會に、その政府は大海軍を擁して、大西洋の彼岸にあるカナダに落ちて行くのかも知れない。その場合のイギリスでももはや歐洲的勢力としてのイギリスではなく、もうアメリカの羈絆の下に立つイギリスである。

斯樣に今日の所では、まだイギリスは徹底的に崩壞してゐないけれど、然しそ

れで以てイギリスの勢力が昔日の面影を恢復するといふことは、徹底的望みのないことだ。イギリスはもう過去の遺物である。

嘗てポルトガル、スペインが衰滅したやうに、嘗てオランダが世界の海洋的覇者の地位から辷り落ちたやうに、大英帝國も亦悲しい歴史の中の頁に書き加へられようとしてゐるのだ。

從つてドイツに於ては——まだイギリスが徹底的に滅びてゐないに拘らず、そんなものはもう眼中に置かないことにして——歐洲新體制の新しい秩序を計畫してゐる。

イギリスなき歐洲には獨伊が中心となつて、歐洲人全體の共榮のために、經濟的文化的な大きな單位を作り、それによつて今まで英佛のみによつて搾取されてゐたアフリカ大陸の寶庫を開かうとする計畫なのだ。この共榮圈の運營を謀る價値の基礎は、各民族の世界文化に貢獻せんとする眞摯なる『勞働』の質と量とで

あるといふ。それによりて今迄英米流ユダヤ流に全能の力を持つてゐた黄金は、その魅力を失つて自滅するだらう……といふのがナチス・ドイツの經濟相フンクの聲明なのである。

その意味に於て獨伊と同じ立場に立つ國は、わが大日本帝國でなければならぬ。今に世界は獨伊を中軸とする歐洲圈、ソ聯を中軸とするソ聯圈、北米合衆國を中軸とする米洲圈、そしてわが大日本帝國を中軸とする東亞圈の四つの大きな共榮圈に分たれることだらう。

わが國には滿洲事變勃發以來、國家的な甦生が始まつて、國のイデオロギーの上では、勿論獨伊と肝膽相照らすものがあつた。古い殼の個人主義的自由主義的な殘滓を一掃し、眞に大和民族本來の精神主義的な本元に歸らうとするには、全體主義的な基礎から英米のデモクラシイを排擊せんとする獨伊の行き方と、目標を同じくし得たのである。さればこそ日獨伊の間には既に防共協定の盟約さへ結

ばれてゐたものだ。

然るに事實上わが國は東亞に於て、新しい秩序を建設せんがために、わが國獨特の荊の路を歩んでゐたのだ。この困難な荊の路は、破局と衰退とを豫想するものでなく、現狀を打破して光榮と民族の偉大とへ進まんとする大きな希望であつた。

そしてこれが目標に進むがためには、先づ國運を賭して戰はなければならぬ。その戰ひの過渡期としての經濟的手段は、如何せん英米の許容なくして之れを獲得することが出來なかつた。分り易く言へば東亞新秩序建設を目的とし、之れが正面の敵となつた蔣政權を殲滅し、日滿支の三國へ新しい天地を創造するためには、當分英米の貨幣手段と英米の資材とに依存する外、方法がないと考へられてゐたものである。その考へ方が、ある程度以上に進んでの、獨伊との運命的な提携を躊躇させてゐた所以なのだ。

一五、日獨伊三國同盟の完成

然るに歐洲に於ける形勢がガラリと變つて、ドイツは勝つて勝つて勝ち進んだ。なほ將來と雖も必ず勝つだらう。その情勢が世界を震撼させ、その大きな波の一つが、わが國の岸邊にも打ち寄せた。今迄の考へ方は、これによつて全然改められなければならなくなつたのだ。わが國の視野は、今までよりも遙かに廣く且つ遠いものになつて來たのだ。言ひ換へるとイデオロギーの問題ばかりではなく、經濟的な方面でも、今後英米はわが國に味方するものではない……假令味方するやうな形に見えてもそれはわが日本の偉大なる理想の達成について、依り賴むべきものでないことがハッキリ分つた。

ドイツの勝つたために打寄せて來た波が、わが日本の國民に新たなる自覺を齎

らし、內閣はそれがために倒れた。外國の出來事でわが國の內閣が倒れるなどゝいふことは、一面甚だ腑甲斐ないやうにも考へられるが、實は決してさうではない。それほど日本は世界的に大きくなつてゐるがためである。內閣ばかりではない。既成の政黨も解消した。古い體制は悉く崩壞しようとしてゐる。新體制だ！

新體制に向はんとするわが國の外交的な第一條件は、日獨伊三國同盟の締結であつた。新體制が出來上つて、それからゆつくり外交の政策に移るといふやうな順序のものではなく、外交界の大きな津波が、わが國の岸邊に打寄せて、それで新體制が本氣に考へさせられるやうになつたのだから、その外交の波を整調することが先づ何よりの條件であり、その整調が出來てこそ、茲に始めて新體制が動き出すのである。その意味に於て今回締結せられた日獨伊三國同盟は、到底避け難きわれ等の宿命であつたのだ！

今迄は東亞新秩序の建設にさへ邁進して居れば、西洋のことなどどうでもいゝ

と思はれてゐた。だから外交は『自主獨往』でなければならぬ……歐洲問題などは『不介入』の孤立政策でいゝと主張して、それで筋が通つてゐたかも知れぬ。然しさういふ口先での自主獨往は、英米の經濟に依存して、始めて實行さるべき性質のものであり、從つて『不介入』とは、獨伊に力を藉さぬと言ふ意味に於て、始めて論理が成立つてゐたのである。

所が情勢は正に一變した。孤立して小さい範圍の東亞新秩序を建設するのではなく、もつと廣い、そして高い範圍での『東亞共榮圈』の創造に向つて、わが日本國民の新しい使命が出來たのだ。その使命達成のために、日獨伊三國同盟は極めて力强き手段であり、又保障となるだらう！

然り、日獨伊三國同盟は、わが國の東亞に於ける光榮ある聖業に世界的な意義を與へたものに他ならぬ！

そのことを念頭に置きながら、私は新しい盟邦の一つである所のナチス・ドイ

ッの努力し奮闘し、然も今でもなほ勇敢に戰ひつゝある姿の一斑を描いて、若い讀者諸君にお傳へし、それで以て今度の同盟條約締結に對する些やかな記念の一つとしたいと思ふ。

——了——

昭和十五年十二月四日印刷
昭和十五年十二月七日發行

〔外地定價壹圓六拾五錢〕

(停)
定價壹圓五拾錢
郵送料拾錢

著作者　黑田禮二

發行兼印刷者　東京市牛込區矢來町七十一番地　佐藤義亮

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社

發行所　東京市牛込區矢來町　新潮社

電話牛込
(長)八〇五番
八〇六番
八〇七番
八〇八番
八〇九番

振替東京八〇八番

躍進ドイツ讀本

黑田禮二著

總統ヒットラア

新規格判特製
價・壹圓五拾錢
送料拾錢

本書は一伍長より身を起し、あらゆる困難と障害を乘り切り、押し進み、コンピエーニュの森に世紀の凱歌を奏する迄のヒットラアを、新聞記者として、獨逸に滯在すること數年ヒットラアに直接面會すること二回に及び、日本人中最も彼を知る機會に惠まれた著者が、ヒットラアの自叙傳「我が爭鬪」以上の材料と熱とを以つて叙述せる新ヒットラア傳である。不世出の巨人として全世界の視聽を集めてゐるヒットラアの窺ひ知れざる全貌は、本書によりはじめて明かにされたと云ひ得よう。

内容目次

・運命……・難產の苦み……・一揆……・叛亂……・暗殺……・軍人主義……・出獄の直後……・民を知る者……・議會制否定のための選擧戰……・第一黨へ……・大統領戰の表裏……・『力』を缺いた獨裁……・忍び寄る危機……・一月三十一日……・國民的高揚時代……・國民的革命時代……・新ヨーロッパ大戰……・コンピエーニュの森……他十餘項目

前ナチス東京支部長 ヤーコプ・ザール 高橋健二共著

ヒトラー・ユーゲント

寫眞百七十面

四六判・美本
價・壹圓六拾錢
送料拾錢

今日躍進ドイツの最前線に活躍してゐる人々は概ねヒトラー・ユーゲントの出身であり、今後も愈々決定的にさうなつてゆくであらう。

本書はヒトラー・ユーゲントの生活や活動を種々な角度から映し出した寫眞によつて明示し、解説と相俟つてその全貌を明らかにした。使用寫眞は、悉くドイツ青少年團指導本部より直接に得たもので、一卷よくドイツの眞髓に徹し、併せて新體制下日本の青少年運動に示唆する所多い好著である。

池田宣政著（價・壹圓）

ドイツ愛國物語

敵機八十餘を射落した世界一の飛行大尉リヒトホーヘンを初め、潜航艇エムデンの素晴らしい活躍、或は軍用犬の手柄ばなし等々、一讀愛國の情に胸打たれる烈々たるドイツ魂に輝く勇敢無比の物語ばかりである。

新傳記叢書

文理大教授 文學博士 田中寛一著

ペスタロッチ

貧しき子等の父、驚嘆すべき教育學の天才の尊き生涯が、平易に、しかも感銘深く展開された。教學刷新の聲高き秋、全教師、全家庭に本書を贈る。

板垣鷹穂著

ミケランジェロ

イタリア、ルネッサンスの華ミケランジェロの、驚嘆すべき數々の作品は如何にして成つたか。不世出の天才の歩んだ多難にして尊き努力の一生を見よ。

東大助教授 工學博士 隈部一雄著

ツエッペリン

老境に入りてより獨力で硬式飛行船の建造に着手したツエッペリンはいかに多くの困難と障害とを突破せねばならなかつたか。見よ彼の烈々たる愛國の至情を。

近刊（以下續々刊行）

・福澤諭吉……富田正文
・杉浦重剛……猪狩史山
・本居宣長……久松潛一
・賴山陽……木崎好尙
・川上操六……木村毅
・小村壽太郎……小村捷治
・パスツール……林髞
・ベートーヴェン……河上徹太郎
・キュリー夫人……嵯峨根遼吉
・エヂソン……辻二郎
・アムンゼン……山本一清
・ガリレー……石原純
・ゲテ……高橋健二

各規格版 本體各壹圓